
徳川埋蔵金の謎

ゆ -

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

徳川埋蔵金の謎

【Nコード】

N5975X

【作者名】

ゆ -

【あらすじ】

子供の頃から霊の見える慎吾は、箱根大学の1年生。そこで出会った、赤い眼鏡の先輩・リナ。ひよんな事から2人は、TV局での盗難事件を解決。しかし慎吾は、国内最高の霊能力者と言われる江浜に誘拐されてしまった。徳川埋蔵金をめぐって、番組プロデューサーである系見や、謎の人物が・・・慎吾やリナを狙う。慎吾の霊能力、そしてリナの天才的な数字の感覚で・・・2人は徳川埋蔵金の謎に挑む！

第0話 始まり（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

第0話 始まり

第0話 始まり

1992年6月・・・

「糸見さん！ 第一子である息子さんのご生誕！ おめでとうございます！」

TVSのとある一室。TVリポーターや芸能リポーター、新聞記者、TVカメラマン・・・20数名の報道陣が一人の男を囲んでいる。

糸見「ああ、ありがとうございます！」

報道陣の中心・・・晴れやかな笑顔でインタビューに応じる男。1990年代の日本を代表するコピーライター、そして作家でもある糸見だ。

TVカメラがアップで糸見の顔を捉える。

糸見「おかげさまで昨日の夜。息子を授かりました。

ついに僕もパパとなりました！ ありがとうございます！」

短髪で端正な顔立ちの糸見。特徴である細目はたれ目になり、終始口元のゴムが緩んだがごとくニヤニヤとしている。

「結婚からちょうど1年。

産まれたばかりの息子さんのご様子をお聞かせください！」

一人の芸能リポーターが糸見氏のそのニヤけた口元にマイクを近づ

けた。

糸見「ええっと……。そうですね。」

妻の陣痛から出産までわずか2時間という超安産でした。

息子は……。そうですね、口元は妻に似てかわいらしいんですけど。

まあ、正直顔は……。猿でした」

報道陣がどつと笑う。

「出産時の息子さんの体重はいくつでしたか？」

今度は別のベテラン女性リポーターが糸見氏にマイクを向けた。

糸見「4260gです」

報道陣から「おーっ」という深い歓声が沸き起こる。

「これはもう、産まれた時から元気なお子さんという感じですね」

糸見「ええ。僕と違って、大物になりそうな予感がしますね」

その言葉に報道陣はまたしてもどつと笑った。

「息子さんのお名前はもうお決まりになりました？」

3人目のリポーターが糸見氏にマイクを向けた。

糸見「ええ。産まれる前はね、日本男児らしく太郎にしよう！って

決めてたんですが・・・」

「違うお名前に？」

糸見「息子がね。その名前ではイヤだっではっきり言っんですよ」

3度目の笑いが報道陣を襲う。

「赤ん坊の息子さんが、太郎という名前を拒否した？」

糸見「ええ。あ、信じてないでしょ！ホントなんですよ！

太郎って呼んだら、すぐ大泣きするんです」

「では、まだお名前は思案中という事ですか？」

糸見「いや。決めました。実は色々な名前で息子と呼んでみたら・・・

1つだけ、息子が笑顔になる名前がありましたね。」

「なるほど。反応したその名前を、息子さんに名付けたわけですね？」

糸見「ええ、その通りです」

「では・・・是非、息子さんの名前を！」

今まで以上に多くのリポーターが糸見氏にマイクを近づける。

糸見「ええっと。ほら、ちょっと大きめに産まれてきた子ですからね。名前は・・・」

カメラを確認した糸見。そしてカメラマンも糸見をアップにしたその瞬間……

直後その会見を放映していたTVSのワイドショーがCMを流し始めた。

TVではよくある、重大発表前のCMである。

1分半ほどのCMが明けると、先ほどの会見の続きが放送された。

「是非、息子さんの名前を！」

今まで以上にリポーターがマイクを糸見氏に近づける。

糸見「ええつと。ほら、ちょっと大きめに産まれてきた子ですからね。名前は……」

全ての始まりは……

ここからだった……。

（第1話へ続く）

第0話 始まり（後書き）

順番が前後しますが、【アマデウスの謎】の前作になります。【アマデウスの謎】を読んだ後で、こちらを読むと・・・色々な接点があり、楽しめるかと思います。ちなみに50話足らずで終了する予定なので。

第1話 出会い（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

第1話 出会い

第1話 出会い

2012年 4月2日・・・。

箱根大学では大きな体育館の中、盛大な入学式を執り行っていた。その入学式に参列してる新大学生の中に・・・慎吾はいる。

身長は162cmと小柄。髪の毛はクセっ毛があり、沖縄出身にしては線が細い。童顔のため、大人びたスーツ姿は、正直着こなしているとはいえなかった。

つい先月、沖縄のとある高校を卒業。大学受験で見事一発合格を勝ち取り、第一志望であった箱根大学史学部に進学。

慎吾「・・・。」

大学学長の長つたらしい話・・・周りがあくびを連発する中、慎吾は目を輝かせて耳を傾けている。

初めての大学生活。初めての一人暮らし。初めての箱根の土地。

慎吾にとって、見るもの聞くもの感じるもの・・・その1つ1つが期待で胸一杯になるものだった。例えばそれが・・・ほとんどの生徒が聞き流している学長の講話であっても。

・・・。

長い入学式が終わった後、新人生を待っているのは学部ごとのオリ

エンターション。真面目な慎吾は大学生活における注意事項や、授業登録の案内について担当者の話に真剣に耳を傾ける。

配布された資料にしっかりと目を通し、時にはボールペンで資料のいたる所にチェックを入れていた。

大学の授業は「専門科目」と「共通教育科目」の2つに分けられる。

「専門科目」は慎吾の属している史学部の学生だけが受講する授業の事であり、「日本古代史A」「江戸文学」といった授業がある。

「共通教育科目」は、学部学科をとわず全ての学生を対象にした授業の事であり、専門科目と違い他学部の生徒と一緒に授業を受ける事になる。「心理学入門」や「論理学入門」他、100科目近い授業が用意されている。

資料を見ると授業内容や担当教官の案内があり、慎吾はこれからどの授業を選択しようかとワクワク感いっぱい悩んでいた。

箱根大学の授業登録は、ネット登録方式。箱根大学に限らず、最近の大学での授業登録はネットを介して行う事が多い。

自宅にパソコンを持たない慎吾は、大学のコンピュータ室で授業登録を済ませていた。実際に授業が始まるのは数日後。

（慎吾「早く・・・授業を受けたい！」）

この気持ちは日々膨らんでいった。

・・・。

2012年4月11日（水）。

待ちに待った大学の授業初日。この日最初の授業は、共通教育科目である「マス・メディア」である。

初めて大学で受ける授業に緊張している慎吾。引っ込み思案な性格ゆえ、目立たぬよう広い教室の一番後ろの左側の席に座った。3人が座れる横長の机の一番左端に座り、教室内を見渡す。

慎吾「・・・」

高校の時よりもさらに大きな教室。大きな黒板。多くの生徒。高校と違って、みな私服であるというのも違和感を覚える。

何よりも大学にはいろんな人がいる。

一番前の席には・・・インドネシアからの留学生が座っている。どう見ても30を過ぎたおじさんにしか見えない生徒もいた。綺麗に化粧をした女子大生が多いのも不思議な光景である。

リュックを背負ったまま授業を受けようとするオタクっぽい男子学生もいれば、上下ジャージ姿で授業を受けようとする女子学生もいた。

かと思えば派手な洋服、アクセサリーに身を包んだ女子学生もいる。

一番後ろの右側の席・・・慎吾の反対側の右端の席には2mは越え

ているであろう大きな男子学生もいた。きっとバスケの選手か何かに違いないと慎吾は思う。

慎吾「……」

大学の教室で見る光景1つ1つが、慎吾に新鮮な感覚を与えた。

しばらくすると、白髪交じりのメガネをかけた賢そうな男が現れ、教壇に立つ。年齢は50歳前後といったところか。この「マス・メディア」の講師である経済学部の教授だ。

教授はメガネをかけ直し、学生を一瞥したあと口を開いた。

教授「えー……みなさん、初めまして。単位を落として2回目の人もいるかな。」

ははは。この授業では、日本のマスメディアにおける……

「

真面目な慎吾は、真新しいノートに教授の言う事をいちいちメモっている。3人がけの左側に座っていたが、残り2つは空席である。

授業が始まって5分。慎吾の1つ飛ばした右側の席に、遅れて着席する学生がいた。

赤いメガネで大きなポニーテール。慎吾はちらっとその女性を見た後、特に気にする事もなくまた教授の話に耳を傾けた。

教授「じゃ、講義日程を書いたプリントを配りますので……」

慎吾は前の席の生徒から渡されたプリントを、赤いメガネの女性に

渡した。女性は慎吾と目を合わせる事無く、無言で受け取る。

プリントを渡す際、初めて正面から女性の顔を見た。とても目立つ赤いメガネに、大きなポニーテール。少しばかり目つきが鋭く、目鼻立ちははつきりとした端整な顔立ち。慎吾の辞書にある言葉で言えば【美人】である。

女性は右手で頬杖をついたまま、ただ眠たそうに教授の話を聞いている。

慎吾「・・・」

少しばかり女性を気にしつつも、慎吾は再び教授の話に集中した。

大学の授業は高校と違って長く、100分単位で授業が行われる。慎吾は長い時間にも集中を切らさず、教授が板書する内容をしっかりとノートにとっていた。

何気に慎吾が右側を見ると・・・赤いメガネの女性はノートもとらず、ずっと右手で頬杖をついたまま。時々小さいあくびをしていた。

ふと教授が生徒に向けて講義に関する課題について言い出した。

教授「って事で・・・この授業を受講している生徒諸君には最初の課題を与えたいと思う」

一瞬教室の中がどよめく。

教授「例えば雑誌社とか、例えばTV局とか、例えば新聞社とか・・・

・
日本のマスコミが関係している場所へ足を運び・・・

仕事内容について取材し、それをレポートとしてまとめてくる事！」

言い終わらないうちに、生徒から「え〜」という重苦しい声が聞こえた。

教授「ははは。まあ取材といったら、何かしら気が引けるだろうか
ら・・・

見学で構わない。職場見学レポートな。小学生の頃、やつ
たろ？

もちろん自分達で、その職場の見学依頼もする事。それも
課題の1つだぞ」

慎吾は初めての大学からの課題について、一生懸命ノートにメモを
とる。

教授「最初の課題の締め切りは5月いっぱいだ。

そうだな・・・ゴールデンウィークなどを利用するといい。

400字詰め原稿用紙5枚以上という事で！」

教室の中がさらにどよめいた。

「え〜・・・」

「原稿用紙5枚も」

「めんどくせー」

教室のいたる所から「イヤだな」「めんどくさいな」といった声が聞こえてくる。

教授「はっはっは。新入生にとっては最初の大学レポートかな。頑張るように！」

何か質問は？」

教授の目の前にいた男子学生が挙手した。

教授「はい、君」

指さされた生徒は、座ったまま声をかける。

生徒「その取材は、個人でなくグループでも構いませんか？」

教授「ああ、構わない。1人でも5人でも、同じ場所に取材や見学をしてOK！」

ただしレポートは、各人の言葉でしっかりと書き上げる事だ」

生徒「わかりました。」

教授「他に質問は？」

今度は教室の真ん中あたりに座っていた女子学生が手を挙げた。

教授「じゃあ、真ん中の君！」

生徒「具体的にどんな内容を書けばいいのでしょうか？」

教授「それも自分で考える事」

生徒「あ、じゃあ・・・。」

例えば去年のこの授業のレポートではどんな事書かれていたか・・・

よろしければ聞きたいのですが」

教授「はっはっは。君、頭いいね。そうだな、去年のレポートだと・・・

マスコミの仕事に就くきっかけをまとめた生徒もいたし・・・

この仕事のつらい事や、やりがいを感じる事を聞いてまとめた生徒もいた」

質問した生徒はうんうんと頷いている。

教授「日本のマスコミにおける批判的内容をレポートした生徒もいたな。」

参考になったかな？」

生徒「は、はい！　ありがとうございます！」

教授が教室の生徒を再度見渡す。

教授「他に質問は？」

慎吾は手をあげようか迷っていた。どうしても教授に聞きたい事があったのだ。

慎吾「・・・」

引っ込み思案な性格だが、この日大学での初授業というワクワク感が小さな勇気を与えた。

慎吾「は・・・はい！」

思い切って手を挙げる慎吾。

教授「お？じゃあ、一番後の席の君！」

そして、教授に指名された。

慎吾「あ・・・えっと。原稿用紙5枚以上と言ってましたが・・・」

教授「ああ。まさか3枚でもいいかとか言わないよな？ だとしたら答えはノーだ」

慎吾「いえ、その・・・例えば原稿用紙30枚とかでもいいですか？」

この日一番のどよめきが教室内を埋め尽くした。教授は意表をつかれたようで、一瞬目を丸くする。次の瞬間笑いながら教授は応えた。

教授「はっはっは！　もちろんさ！　何なら50枚でも100枚でもいいぞ！」

教室内のどよめきは耳に入っていない慎吾。教授の言葉に目を輝かせる。

慎吾「あ！50枚でもいいんですね！　ありがとうございます！」

依然ザワザワしている教室の声は耳に入らない慎吾は、笑顔でノートにメモしていた。

【レポートは50枚でもOK】

女性「あんださあ・・・」

ふと慎吾の右側から声が聞こえる。慎吾はニコニコ顔のまま右を見ると、赤いメガネの女性が眉をひそめ、右手に頬杖をついたまま慎吾を睨んでいた。

慎吾「・・・」

鋭い視線を受け取った慎吾は、顔をこわばらせる。

慎吾「あ・・・何・・・か？」

赤いメガネの女性は睨み付けたまま口を開く。

女性「あんださあ・・・」

女性は慎吾を見て何か言いたげな表情を浮かべたが・・・口から出

ようとした言葉を、大きなため息が阻止する。

女性「はあ……いや、いい」

女性は吐き捨てるように慎吾に短く言い放ち、また黒板の方を向いて2度目の大きなため息をついた。そして小さな声でボソツとつぶやいた。

女性「死ねばいいのに」

（慎吾「え!？」）

慎吾には確かにそう聞こえた。

（慎吾「し……死ねばいいのに?　　ぼ、僕が?」）

何故、彼女がそんな言葉をボソツと言ったのか全く理解できない。

「理由はわからないけど、何かすごいひどい事をしたらしい」と自分を責める慎吾は、見えない罪悪感に襲われた。

女性のつぶやきの後、講義が終わるまで……赤いメガネの女性を一切見ることができない。

慎吾「……」

慎吾にとって、大学で初めての授業は……3時間ぐらいに感じら

れる長いものとなった。

この時、慎吾はまだ知ることはなかった。

この赤いメガネの女性と・・・

徳川埋蔵金の謎に挑戦する事になろうとは・・・。

（第2話へ続く）

第1話 出会い（後書き）

次回予告

「死ねばいいのに・・・」

この言葉が頭から離れない慎吾。パソコン室で作業をしようと、席に座ろうとした瞬間・・・

隣に座っていた赤いメガネの女性と目が合ってしまう。
そして・・・

次回 「第2話 笑顔」

第2話 笑顔（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾。

初めての大学の講義で、空気の読めない発言をしてしまう。隣に座っていた、赤い眼鏡・大きなポニーテールの女学生に

「死ねばいいのに」

と言われてしまった。

第2話 笑顔

第2話 笑顔

2012年4月18日（水）。

大学で初の講義を受けてから、1週間が過ぎた。

ようやくキャンパスの雰囲気や、授業に慣れてきた慎吾。全ての講義を欠かさず出席し、大学一真面目とも思えるほど、毎日勉強に励んでいた。

大学の講義は、慎吾にとって非常に興味深いものばかり。軽快なトークで講義を楽しく盛り上げる教授もいれば、ちょっとした事ですぐ怒鳴る教授もいる。高校ではけして習うことのない内容で、どの講義も新鮮な気持ちで受けていた。

ただ1つの講義を除いて。

大学で最初に受講した「マス・メディア」の2回目の講義。慎吾は1回目に受講した時と同じ席に座った。そして慎吾の席の1つとばした右の席には・・・先週と同じ赤いメガネの女性が座っている。彼女を確認した瞬間

「死ねばいいのに」

この言葉を思い出した。

どの講義も短く感じるのに、この「マス・メディア」の講義だけはどうしても長く感じてしまう。右側にいる女性の方をちらりとも振

り向くことが出来ない。

以前として、何故彼女が「死ねばいいのに」と言ったのかは不明。講義中とはにかく教授に質問したい事があっても、慎吾は終始ダンマリを通した。

いつ何時、また「死ねばいいのに」と言われないかと不安になり、ちよつとしたトラウマ状態だ。

（慎吾「早く終わって欲しい」）

そう思ってしまう唯一の授業。そんな2回目の「マス・メディア」の講義が、何事もなく無事に終了すると・・・慎吾はすぐに教室を出て行った。

・・・。

昼休み。

慎吾は大学の「パソコン室」に入っていた。

このパソコン室は大学構内に10カ所設置され、大学生は出入り自由。箱根大学・学生証に埋め込まれているICチップをパソコン横のチップ読み取り装置にかざせば、ネットでもワープロでも自由に使う事ができる。

約50台のパソコンが設置された部屋の中。いつものクセで一番後ろのパソコンの方へと向かう。奥から2番目のパソコンが空いてい

たので、そこに座ろうと持っていたリュックを下に降ろした。

座ろうとした瞬間・・・その隣、一番奥のパソコンに座っていた人物と目が合う。

慎吾「あ・・・」

思わず声を出した。あの赤い眼鏡の女性だ。

慎吾「・・・」

手前にひいたパソコンチェア・・・ 慎吾は静かに戻して立ち去ろうとする。

女性「ちよつとあなた・・・」

その女性は、リュックを持ち直した慎吾に声をかけた。

女性「あんたさあ、普通に座りなさいよ。」

私の顔見てその場を去ろうとするなんて・・・失礼じゃない？」

そう言う女性自分のパソコン画面に視線を戻す。

慎吾「あ・・・えー・・・ あー・・・ はい」

しどろもどろに答える慎吾。戻したパソコンチェアを再度ひいてゆつくりと座った。

慎吾「・・・」

隣の女性を気にしながら、学生証を読み取り装置にかざしログインする。

女性「あたしさあ。人に気を遣われるのって、大っ嫌いなんだよね」

女性は自分のパソコンから視線をそらさず慎吾に声をかけた。

慎吾「あ．．． はい。すみません」

女性に向かって頭を下げるが、相手は視線を合わそうとせずにパソコン操作をしている。

慎吾「．．． ．．． 」

隣を気にしつつもネットエクスプローラーを立ち上げ、とあるページを検索し始めた。

慎吾がパソコンの前に座って3分。

女性「ちっ！」

隣の女性が不意に舌打ちした。

一瞬、自分の事に対してかと思った慎吾。ちらつと横を見ると、女性は正面のパソコンしか見ていない。どうやら自分の事ではないようだ、ほっと胸をなでおろす。安心したのも束の間。

女性「マジかよ！」

またしても隣から声が聞こえた。小さな声ではあるが、慎吾にははっきりと聞き取れる大きさだ。

慎吾は気にしないように、自分の作業に集中する。

女性「うわ、ありえねー！」

慎吾「・・・」

女性「ここで！？　コレ、くる！？」

慎吾「・・・」

しかし、隣から頻繁に気になる声が聞こえてくる。どうやら女性は、パソコン画面に向かって小声で叫んでいるようだ。

慎吾は・・・女性のパソコン画面を覗かないようにしてた。覗くとまた何かトラブルになりそうな気がしたからだ。

しかし・・・とうとう女性はこの言葉を発してしまう。

女性「死ねばいいのに・・・」

慎吾「・・・」

ハッキリと聞こえたこの言葉は、慎吾の胸を深くえぐる。おそろおそろ横を見ると、女性はパソコンの画面を向いたままだ。

慎吾「・・・」

意を決して、チラッと女性のパソコン画面を覗きむ。そして驚いた。

（慎吾「ま・・・麻雀!？」）

女性のパソコン画面には、麻雀ゲームと思われるウィンドウが開いている。麻雀ゲームに没頭し、どうやら自分が不利な局面になると舌打ちしたり、暴言を吐いているようだ。

突然女性が振り向き、慎吾と目が合う。

慎吾「あ・・・」

女性「何？」

慎吾「あー・・・いや、さっきから何か叫んでたので・・・気になつて」

女性は目を丸くした。

女性「あれ？ 私なんか言ってた？ やだなー、声出てたんだ。

うん。気にしないで」

女性はまた自分のパソコン画面に視線を合わせる。この後、どう会話をつなげていいかわからない慎吾。

慎吾「あ・・・麻雀、好きなんですね・・・」

自分なりに言葉を投げかけてみた。

女性「・・・・・・」

女性は目を細くして、また慎吾の方を見やる。

女性「あのね・・・気を遣われるの嫌いって言ったでしょ。

無理に会話しなくていいから。あんたは自分の作業だけやってりゃいいのよ」

叱られている感覚になる慎吾。

慎吾「あ・・・そ、そうですね。自分は・・・

TVSのホームページチェックしてるんです、ハイ・・・」

パソコン画面を指さす慎吾を見て、女性は小さなため息をついた。

女性「だからさー。無理に会話しようとしなくていいっての！

はい！ あんたはTVSのホームページ。私は仕事！

それでOK！ もうしゃべりかけないでいいから！」

慎吾「え、あ・・・はい。ごめん・・・なさい・・・」

女性は鼻息あらく、また麻雀のパソコン画面を見つめ始めた。

女性「まったく・・・」

粗い手つきでマウスをクリックする女性。しばらくすると・・・

女性「ん？」

何かに気づいたような表情を浮かべた。背筋を伸ばし、慎吾の方を向いた後声をかける。

女性「ちよつとあんた。さっき、TVSのホームページ見てるって言った？」

慎吾はキーボードを打とうとした手を止め

慎吾「・・・」

顔だけ女性の方に向け、無言で見つめる。

女性「だから、今あんたが見てるの・・・TVSのページ？」

慎吾はちよつと困った表情を見せた後

慎吾「あー・・・僕は・・・あなたに・・・

しゃべっていいの・・・でしょうか？」

女性は眉をひそめた。

女性「あー！ さっき、無理に会話するなって言ったのを気にしてるの？」

もうあんた・・・めんどくさいわね！..」

そして・・・

女性「イライラする・・・死ねばいいのに」

慎吾に聞こえないよう、小さな声で言っ たつもりだった。

慎吾「・・・・・・・・」

しかしその言葉は・・・しっかりと慎吾の耳に入る。2度目の「死ねばいいのに」は、さらに深く胸をえぐり、泣きそうな表情をする
慎吾。

そんな慎吾の様子に気づいた女性。

女性「あ・・・ひょっとして聞こえてた？」

慎吾「・・・・・・・・」

どんな言葉を返していいのかわからない。

女性「あー、気にしないで。【死ねばいいのに】は私の口癖だからさ。

たまに相手に聞こえるように言っちゃうのよねー」

言いながら赤いメガネをかけ直し、ポニーテールを軽くなでた。

女性「だから、今あんたが見てるの・・・TVSのページなんです
よ？」

慎吾は相変わらず泣きそうな顔で声を出す。

慎吾「はい・・・」

女性は鋭い目つきでさらに慎吾に聞いてきた。

女性「これ、絶対あれでしょ！ マスメディアの授業のヤツ！」

慎吾「はい・・・」

初めて女性が慎吾を見てニヤリと笑った。

女性「あー・・・やっぱりね。あんたさあ、TVSに見学に行くの？」

慎吾「はい・・・。ホームページで局内見学の案内もあったので・・・」

おずおずと頷く慎吾。その様子を見た女性は、トレードマークの赤メガネをしっかりとかけ直し・・・

女性「私も連れてって！！」

さらなる笑顔で言葉を発した。

慎吾「え！？」

慎吾は目を丸くする。

女性「どれどれ？」

女性は慎吾のパソコン画面を覗き込んだ。

女性「あー、なるほどね。登録フォームに氏名や年齢、指定された
見学時間・・・」

必要事項記入して送信ってわけね。ふむふむ。」

慎吾を押し分け、TVSの見学案内のページをさっと目を通す。

慎吾「・・・・・・・・・・」

女性の大きなポニーテールに、視界をさえぎられる。

（慎吾「あ・・・・・・・・いい匂い・・・・・・・・」）

心地よい香りが慎吾の鼻をついた。

女性「あつた！ 見学者人数。ねえ、あんたさ、一人で行くつもり
だった？」

急に女性は慎吾の方を向いた。

慎吾「え・・・・・・・・・・」

ドキッとする慎吾。

慎吾「あ・・・・・・・・はい。一人で行くつもり・・・・・・・・です」

女性はニヤリと笑う。

女性「そうよねー。あんた新入生でしょ。まだ友達とかいなさそう
だしね。はは。」

OK！ じゃあ、見学者人数【2人】と・・・・・・・・」

慎吾のPCキーボードを勝手に操作した。

女性「はい。じゃあ他の必要事項はあんたが記入しといてね」

女性は満足した顔で、再び自分のパソコンを操作し始めた。

慎吾「あの・・・」

女性「なに？」

さっきと違って、機嫌の良さそうな表情でこたえる女性。

慎吾「なぜ・・・僕と？」

女性「いい質問ね。嘘つくの嫌いだから今のうちはっきり言っわね。」

あんたさ・・・

多分田舎者でしょ？」

右手で眼鏡を軽く持ち直した女性は、遠慮せずに目の前の男に【田舎者】と言い放つ。

慎吾「あ・・・はい。沖縄から来たばかりなんです・・・」

そしてそれを肯定する慎吾。

女性「やっぱりね、見ればわかるわよ。ふふん」

鼻をツンと上に上げ、満足げな表情を浮かべる。

女性「沖縄なら、地下鉄とかJRとかさっぱりわからないでしょ？」

慎吾「は、はい！ あれ、全然わかりません。

いつも切符売り場で困ってるんです・・・」

正直に応える慎吾。

女性「私がTVSまで連れてってあげるわよ」

慎吾「え！？」

予想外の言葉が返ってきた。

女性「優しいでしょ、私」

慎吾「え！ そ、そうしてもらえたら・・・嬉しいですよ！！

ホントは僕・・・TVSまでたどり着けるか心配で・・・」

女性「でしょー。うんうん。」

女性は目をつむり、^{うなず}頷く。慎吾は、初めて女性に対して笑顔を見せた。

慎吾「ホントは、とっても優しい人なんですネ・・・

ありがとうございます！！」

女性「いや、いいのよ　ふふん！」

深々とお辞儀する慎吾に、鼻を高々と上げる。

慎吾「じゃあ、早速・・・」

TV局見学・・・2人という事で送信しておきますね！」

その言葉を聞いた女性がニコツと笑った。慎吾は一生懸命、ページを熟読して送信内容に誤りがないかチェックしている。

女性「・・・」

しばらく女性は慎吾の方を見ていた。

慎吾「・・・」

慎吾は女性の視線に気づかずパソコン画面を凝視している。それを見て、だんだんと女性の表情が曇ってきた。

女性「あんたさあ・・・」

耐えきれずといった表情で慎吾に声をかける。

慎吾「え？　あ、はい・・・　何でしょう？」

慎吾は笑顔で女性に返した。

リナ「・・・」

いったん天を見上げた後、すぐに慎吾を睨み付ける。

女性「あなたと私、TVSに行くんでしょ？」

イライラ気味の声をかけてきた。

慎吾「え．．．はい．．．」

女性「じゃあさ．．．お互い、連絡取り合えるようにするのが普通じゃない？」

慎吾「あ！そうか！ えっと．．．どうやって．．．？」

首をかしげる慎吾。さらに女性はイライラを募らせる。

女性「普通携帯でしょ！ もう、めんどくさいなー、君．．．」

慎吾「あ、そうか！ そうですよ！ 赤外線通信で．．．」

女性「ちよつと待った！！」

慎吾「え？ まだ何か．．．？」

女性「うーん．．．」

女性はメガネの中心を人差し指で押さえ、数秒程悩んだ表情を見せた。

女性「ええい！ 田舎者だから仕方ない！！」

今度は諦めた表情を見せる。

女性「あのさ！ 普通、携帯のアドレスとか交換する前にさ・・・
自己紹介するのが普通でしょ！ てか、人としての礼儀、
マナー！」

慎吾「あ・・・」

女性の言葉を受けた慎吾。

慎吾「あー！ そうだ！ 僕、慎吾って言います。よろしく！」

笑顔のまま、お辞儀した。

女性「ふー。ま、いいわ。私、リナ。はい、じゃあ携帯出して。赤
外線でつと・・・」

2人はお互いの携帯連絡先を交換する。リナは慎吾の携帯を指さし

リナ「この大学で、私のアドレス知ってるのって・・・

今んとこあんただけよ。貴重だからね」

と言い放った。

慎吾「うん。リナさん、ありがとう！ ホントに優しい！

正直、僕・・・田舎者だから・・・

都会のルールとかマナーとか常識・・・いっぱいわからな
いと思います。

何かあったらまた教えて下さい！」

屈託のない笑顔をリナに見せる慎吾は、リナに対する苦手意識が完全に消えていた。

リナ「は？ めんどくさ。とにかくTVS行く日程決まったらメルしてよね」

慎吾「はい！ あの・・・ あと1つ聞いていいですか？」

リナ「何？」

ニコニコしながら慎吾が言う。

慎吾「リナさん、年、いくつ？」

リナ「・・・」

天をあおぐリナ。

リナ「あんたに教えるの・・・正直めんどくさいわね・・・」

慎吾「え？ 年を教えるの、そんなに大変な事です？」

リナ「違う違う。あんたに都会のマナーとか常識を教えるのがよ。

田舎の沖縄だと『県民、みな兄弟』みたいな感じなんだろうけどさー」。

都会じゃ、女性の年齢を聞くのは普通・・・」

慎吾「・・・」

ずっとニコニコしている慎吾。

リナ「……ま、いいわ。

私19歳。工学部の2年だからあんたより先輩よ」

リナは小さな溜息のあと、自分の年齢を明かした。

慎吾「あ、先輩ですか！　じゃあ言葉遣いも気をつけます！　リナ先輩！」

リナは複雑な表情を浮かべる。

リナ「だから気を遣わなくって……まあ、いいわ。好きにして。

はい、じゃあお互いの作業に戻って仕事しましょうね」

慎吾「あ……はい。ホントありがとうございます！　リナ先輩！」

何度も何度もお辞儀する慎吾に……

（リナ「大学で『先輩』って呼ぶヤツ……いねーって……」）

少しばかり辟易^{へきえき}していたリナ。

リナ「まあ、でも……これで……

『マス・メディア』のレポート書いてくれるヤツ、キープ
つと……」

慎吾「え？」

リナは無意識に声を出していた。

リナ「なにせ、課題50枚でも喜んで書くタイプだしね。ふふふ・・」

慎吾には聞こえていないつもりだったが・・

慎吾「・・・・・」

もちろん慎吾の耳に、その言葉は届いている。

リナ「よし！ 国土無双！！！！ 今日はいいい感じ〜！」

麻雀ゲームに集中しつつ、声がもれ続けているリナ。

慎吾「・・・・・」

リナの見せた優しさの裏には・・・彼女のレポート執筆に、自分が利用されると知った慎吾。

（慎吾「でも・・・」）

不安な都会の地でナビゲートしてくれる・・・そんなリナの親切心の方が、慎吾にとっては大きかった。

慎吾「・・・・・ まあ、いつか」

見学人数【2人】のまま・・・見学希望の登録フォームを、TVSに送信した。

(第3話へ続く)

第2話 笑顔（後書き）

次回予告

TVSへ向かう新幹線の中で、リナの意外な特技を知った慎吾。そしてTV局では・・・さらなるリナの特別な能力に驚かされる事になる。

次回 「 第3話 リナの特殊能力 」

第3話 リナの特特殊能力（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 F i r s t s e a s o n

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾。

初めての大学の講義・・・隣に座った1つ上の先輩リナに「死ねばいいのに」と言われてしまう。

そのリナと・・・課せられたレポートのため、TV局へ行く事になった。

第3話 リナの特特殊能力

第3話 リナの特特殊能力

2012年5月3日（木）。

慎吾「遅いな．．． リナ先輩．．．」

携帯の時計を確認しながらつぶやく慎吾。

箱根湯本駅・駅前。午前10時にリナと待ち合わせていた。

現在の時刻は、午前11時30分。

時間にきっちりしている慎吾、すでに2時間も駅前で待ち続けている。

何度もリナの携帯に「いつ着くんですか？」とメールしたが、そのたびに「あと5分」という4文字が戻ってくる。

．．．．．。

リナが慎吾の前に現れたのは．．．12時前。

待ちくたびれた表情の慎吾が、リナに声をかける。

慎吾「リナ先輩．．． 2時間遅刻ですよ．．．」

特に慌てて来た様子もないリナ。

リナ「あー、ちょっと準備に時間がかかってね。女はそういうもの

なの」

慎吾「でも2時間は・・・厳しいです・・・」

小さなため息をつく慎吾。

リナ「は？ 男が女を待つのは当たり前だっつーの。

それにあんた沖縄出身でしょ？

沖縄の人って、時間にルーズって聞くわよ？」

慎吾「いやいや・・・みんながみんな、そうってわけでは・・・

てか今日のリナ先輩、なんかおめかししてません？」

赤いワンピースに、赤いヒール。セレブっぽい白い帽子とブランドものの白いバッグ。

赤と白を意識したコーディネート・・・大人びたりナの姿がそこにはあった。

大学での私服とは違った雰囲気のリナを目の当たりにした慎吾。

慎吾「都会の女性って感じですね・・・」

思った事を口にする。

リナ「は？ それ、褒めてんの？」

駅構内に向かいながら、リナが眉をひそめた。

慎吾「もちろんですよ！ いつもより化粧も濃いし！」

リナ「……」

さらに眉をひそめるリナ。

リナ「あんたさあ。天然で人に殺意与えるタイプよね……」

慎吾「いや、ホントに綺麗だなんて思ってますから！」

リナ「はいはい。どーも。まああんたのために、おめかししたんじゃないし。」

てか、あんた。リュック背負ってモロ田舎者丸出して感じだね」

慎吾に負けじと、リナも思った事を素直に口にする。

白のＴシャツにジーンズ。リュックを背負った非常にラフな格好の慎吾。

慎吾「いいですよ。田舎者は田舎者らしくてね」

屈託のない笑顔を見せる慎吾は、リュックを背負い直した。

リナ「……。はいはい。じゃあ行くわよ。TVSなら1時間半ぐらいで着くから」

沖縄の人間が都会に出てきて、最初に戸惑うのが……
電車や地下鉄の乗り方である。

路線図の見方、切符の買い方、乗り換えの仕方、改札口の通り方……

・
これら全てが不安の対象となる。

リナ「小田原って駅で、新幹線に乗り換えるから。まあ私についてきなさい」

慎吾「はい！」

ナビゲート役がいてくれると、路線に関する全ての不安が払拭される。箱根に来て、初めて不安無しで電車や新幹線に乗る慎吾。リナの遅刻の事はすぐに忘れ去った。

・・・。。

2人は小田原駅で、新幹線に乗り換え・・・JR新幹線、こだま638号の自由席に座っていた。

リナ「2駅だけど、30分ぐらいかかるから。寝るなり本読むなり、好きにして」

そう言うとりナは、バッグの中から小さなノートパソコンを取りだし起動する。

慎吾「あれ？　こんなところでパソコンですか？」

リナ「あー、うん。ちよつと仕事あるの。」

30分あれば半荘2回はいけるし
ハンチャン

慎吾「え？　麻雀やるんですか？　新幹線の中で？」

リナ「だからこれ、仕事だつて。あんたさあ・・・

私が、ただの麻雀好きと思つてない？」

慎吾「思つてますよ？」

正直に返す慎吾。

リナ「あのね、このネット麻雀は電子マネー賭けてやるサイトなの。

場代を払つて、後は打つてゐる連中でリアルマネーのやりとりするのよ」

慎吾「ええ！？ オンラインカジノ・・・みたいなヤツですか？」

リナ「ま・・・合法じゃないサイトだけどね。アングラサイトの１つよ。」

慎吾「アングラ？」

リナ「・・・。アンダーグラウンド。つまり表には出ないサイトの事よ。」

紹介制度で登録して・・・あー、説明めんどくさい！」

リナはパソコンのキーボードをカタカタ打ちながら慎吾への説明を中断した。

慎吾「で、でもそれ・・・ギャンブルでしょ！？

よく大学生がパチンコや競馬にハマつて借金！とか聞きます。」

ヤメましょうよ、リナ先輩!!」

リナ「あー、はいはい。全然大丈夫だから。私、死ぬほど麻雀強いし。

このサイト、名前は公におおやけされてないけど・・・

プロも多い有名なサイトなの。その中で、超勝ってるから。はい、ちょっと集中するからダメってね」

そういうとリナは、キーボードをさらに高速で操作し始める。

慎吾「・・・」

慎吾は口から出そうな言葉を飲み込み、パソコン画面を静かに覗きこんだ。

・・・。

30分後、2人の乗った新幹線は品川駅に到着。ここで東海道本線に乗り換える事になる。

慎吾「リナ先輩すごい! 連続で1位を取ってましたよね?」

少し興奮気味の慎吾がリナに声をかけてきた。

リナ「言ったでしょ。麻雀は死ぬほど強いって」

慎吾「あ、あの・・・今の30分で、どれだけ勝ったんですか?

お金」

リナ「……ふん、まあいいわ。

場代さしひいて、純利益は1万円ちよっとってトコね」

慎吾「リナ先輩すごい！！ 30分で1万円！？

何で勝てるんですか？ 秘密があるんですか！？」

慎吾はさらに興奮した様子で語り続ける。

リナ「うつさいな……」

あんたはさ……ギャンブルしちやいけないタイプだから」

慎吾の肩をポンと叩く。

リナ「これ以上その話題は禁止。

今度は新橋ってどこまで行くから、切符買って来て」

そついうと慎吾を押し出した。会話を続けたかった慎吾だが、しぶしぶ切符を買いに行く。

（リナ「まあ……」

レポート書いて貰うから、ここは我慢我慢」）

券売機の前に立つ慎吾を見て、リナは小さく溜息をついた。

………。

予定では正午についてるはずだったTVS。2人が到着したのは午

後2時過ぎだ。

リナ「はい、私の役目はここまで。後はあんた」

TVSの玄関前・・・右手を腰に当てたりナがアゴで玄関をさす。

慎吾「了解です。ここまでの案内、ありがとうございます！

僕だと、こんなスムーズには来られなかったです」

苦笑いをしながらリナにお辞儀した慎吾。TV局に入り、事務で受付をする。

事務員にこの日の局内見学の旨を伝え、首からぶら下げるタイプの入局許可証を2つ受け取った。

そのうちの1つをリナに渡す。

慎吾「はい。この入局許可証を首にかけてください。

僕たちは今日、局内見学の許可を得てる証明になりますので。

この中にチップが入っていて、各所に設けられているゲートを通れます」

リナ「OK」

リナはすぐに許可証を首にかけた。

慎吾「この許可証を持たずにゲート通ると・・・

警告音がなって、すぐに警備員が飛んでくるそうです」

リナ「は、なるほど。ま、TV局だしセキュリティも厳重ってわけね。

で？ 次の予定は？」

慎吾「えーっと。1時からの局内見学に間に合わなかったので・・・」

リュックからTVS局内見学の案内を取り出す。

慎吾「次は午後3時に・・・第16スタジオで時代劇の撮影風景見学。

4時には、第2スタジオでクイズ番組の撮影見学。

6時には、ニュースの生放送の現場を見学という日程です」

リナ「ええ・・・。歌番組とかないの？ 男性アイドルとか見られるヤツ」

慎吾は今一度案内を見渡す。

慎吾「えっと・・・クイズ番組で、有名なお笑い芸人が出るみたいですよ」

リナ「超ー興味ない！ うわー、イケメンの芸能人見たかったのに・・・」

慎吾「あ、すみません・・・」

申し訳なさそうな表情をする。

リナ「別にいいわよ。じゃあ次の見学までは・・・1時間ぐらいあるわね」

慎吾「お昼ご飯にします？ まだ食べてないですし」

リナ「あんたさあ。TV局に来て、昼ご飯なんて食べてる場合じゃないでしょ。

私、行きたい所あるの」

そういうとリナはスタスタと歩き出した。その後を慎吾が追う。

リナは局内の見取り図版のところで立ち止まり、指でなぞりながらどこかを探すしぐさをする。

リナ「えっと・・・あつた！ ここね！」

何かの場所を確認したリナは、慎吾の事を気にせずまたスタスタと歩き出した。

慎吾「ちょっとリナ先輩・・・どこに行くんですか？」

リナは無言で目的地に向かって歩いて行く。やがて階段を下り、2ヶ所のゲートを通って薄暗い地下へとたどり着いた。

慎吾「・・・ここ、駐車場ですか？」

リナ「そう」

TVS地下2階にある広い駐車場。

慎吾「何でこんな所へ？」

リナ「ちよつとね・・・」

そういうとリナは、駐車場の中をランダムに歩き始めた。そして車の前を通り過ぎては、何かを確認する。

約10分。広い駐車場内を歩き回ったリナと、ただ後ろからついてきただけの慎吾。

慎吾「あの・・・リナ先輩？」

リナは慎吾の方を向いてこたえる。

リナ「うん！ 今ね・・・ジャニーズアイドルの【山嵐】がこの局にいるわよ」

慎吾「な・・・何でわかるんですか？」

リナ「車があつた」

慎吾「ええ！？」

大きな声を出して驚く慎吾。

慎吾「って事は、リナ先輩・・・」

【山嵐】のメンバーの車とかわかるんですか？」

リナ「まあね」

（慎吾「うわ・・・絶対アイドルのおっかけとかするタイプだ・・・」）

リナ「あー、あのね。ひょっとして私がアイドルオタクとか思っていない？」

慎吾「思ってますけど・・・」

素直に返す慎吾。

リナ「アイドルとか興味ないの、私は。興味あるのはイケメン！

私はイケメンをおかずにして、ご飯を食べる女子なの！」

赤いメガネをキュツとかけ直し、鼻高々に言い放つ。

慎吾「・・・」

アイドルオタクと、何が違うのか理解出来ない慎吾。

慎吾「だからって、芸能人の車をチェックするのは・・・

ストーリーカーの領域ではないかと・・・」

リナ「あんたさあ。どこまでバカ正直なの？ アイドルってのはね・

・
て
こういう事されるの、許容範囲と思ってるから大丈夫だつ

慎吾「・・・」

リナ「ホントは駐車場でウロウロしてる方が・・・

イケメン芸能人との遭遇率高いけど・・・

ここは警備員が、定期的にチェックしてるからなー」

慎吾「出待ちってヤツです？」

リナ「違う！ 偶然の出会いってヤツ！」

慎吾「・・・」

リナ「とりあえずここは出ますか。少なくとも【山嵐】がいる事はわかったし。

時間まで、局内ウロウロして・・・

偶然曲がり角で【山嵐】のメンバーとぶつかり・・・
運命の恋、始まり始まり」

陶醉した表情で語るリナ。

慎吾「・・・」

冷めた目で見える慎吾。

リナ「運命の恋に・・・いざ、しゅっぱーっ！ー」

こうしてリナは一人でスタスタと歩き出し・・・慎吾はまた、その後ろをついていく。

リナ「・・・」

一瞬リナは駐車場から局内へ入る入り口で止まり、今一度駐車場を見た。

慎吾「なにか？」

リナ「うん……。いや、何でもない。さ、行こう！

今日のおめかしの成果を発揮しないとね！」

リナは右手で拳を握り、気合いを入れる。

慎吾「……。あれ……。？」

ふと何かに気づいた表情を浮かべる慎吾。

慎吾「ちよつと待てよ……」

最近ネットで見た【山嵐】のニュースの事を思い出した。

慎吾「確か【山嵐】のメンバーが立て続けに交通事故起こして……

今、メンバーは運転禁止だってニュースで言っていましたよ？

メンバーの車があるっておかしくないですか？」

キョロキョロしながら局内を歩くりナは、慎吾の方を振り返る事なくこたえる。

リナ「あら……。芸能関係弱そうなのによく知ってるわね。

そう。確認した車は【山嵐】のマネージャさんの車よ」

慎吾「マ、マネージャー？」

リナ「そう。超売れっ子の【山嵐】は・・・

メンバー1人1人、個別にマネージャーがついてるからね。

そのメンバー全員の・・・マネージャーの車あったの。

だから絶対【山嵐】は、TVSで何かの撮影のはず！」

それを聞いた慎吾は、さらに驚く。

慎吾「リ、リナ先輩・・・

なんでマネージャーさんの車までわかるんですか？」

リナ「あるのよ。そういう芸能人のプライバシーに関する事を・・・

公表してるアングラサイトがね。

ストーカーレベルのファンが、裏で情報交換してるの」

慎吾「・・・」

リナ「私はイケメンと・・・

そのマネージャーの車のナンバー、全て覚えているの」

1年前。芸能人の自宅の住所や電話番号を載せた本の出版が、プライバシーの侵害に当たるとして発売禁止になるというニュースがあった。

慎吾「・・・」

その記事を思い出す慎吾。

（慎吾「そんなサイトが・・・あるんだ・・・」）

リナ「そのサイトには、抱かれない男1位の福山雅秋の車のナンバーや・・・

携帯番号、自宅の場所まで載ってるのよ。すごいでしょ？

今日、福山さんは・・・TVS来てないみたい。残念」

慎吾「てか・・・なんでリナ先輩・・・ナンバーとか全て暗記してるんすか？」

リナはイヤらしい笑いを浮かべてこたえる。

リナ「しっしっし。そゆの得意なのよ、私」

その顔は得意満面だ。

慎吾「・・・」

驚きの表情を浮かべたままの慎吾。いくらイケメン芸能人が好きとはいえ・・・

（慎吾「本人の車やマネージャの車のナンバーを・・・

全て暗記できるものだろうか？」）

思い切ってリナに聞いてみた。

慎吾「リナ先輩」

慎吾の前を歩くリナは振り返る事無く返事する。

リナ「なに？」

慎吾「ひよつとしてリナ先輩・・・すごい暗記の天才ですか？

歴史のテストとか全て100点満点だったとか？」

リナは立ち止まって慎吾の方を振り返った。

リナ「あのさー・・・。私、歴史って大っ嫌いなもの！

テスト、いつも赤点よ！」

慎吾「でも・・・でも、あんなにたくさんの車のナンバー覚えるって・・・

普通の人には無理ですよ！絶対暗記の天才ですって！」

リナは慎吾の目を見て、一瞬無表情になる。

リナ「・・・」

慎吾もリナの目を見つめる。

（慎吾「あ、あれ？何か変な事言ったかな？」）

リナは軽い溜め息をついたあと慎吾に告げる。

リナ「ま、いっか。いいわ、教えてあげる。

でも誰にも言わないって約束できる？」

慎吾は目を丸くする。

（慎吾「え？ 何かそんな深刻な秘密があるの？」）

慎吾は作り笑いを浮かべた。

慎吾「え、ええ。もちろんです・・・よ？」

リナは軽く目を閉じた後、真剣な表情で少し重そうな口を開いた。

リナ「私はね・・・」

【数字依存症】なのよ・・・」

慎吾「え？」

（第4話へ続く）

第3話 リナの特特殊能力（後書き）

次回予告

リナが称する「数字依存症」。

慎吾の目の前で、驚異的な能力を見せる。

しかしリナはずっとこの症状に悩まされ続けていた。

話を聞いていくうちに、慎吾はその症状の正体突き止める。

次回 「第4話 数字依存症」

第4話 数字依存症（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾。

初めての大学の講義・・・隣に座った1つ上の先輩リナに「死ねばいいのに」と言われてしまう。

そのリナと・・・課せられたレポートのため、TV局へ行く事になった。

第4話 数字依存症

第4話 数字依存症

リナ「だから・・・私、【数字依存症】なの・・・
それも、かなり深刻な・・・」

慎吾「な、何ですか？ その・・・
よくわからないですが？」

リナは慎吾の目を見た。

目を閉じ、少しばかり上を向き・・・そして目を開くと、また慎吾の目を見る。

慎吾「？」

意を決したように、リナは語り始めた。

リナ「なんつか・・・目に映る物が数字として頭に入ってくるのよね・・・」

私の意志とは関係なく・・・

だから車のナンバーとかもさ・・・
意識してないのに、勝手に覚えてるのよ」

慎吾「・・・」

すぐには信じられない話だ。

慎吾「あの・・・リナ先輩。冗談では・・・ないですよね？」

リナは目を閉じ天を仰いだ。そして小さなため息をつき・・・

リナ「財布!」

目を閉じたまま、慎吾に一言発する。

慎吾「え?」

キョトンとする慎吾。

リナ「だから、財布。出して!」

今度は目を見開いて、やや強い口調で慎吾に言う。

慎吾「えっと・・・ は、はい。財布ですね」

ジーンズの右ポケットから財布を取り出した。

リナ「小銭。何枚ある? だいたいでもいいから」

慎吾は財布を開いて、小銭を数え始める。

慎吾「えっと・・・ 10枚ぐらいですかね?」

リナ「OK。じゃ、小銭を全て右手で持って握って」

慎吾「な、何を・・・?」

リナ「いいから、小銭全部握って!」

慎吾はワケもわからず財布の中にあつた小銭・・・10枚程度を全て右手に握った。

リナ「じゃ、右手を前に出して手の甲を上に向けて」

言うとおりにする慎吾。

リナ「深呼吸して、力を抜いて・・・」

慎吾は深呼吸をして・・・力を抜く。その瞬間・・・

バチーン！！！！

リナは慎吾の拳を・・・上から思いつきりひっぱたいた。

慎吾「あがつ！！」 あが 痛い

小さな悲鳴と共に・・・

チャリンチャリチャリリン・・・

握っていた小銭が、全てフロアに散らばる。

慎吾「ちょ！ リナ先輩、何するんですか！？」

リナは慎吾の目を直視して・・・

リナ「374円」

言い放った。

慎吾「え？」

リナ「今、あんたが握っていた小銭の総額よ。374円だったわ」
眉をひそめる慎吾。

慎吾「じよ、冗談・・・ですか？」

リナ「落ちた小銭拾いなさい。その後、文句あるなら聞くから」

リナは腕組みをして慎吾を睨み付ける。その迫力に慎吾は少し怖じ気づいた。

慎吾「・・・」

そして、すぐに小銭を拾い始める。

全て拾い上げた後、左手に小銭をのせ勘定する。
100円が2枚、50円が3枚、10円が1枚、5円が1枚、1円
が4枚・・・

慎吾「えっと・・・300・・・369円です・・・けど？」

リナは腕組みしたまま、慎吾の斜め後ろにある自動販売機に視線を移す。

リナ「そこ。その自販機の下に、もう1枚5円玉が落ちてるから」

アゴで自販機をさした。

慎吾「……………」

身をかがめ、自動販売機の下を覗くと……5円玉が1枚あった。

慎吾「さ……374円。え！？ な、なんで!？」

リナ「だから……言っただでしょ！ 数字依存症だつて!」

しばらく呆然とする慎吾。少しの沈黙の後、口を開いた。

慎吾「ま、マジックとかじゃないですよね!？」

恐る恐る聞いてみる。

リナ「あんたさあ……この状況でマジックって……意味ないじゃない!」

目に映った小銭の金額……勝手に頭に入ってくるの!」

慎吾「そ、そうなんですか……はあ……」

しばらく呆然とするが……

慎吾「そういえば……」

左手の人差し指と親指を額にあて、悩むポーズをする。

慎吾「そういえば…… 吾郎先生が……そんな話を……」

リナ「誰？ それ？」

慎吾「あ・・・高校の時の先生で・・・

なんていうか、オカルトとかUFOとか超能力とか好きな・

・・・」

瞬間、慎吾は何かを思い出したような表情をした。

慎吾「そ、そうだ！ 【レインマン】だ！！」

この言葉にリナが即反応する。

リナ「は？ 雨男？」

慎吾「映画ですよ、映画！ ほら！

トムクルーズと、ダスティンホフマンが出てた！」

リナ「知らない・・・私、映画観ないし・・・」

慎吾「映画の中で、ダスティンホフマンが自閉症の兄を演じてまして・・・

床に落ちたつまようじの本数を、即座に答えるシーンがあるんです。

今のリナ先輩と同じような感じです」

リナ「だから？ それ、映画の話でしょ？」

慎吾は目を大きく見開いて話し始めた。

慎吾「違います。あの映画に出てくる兄は・・・

実在の人物をモデルにしてるんです」

リナ「実在？ え？ じゃあ、リアルにそんな人・・・いるわけ？」

慎吾「はい！」

リナ「・・・」

ニコニコ笑顔の慎吾だが・・・リナは眉をひそめたまま。その表情は、半信半疑と言った感じだ。

慎吾「そうだ！ リナ先輩、パソコン持ってましたよね？」

貸してもらえますか？ 3分あれば調べられますよ！」

リナ「・・・」

2人は局内の長いすが置かれてある所に移動し、そこに座る。慎吾はリナのパソコンを起動し、ネットで【レインマン】から検索を始めた。

リナ「・・・」

その様子を黙って見ているリナ。

リナ「・・・」

リナは・・・自分が【数字依存症】とよんでいる症状について、深刻に悩み続けていた。

4年前のある時期から・・・この症状が表れた。症状が出始めた当初は、不気味で怖くて仕方なかった。目に映った数字はもちろん・・・お金や時間など、数字の情報は勝手に頭の中に入ってくる。そして自分の意志で、数字の侵入を抑える事が出来ない。

自分とは違う、別の意志を持った何かが・・・自分の脳を支配しているような感覚で、この症状は恐怖以外の何者でもなかった。ノイローゼ気味になりかけたリナを、ギリギリで救ったのは・・・その負けん気の強さだ。

子供の頃は、おとなしい性格だったリナだが・・・ある事をきっかけに、その性格が変わる事になる。

リナ「・・・」

脳に数字が入ってくる症状でノイローゼになってしまふのであれば・・・

それは自分の中に入ってくる「何か」に負ける事になると思うようになる。

数字が自分の中に侵入してくる事は止められないが・・・

それに屈する自分は許せない！

こうして・・・パニックになりかけた自分の精神を持ち直した。

（リナ「こんな症状・・・世界で私だけと置いていたけど・・・」）

慎吾「あつた！ ありましたよ！ 見てください、リナ先輩！」

慎吾はパソコンのディスプレイをリナの方に向ける。

リナ「……………」

リナは注意深く慎吾が検索したページを読み始めた。

慎吾「……………」

リナ「サヴァン…………症候群？」

【サヴァン症候群】

知的障害や自閉症の人物が、稀に常人では持ち得ないような特殊能力を持つことがあり、その症例を総じて「サヴァン症候群」という。

特殊能力の例として

・西暦・月・日を言えば、即座にその日の曜日を答える事ができる。
いわゆるカレンダー算の能力。

（かけ算九九すらできない人物が、この能力を持つ事例も報告されている）

・どんな楽曲でも、一度聴けば完全にコピーしてピアノで演奏する事ができる能力

（この能力の保有者で、楽譜を全く読むことができない事例もある）

・一度見た風景や写真を、その細部まで完璧に絵画で再現できる能力

・1冊の書物を一字一句全て完璧に暗記できる能力

・大きな数の複雑な計算を即座にできる能力

これらの能力が例としてあげられる（その他にもたくさんある）。

リナ「……」

ページの隅々まで目を通す。真剣な眼差しでディスプレイを見ているリナに、慎吾が声をかけた。

慎吾「どうです？」

リナはページから目を話さず応える。

リナ「確かに……いくつか当てはまる。でも……」

自分に当てはまらないと確信してる事があった。

リナ「でも私、知的障害でもないし……」

過去ひきこもりだった経験もないわよ……

この症例って、そういう人になるんでしょう？」

慎吾「ちょっと待ってください・・・」

慎吾はリナの見てるページとは別のページを開いた。そのページには、自閉症についての説明がされている。

慎吾「ほら、自閉症ってのは・・・

ひきこもりとかでなく、脳機能障害の1つなんです。

これがどのようにして、特殊能力の覚醒に結びつくかは・・・

未だに全くの謎らしいですが・・・」

ページに書かれてある内容を簡略して言っているだけだが、リナは真剣に聴いていた。

慎吾「それに、交通事故とか頭に衝撃を受ける事をきっかけに・・・

特殊能力に目覚めたって話が、よくあるんです」

実際交通事故など、頭に大きなダメージを受けた人物が、事故後特殊能力を発揮するという例は世界でも数多く報告されている。

慎吾「以前お笑いタレントだった、北尾監督も・・・

バイク事故の後に、芸術的才能が覚醒したと言われているんです」

リナ「あ・・・映画見ない私でも、北尾監督は知ってる。

毎年ヨーロッパで映画の賞を取っているのよね」

慎吾「そうです！　今や世界的な映画監督。世界中には彼のように・

・

事故後、芸術や計算の才能を発揮した例がたくさんあるんです」

リナ「世界・・・中に・・・」

慎吾「だから・・・ひょっとしてリナ先輩。その症状が表れる直前・

・

頭を強く打ったとか、そういう事ありませんでした？」

瞬間、リナは大きなポニーテールをとめているシュシュを右手で握りしめた。

リナ「・・・」

慎吾の言つとおり・・・思い当たる節がある。シュシュを握ったまま慎吾を見つめ・・・

リナ「話したく・・・ない」

声を絞り出した後、口元をぎゅっと閉じた。

慎吾「・・・」

過去リナに何かがあったらしいというのを、慎吾は察した。

慎吾「あ！　いえ、言わなくていいですよ！　すいません。

僕はただリナ先輩のすごい能力について・・・

少しでも情報をとっただけですから。
話したくない事は話す必要ないですよ」

優しい笑顔を見せながら、リナに声をかける。

リナの後頭部に大きな傷がある事・・・

それ以上に、大きな心の傷をリナがおっている事・・・

慎吾がそれらを知るのは・・・もう少し先の未来だった。

リナ「そっか・・・じゃ、私みたいな人が、この世界のどこかにいるのね」

慎吾「そうです。でもすごいな、リナ先輩。麻雀が強いのもそれですか？」

リナはパソコンから目を離し、天井を見上げた。

リナ「そうね・・・1度でも対局すれば、その人の打ち方が全てわかるわね。」

それに一度見えた牌は勝手に暗記するから、残りの牌もある程度わかるし。

牌譜が勝手に頭の中に入ってくる・・・そんな感じかな・・・
」

麻雀を全く知らない慎吾は、とりあえずうんうんと頷いている。

慎吾「へー、やっぱりすごいですよ、リナ先輩は。」

僕、文系だし、数学は大の苦手ですし」

頭をかきながら、おどけて笑った。

慎吾「あー、サヴァン症候群・・・吾郎先生から話を聞いてなかったら・・・」

絶対にわからなかっただろうな」

リナは慎吾の笑う顔を見て・・・少し胸のつかえがとれたような気がした。

今まで・・・

数字が体を侵す・・・そんな気味の悪い病気を、世界でただ1人経験していると思っていた。

自分以外にも同じような感覚を持っている人間がいる・・・

そう思えるだけでも、リナの心には勇気がわいてくる。

慎吾「吾郎先生って、すごかったんですよ。オカルトの話を読ませたら・・・」

慎吾は珍しくリナにずっと話しかけている。リナはそれを制止するように口を開いた。

リナ「あんたさあ・・・私、気を遣われるのがイヤだって・・・」

そう言ったの、覚えてるでしょ？」

リナが落ち込み気味だと察した慎吾が・・・喋って、場を和ませようとしているのを見抜いていた。

慎吾は話を遮られても笑顔のまま。リナは小さな声で一言発した。

リナ「ありがとう」

瞬間、慎吾は口を開いてびっくりした表情をする。その慎吾の表情を見て、今度はリナが驚く。

リナ「な、何よ、その顔!？」

慎吾は驚いた表情から笑顔に戻った。

慎吾「僕、リナ先輩って絶対【ありがとう】って言わない人だと思ってた」

リナは驚いた表情から、眉間にしわを寄せる。

リナ「あんたさあ。私だって感謝すべき時には【ありがとう】ぐらい言っわよ！」

ホントあんたって、天然で殺意与える時あるわよね!！」

慎吾「・・・」

ずっと笑顔の慎吾。リナの毒舌よりも【ありがとう】の方が圧倒的に嬉しい出来事だった。

リナも慎吾の笑顔に負けて

リナ「まあ、いいわよ・・・ふん」

と声を発した。やれやれといった表情の後、自然と笑いがこみ上げてくる。

リナと慎吾。

2人が出会ってから初めて・・・お互いが、心から笑い合えた瞬間だった。

その心地よい瞬間を打ち破る者が現れる。

「すみません、ちょっといいですか？」

リナの肩を後ろからトントンと叩く人物がいた。

笑顔のまま、視線を慎吾から背後の人物へと移すため振り向いたリナ。

リナ「え？」

その人物を見たリナの表情が固まる。

そこには制服姿の警察官の姿があった。

(第5話へ続く)

第4話 数字依存症（後書き）

次回予告

TV局内で、人気アイドルのバッグ盗難事件が発生。
盗まれたのは、リナの大好きなイケメンジャニーズアイドル。

バッグを盗んだ犯人に憤りを覚えたリナは・・・
犯人を捕まえようと画策。

そしてまだ見ぬ、リナの驚くべき能力が発揮される。

次回 「 第5話 初めての事件 」

第5話 初めての事件（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾。

大学の講義で知り合った1つ上の先輩リナ。講義の課題のため、2人でTV局へと向かった。

そこで慎吾は、リナの驚くべき数字の感覚を見せつけられる。リナは【数字依存症】とよんでいたが、慎吾はそれが【サヴァン症候群】だと突きとめた。

不意にリナは・・・警察官に声をかけられ、固まってしまう。

第5話 初めての事件

第5話 初めての事件

リナ「あ……」

声をかけてきた警官と視線が合い、固まるリナ。

警官「ちよつと聞きたい事があるのですが……
よろしいですか？」

恰幅のよい白髪交じりの中年警官が、リナの顔を覗き込んだ。

リナ「あ……はい？ えつと……何で……しょう？」

緊張しているリナの様子を見た慎吾が、助け船を出す。

慎吾「あ、お巡りさん。お疲れ様です。何かあったんですか？」

笑顔のままいつもと変わらぬ口調で、警官に声をかけた。警官はリナから慎吾に視線を移す。

警官「ああ。実はさっき、局内で盗難事件があったもので。

君たちは……ずつとここにいたかな？」

慎吾「はい。今日、局内見学で……」

首に提げていた、入局許可証を見せる。

慎吾「僕たちは15分ぐらい、ここでおしゃべりしてました。
えつと……その盗難事件って、いつ頃ですか？」

リナに落ち着く時間を与えようと、間髪入れず警官に質問をぶつけた。

警官「うむ。通報が入ったのは今から10分前だが・・・

盗難が発覚したのは、今から30分ほど前。

タレントのバッグが楽屋から消えたらしくてね・・・」

慎吾「タレント・・・？」

警官「ああ、何でも【松浦順】君というタレントのバッ・・・」

突然リナが反応する。

リナ「松順！？ 【山嵐】の松順様のバッグが、盗まれたんですか！？」

急に大声を出したリナに警官は驚いた。

警官「あ、ああ。財布や携帯、その他私物が入ったバッグが・・・

30分程前に盗まれたらしいと通報があつてね」

リナ「マ・・・マジ・・・？」

警官「彼の楽屋から、バッグを持ち出す女性の姿も目撃されていてね・・・」

胸ポケットから、手帳を取りだしペラペラとめくる。

警官「長髪で、帽子を着けた女性が・・・バッグを持ち出したらしい。

そこで今、局内の若い女性を中心に聞き込みをしてるところなんだ。

知り合いにそういう人がいないか。

あるいは、そういう人を見てないか・・・」

リナ「・・・」

思いつきり眉間に眉をひそめたりナ。

リナ「あの・・・どんなバッグですか!？」

警官「真っ白なヤツで、肩にかける大きなスポーツバッグだ」

リナ「白の・・・スポーツバッグ・・・」

ここまで、そのようなバッグを見た記憶はない。

警官「【長髪に帽子】【スポーツバッグ】を身につけた女性だが・・・

警備員からは、そういう人物を見たという情報がなくてね。

まだ局内にいる可能性が高いとみて、聞き込みをしてみるところだ」

リナ「まだ局内に!？ わかりました! 見つけたら捕まえますから!」

迫力のある声を出しながら、リナが身を乗り出した。

警官「いやいや。怪しい人物見たら・・・

局の人に迅速に伝えるか、すぐ110番してくれ。

協力ありがとう。私は行く事にしよう」

慎吾「あ・・・はい・・・」

途中からリナの態度が一変したため、横でチョコンとしていた慎吾がお辞儀をする。警官が立ち去っていく姿を見守った後、リナに視線を移した。

リナは腕組みをしながら、その場で小さな円を描くように歩いている。

リナ「全く・・・松順様のバッグを盗むバカ女がいるなんて・・・

ファンとして最低だわ・・・。何とか捕まえてボコボコに

・・・」

不機嫌な顔で独り言をつぶやいているリナに、慎吾がおそろおそろ声をかけた。

慎吾「あの・・・リナ先輩。ほら、もうすぐ3時。

第16スタジオで、時代劇の撮影風景見学ですけ・・・」

言い切る前に、リナに睨まれる。

リナ「はあ？ 松順様のバッグが盗まれたのよ！

それどころじゃないでしょー！！」

目を丸くする慎吾。

慎吾「え．．．？　僕たちには．．．関係ない．．．かと？」

リナが慎吾の所へ歩み寄り、さらに睨み付ける。

リナ「あんたさあ．．．

あんたなら、どうやってバッグ持ち出したあと逃げる？」

慎吾「え？」

意外な質問を受けた慎吾は、額から汗を流した。

（慎吾「リナ先輩．．．マジで犯人捕まえる気だ．．．」）

慎吾「え、えーっと．．．普通に、玄関か非常口から逃げますけど」

リナ「あんたさあ。本気で考えてないでしょ？」

どの入り口も警備員がチェック入ってるのよ！

泥棒がそんなトコ堂々と通る？」

慎吾「あー、ほら。あえて堂々と通り抜けて、裏をかくって作戦で？」

リナは大きなため息をつく。直後、慎吾に顔を近づけ言い放つ。

リナ「いい？　お巡りさんの話じゃ、でっかいバッグ持った人物が・

・

TV局を出たという、警備員の目撃証言はないのよ？

トイレの窓とか、警備員がチェックしてないところとか・

・

もつとこう・・・犯罪者の気持ちになって・・・」

慎吾「・・・」

必死なりナの姿を見て、慎吾はちよつと真剣に考える。ふとその場を離れ、TV局内の見取り図がある所へ向かった。何も言わずリナはついてくる。

局内の見取り図を真剣に見つめる慎吾。

慎吾「あの・・・地下駐車場はどうでしょう？」

リナ「はあ？ 私たちがさっき行った時、2カ所もゲートチェックあつたじゃない」

慎吾「ええ。でも確か駐車場の入り口横に・・・」

【STAFF ONLY】のエレベーターがあつたじゃないですか。

見取り図で言うところですよ」

地下駐車場の出入り口横にある、エレベーターの位置をさす。

慎吾「ここならタレントさんの楽屋から、チェック無しで駐車場へ行けます。」

多分これ、タレントさんがすぐに移動できるようについてい
う・・・

関係者専用というか、芸能人専用エレベーターじゃないか
など・・・」

リナも見取り図を確認する。確かにこのエレベーターを使えば・・・
中に入る際も、チェック無しで局内に入ることが出来る。

リナ「ふ〜ん・・・やつと真剣に考えたわね。でも残念。」

駐車場は許可車しか止められないのよ。

駐車場から外へ出る際も、警備員がチェックするし」

慎吾「う〜ん・・・」

右手の手のひらを額にあてた慎吾。

慎吾「いや・・・出来ます。まず僕たちみたい・・・

局内見学の手続きをして、この入局許可証を手に入れる」

首にぶら下げた入局許可証を握りしめながら説明を続ける。

慎吾「その許可証を持って一度外を出て・・・

今度は車で地下駐車場から入る」

リナ「・・・」

慎吾「そしてこのエレベーターを使い、目的の楽屋に入り・・・バ
ッグを盗む。」

その後も同じエレベーターを使い、駐車場へ行き・・・

駐車場を出る時にチェックは入りますが・・・
バッグはトランクの中だから目撃されない・・・どうです
？」

腕組みをしたまま、リナは真剣に聞き入った。

リナ「ふむ・・・アリね、その推理。

なるほど・・・駐車場のエレベーター。うん・・・

待つてよ・・・そういえば・・・」

何かを思い出したような表情を浮かべる。

リナ「そういえば・・・さっき駐車場を見た時・・・

1台だけ変な車・・・あつたのよね」

慎吾「変な車？」

リナ「【わ】ナンバーよ。関係者が停める駐車場に【わ】ナンバー
は場違いだわ。

それにエンジンがかつてたのに、誰も乗ってなかった・・・
超怪しい！」

慎吾「えっと・・・確か、【わ】ナンバーって、レンタカーでした
よね？」

リナ「そう。おそらく・・・犯人の車じゃない？」

目を大きく開いた慎吾。

慎吾「ありえますね。偽名で借りた車を使って逃走し・・・

そのままレンタカーを返して逃げれば、足はつかない。

エンジンかかっていたのは、すぐに逃走できるよう・・・」

リナ「うん。あの車ね・・・怪しいのは。よし!」

そういうとリナは、ノートパソコンを取り出し起動する。

慎吾「・・・？」

慎吾が黙ってその様子を見てみると、リナはキーボードをカタカタと打ち始めた。

リナ「さて・・・」

慎吾「あの・・・パソコンで・・・何かわかるんですか？」

リナ「わかるわよ・・・。この近辺で、レンタカー扱ってる店探すのよ」

慎吾「え？ でも、それで犯人を捕まえられますか？」

リナはキーボードを打ちながら慎吾を見る。

リナ「あんたさあ・・・なんか秘密ある？ 人に言えないような」

意表をついたリナの質問に、慎吾は一瞬身をひいた。

慎吾「え？ 何でまた急に・・・？」

リナ「いいから！ これは人に言えない！！ってな秘密はあんの？」

慎吾は困惑した表情を浮かべる。

慎吾「えつと・・・ あの・・・」

意を決したように慎吾は口を開く。

慎吾「僕・・・霊が見えます！！」

直後、リナは非常に残念そうな顔をした。

リナ「あんたさあ・・・嘘つくならもうちょっと・・・」

まあいいわ。あんた、巧妙な嘘とかつけそうにないし。

いい？ 今から私がする事は・・・絶対人に言っちゃダメよ！」

リナは慎吾を睨み付ける。

慎吾「え・・・？ は、はい。わかりました・・・」

何を・・・するんです？」

リナ「ほら、これ見て。近くのレンタカーの店のページ。

ここから社員専用のページに潜り込むの。

つまりパスワードが必要なリンク先ね」

パソコンの画面を見せながら説明する。

慎吾「ええ？　ちょっと待ってくださいよ。」

まず1つ、どうやって潜り込めるんですか！？

そういうとこって・・・

IDとかパスワードとか必要じゃないんですか？」

リナ「ふん。本格的なセキュリティは導入してないわよ、こんな所。

まずIPアドレスからFTPサイトを特定・・・」

喋りながらも高速でキーボードを打ち続ける。

リナ「私の組んだアルゴリズムのプログラムで・・・

ちよつとサーバにお邪魔して・・・パスワード保護を回避・

・

って言うてもあんたには理解できないわね」

慎吾「ええ！？　ハッキングですか！？　それ？」

リナは首を横に振る。

リナ「私から言わせれば・・・

簡単にハックできるセキュリティシステムの方が悪いわ。

私は・・・なんだっけ？ サバンナ症候群なのよ！」

慎吾「サヴァン症候群ですよ」

リナ「そう、それ！

サイト1つ1つのページが、数字の情報で頭に入ってくるもの。

高度なセキュリティでない限り、どこにだって侵入できるわ」

慎吾「すごいけど・・・でも・・・」

リナ「だから、絶対誰にも言わないでよ！ あんただから言ったのよ！」

慎吾「え・・・？ 僕だから・・・？」

リナ「そう！」

慎吾「・・・」

首をかしげる慎吾。

リナ「別に深く考えなくていいから。あんたを信用してるって事よ」

慎吾「わ・・・わかりました。

でも・・・レンタルした人の情報を、ネット上に残すですよっか？」

リナ「当たり前じゃない！ あんたさあ、何も知らないでしょ！」

慎吾「は、はい・・・」

正直に頷く慎吾。

リナ「レンタカーってのは、同じ系列店舗なら・・・

借りた所と返す場所が違ってても大丈夫なのよ！

長崎でレンタルした車は、熊本でも返せるの！」

慎吾「え？ そ、そんなんですか！？」

リナ「だからレンタルした客の情報は・・・

ネット上でやりとりするのが常識！」

慎吾「知らなかった・・・でもどうやって・・・

その車を探すんですか？ 登録名も偽名だろうし」

リナ「だーからー！ 一度見た車のナンバーは忘れないのよ私は！

あの【わ】ナンバーの車もちゃんと覚えてるってば・・・

ほら、あつたー！！」

ハッキングしたレンタカーのとある店舗。その顧客情報ページを、
慎吾に見せた。

リナ「あれ？ でもおかしいわね・・・借りたのは一人で・・・

男だわ・・・弘ひろって名前の」

慎吾「……」

リナと共に、その車を借りた人物の情報を凝視する。

リナ「名前は偽名だとしても……」

車レンタルする時、女装するとは思えないな」。

犯人は女性だから……シロ……？」

慎吾はそのページ情報を睨み付けたまま……

慎吾「いえ……間違いないと思います。彼が犯人ですよ」

口を開いた。

リナ「え？ 何故？」

慎吾「帽子と長髪の女性が犯人って聞いた時、違和感ありました。

犯人が疑われないようにする、典型的なパターンにあるんですよ。

性別を偽るつてのが……」

リナ「そうか……犯人の方を女性と思わせれば……男は疑われない」

慎吾「リナ先輩、駐車場に行ってみましょう。その車があるかどうか確認しに」

リナは慎吾を見て軽く笑う。

リナ「必要ないわ。その車、今からおよそ5分後に・・・

赤坂にあるレンタカーの店に到着する」

慎吾「え？ 何故・・・」

リナ「レンタカーにGPSがついてるのは常識。

逆に貸した側も、貸した車の位置がわかるようにしているのも常識よ。ほら」

リナが示したページには、地図上を走る光の点滅があり・・・それが例の車だと言う。

その点滅は、あと数分で赤坂のレンタカー店に到着しようとしていた。

慎吾「で、でも、どうするんです？

どうやってその人を・・・捕まえるんですか？」

リナ「はあ？ そんなの簡単よ」

慎吾の目の前で、手のひらを上にして見せる。

リナ「携帯」

慎吾「え？」

リナ「あんたの携帯貸して」

慎吾「あ・・・はい」

慎吾はジーンズの左ポケットから携帯を取り出しリナに渡した。
リナは即座に「1」「1」「0」とプッシュし、慎吾に返す。

慎吾「え！？　ちょ・・・110番！？　どうするんですか？」

リナ「赤坂のレンタカー店に、お巡りさんを向かわせて」

慎吾「え！？　どんな風にお巡りさんに言えば・・・

あ！　はい！　もしもし！　えっと・・・

僕は慎吾って言いますが・・・

あの・・・赤坂のレンタカーの店にですね・・・」

リナは自分の携帯電話を使い、赤坂のレンタカー店へ電話をかけた。

リナ「あ！　こちら赤坂警察署です。ちょっと情報が入りましてね。

「23 - 〇」ナンバーの車をレンタルしてる客がですね・
・

盗難事件関与の疑いがありまして・・・はい・・・そうです
す」

慎吾「そ、そうです。犯人がそのレンタカー店に・・・」

リナ「ええ、もしその客がそちらに現れましたら・・・

しばらくの間、足止めしてください。

ええ・・・そうです。5分でそちらに向かいますので」

こうして・・・

ジャネーズの人気アイドルグループ【山嵐】のメンバー松浦順・・・

彼のバッグを盗難した犯人は、犯行からわずか90分で捕まる事になる。

しかしこの事件解決がきっかけで・・・

2人はさらに大きな事件に巻き込まれる事など・・・

まだ知る事はない。

（第6話へ続く）

第5話 初めての事件（後書き）

次回予告

リナの活躍で、アイドルバッグ盗難事件の犯人を逮捕。
思わず警察に名前をもらった慎吾は、事情聴取を受ける事になってしまった。

そこで日本のトップアイドル【松浦順】と会おう事になる。
その彼と初対面したリナは・・・？

次回 「 第6話 運命の出会い 」

第6話 運命の出会い（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TV局へと向かった2人だが・・・
アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。

第6話 運命の出会い

第6話 運命の出会い

リナ「ったく……。あんたさあ……」

ホント間抜けよねー」

腕組みをしたリナが、大きなため息をつく。

慎吾「し、仕方ないじゃないですか……」。

リ、リナ先輩が急に110番するから……」

2人はTVSのとある一室で、ある人物を待っていた。

リナ「は……」

タレントの【松浦順】バッグ盗難事件を解決した2人。慎吾は110番で犯人情報を提供した際、自分の氏名と電話番号まで警官に伝えてしまった。

リナ「あんたさあ……。あーいうのは、匿名でいいのよ、匿名で。」

最悪、電話番号は教える必要ないっつーの!」

警官側から折り返し電話を受けた慎吾は、TVSのとある一室で待つように指示される。今回の盗難事件に関し、事情聴取を受けるためだ。

慎吾「あー……。僕、お巡りさんに何て言えば……?」

右手の拳をトントンと軽く頭に叩きながら、悩むそぶりを見せる。

リナ「知らない。アドリブで何とかしてよ。

ヘタな事言って、帰るの長引くのはゴメンだからね！

てか、マジ長引いたら・・・あんた置いて帰るから」

冷たく言い放つリナは、今回の事件解決の中心人物であつたが・・・
警官側には一切自分の身元情報を伝えてない。

リナ「さて・・・あたしは局内ブラブラして・・・

イケメン芸能人と【運命的な出会い】でもしてこようかしら」

そつ言つと部屋の出口へと向かつた。

慎吾「ちょ・・・リナ先輩・・・」

泣き顔でリナの後を追おうとする。後ろを振り返つたリナは・・・

リナ「はい！ これも勉強の1つ！ 頑張つて事情聴取されてね！」

満面の笑みを浮かべた。瞬間、思いつきり怖い表情になる。

リナ「いい？ あたしは今回の事件、一切関わってないから。

絶対、あたしの名前出さないでよ！！」

慎吾「は・・・はい・・・」

慎吾の困惑した顔を確認したリナは、再び笑顔になる。

リナ「じゃ、私はこれで。

運命の出会いの旅に・・・いざ出発」

言いながらドアノブに手をかけようとした。

ガチャツ。

ドアノブに触れる直前、部屋の外側から扉が開けられる。そして一人の警官が、部屋の中に入ってきた。

リナ「あら・・・お巡りさん。

意外と早かつ・・・た・・・わ？」

警官と目があつた瞬間、言葉に詰まるリナ。そして口を【わ】の形に開けたまま固まった。

慎吾は、入ってきた警官を見て緊張する。

慎吾「あ！ お、お巡りさん！！ ぼ、僕は慎吾って言いまして・・・」

1つの乱れもない警官服をビシツと着こなし・・・少し外側に跳ねたクセつ毛、日本人離れた端正な顔立ちはヨーロッパ系のハーフかと思わせる。

その警官は慎吾と目を合わせ口を開く。

男「はは。お巡りさんに見える？ だとしたら嬉しいなあ」

リナの視線は・・・透き通るような声のその男に、釘付けのままだ。

男「初めまして。俺は松浦順。お巡りさんでなくてタレントなんだ。

ドラマの撮影でこんな格好してるだけさ」

一瞬「え？」という顔をした慎吾。

慎吾「あー！！ バッグ盗まれたタレントさんですね！ 初めまして！」

慎吾は深々とお辞儀をした。

松浦「はは・・・ そう、バッグ盗まれた間抜けなヤツさ」

慎吾「あ、いえ！ そんなつもりでは・・・」

軽く頭をかいた松浦は、慎吾の目を見て笑顔を見せる。

松浦「お巡りさんから聞いてるよ。本物のね。

犯人捕まえたの・・・君だって？」

慎吾「え、あ・・・」

松浦「心から礼を言うよ・・・」

そついうと松浦は右手を慎吾の前にさしだし、握手を要求した。

慎吾「・・・」

握手に応じた慎吾は、困った表情を見せる。

慎吾「あー、いえ。はい……」

事件解決の一番の功労者は……リナ。彼女がいなければ、間違いなく犯人は逃走していた。

でもリナは、今回の事件に関わっていない事になっている。慎吾はリナに視線を向けたが、口を開けたまま松浦を見つめ……固まり続けていた。

慎吾「……」

そんなリナを見て、慎吾は意を決する。

慎吾「ええ。でも僕は……」

犯人を見つけた後、どうしたらいいかわからなくて……」

リナの方に視線を合わせたまま……

慎吾「リナ先輩が、警察や警備員に連絡するように言ってくれたんです。」

リナ先輩がいなかったら……パニックって犯人逃がしてました」

笑顔で説明する。

松浦「……」

松浦の視線は……慎吾から、赤いメガネの女性へと移る。そして

呆然としたままのリナへと、ゆっくりと歩み寄っていった。

松浦「・・・・・・・・」

リナの真正面に立った松浦は、さわやかな笑顔をふりまく。

リナ「あ・・・・・・・・」

目の前に、あこがれのアイドルがいる。

さわやかな笑顔の松浦は、リナから視線をそらさず・・・

優しくハグした。

松浦「ありがとう。君がいなければ・・・ホントに感謝してるよ」

ハグしたまま、リナの耳元で囁く。

その後リナの両肩に手を置き、真正面から目を見つめる。

松浦「ありがとう」

2度目の感謝の言葉を囁いた。ステキな笑顔を見せた後、慎吾の所へと戻っていく。

リナ「・・・・・・・・」

リナの心臓はバクバクと激しく動悸し、全身の鳥肌が立った。松浦

に声をかけようと脳が命令するのに、体がそれを拒否する。

リナ「……………」

ただ……その場で固まる事しかできなかった。

松浦「バッグには携帯も入ってたから、焦ってたんだ。

アイドルとか芸能人の情報が、1000以上も入ってたさ。

あれが一般人に出回ったらと思うと……

バッグが戻ってきて、ホントよかったよ」

慎吾「……………」

感謝の言葉をさらっと言える松浦を見て、慎吾は好感を持った。

ガチャッ。

直後、部屋には……本物の警官が入ってきた。

その後……無関係者のリナは、部屋の外に出され……

松浦や松浦のマネージャ、それに慎吾と2人の警官による事情聴取が行われた。

慎吾は……

たまたま駐車場で見かけた男が白いバッグを持って、急ぎ足でレン

タカーに乗り込む姿を見た・・・

そこで慌てて110番したというシナリオを、しどろもどろで警官に説明した。

・・・。

約1時間・・・事情聴取は終了した。

警官らが部屋から出た後・・・松浦と慎吾が出てきたのはその30分後。

慎吾「とにかく大事おおごとにならなくて何よりです」

松浦「ああ。またどこかで会うことがあれば絶対声かけて」

慎吾「はい！」

笑顔のまま元気よく応えた慎吾は、数m離れた所にリナがいるのに気づいた。

カベを背に立っていたリナ。2人が出てきたのを見て近寄ってくる。

慎吾「あ！ リナ先輩！ え？ まさかずっといたんですか！？」

リナは慎吾を無視して松浦の正面に立った。そして深く頭を下げ・・・

リナ「握手してください！」

両手を松浦の前に出した。

一瞬驚いた表情を見せた松浦だが、

松浦「OK」

優しい声で返し、リナの両手を握り返す。

リナ「は．．．．．」

手を握られたリナは、顔を松浦に向けた。

松浦「リナ。ありがとう」

待つてましたとばかりに、さわやかな笑顔を作り．．．リナの瞳を直視する。

リナは無意識に口が開き、

リナ「ふあゝ．．．」

気の抜けた声を出す。

松浦は握手を解こうとするが、リナがそれを許さない。しかしそこは、日本を代表するアイドル松浦。

強引に．．リナの手をふりほどき、今度は慎吾と握手をした。リナの手を無理矢理ほどいたそぶりを全く見せない、握手から握手への

自然な流れ。

リナ「……………」

慎吾はリナに睨み付けられているのに気づかない。松浦は握手を解いた後、慎吾に質問した。

松浦「そういえば……」

大学のレポート課題のため、TV局に来たと言ってたね。

何か面白いものは見たかい？」

慎吾「あ、いえ……。実はまだどこも見なくて……」

ふと廊下の向こうのロビー……。柱にかかっている時計が目に入っ
た。

慎吾「あ……。もう6時回ってるや……」

ニュースの生放送を見学する予定だったが……。間に合う時間ではない。

松浦「えー、ひょつとして……。俺のせいで、何も見られなかった
!？」

慎吾「ま、まさか……。違いますよ」

慎吾は不自然な笑顔で返事する。

松浦「そうか……。悪いことしたね……」

慎吾の下手な笑顔は、松浦に通じない。自分のせいで、慎吾達の予定を台無しにしたと確信した松浦は・・・

松浦「よし!!」

思い立った声をあげると、側に立っていたマネージャとヒソヒソ話を始めた。

時折、慎吾とリナに視線を向けながら・・・。

話が終わった後、慎吾に声をかける。

松浦「君達さえよければけど・・・」

あさつての5月5日。TVSの特別番組の収録があつてさ。

俺ら【山嵐】がスペシャルゲストなんだけど・・・
観客席に、君たちを招待するよ」

慎吾「え!? ホントですか!？」

驚いた声をあげる慎吾。

松浦「俺のドジで・・・君たちは何も見学出来なかったし・・・
それじゃあ、レポート書けないだろうしさ」

リナ「行きます! 行きます! 絶対行きます! お願いします!
!」

松浦と慎吾の間にリナが割って入ってきた。

リナは松浦の手を握ろうとしたが、松浦はさりげなくポケットに両手を入れてそれを拒否する。

松浦「じゃあ決まりだな。マネージャが今から招待状渡すからさ」
言いながら目線で、マネージャに合図をする。

松浦「それと、1つ約束してくれないか？

必ず収録前に・・・俺にあいさつしに来て欲しい。

それだけ。いいね？」

リナ「はい！ はい！！！」

慎吾「わかりました」

2人はマネージャから招待状を受け取った。そして松浦は、右手で「グッバイ」の合図をしてマネージャと共に去っていく。

リナは去りゆく松浦に、いつまでも大げさに手を振っていた。

満面の笑みを浮かべるリナに、慎吾が声をかける。

慎吾「でもよかったですね。憧れの松浦さんにハグされて」

リナは眉をひそめて、慎吾を見た。

リナ「え？ 何言ってるの？ 握手しかしてないわよ、私」

慎吾「いやいや・・・最初ハグされてたじゃないですか・・・」

リナ「嘘！　なんでそんな嘘つくの！？」

慎吾「え？　いや・・・だつて・・・」

ひよつとして、記憶ないんですか？　ハグされた時の？」

リナは両手で頭を抑え、思い出そうとするそぶりを見せる。

慎吾「あの・・・どこまで記憶があります？」

リナ「えつと・・・」

運命の出会いを探しに、部屋を出ようとして・・・

気がついたら、部屋から出てきた松順様と握手した・・・」

慎吾「うわ！　その松順様がリナ先輩ハグしたんですよ！

あんなに記憶力すごいのに・・・

一番いい思い出だけ、欠損してるんですか！？」

リナは両手で頭を抑えて叫んだ。

リナ「うそー！　絶対うそー！！　でもあんな嘘つかないし・・・

日本で唯一松順様のハグを受けたのに、何で記憶ないのー

！！！」

慎吾「いや・・・唯一じゃないと思いますけど・・・」

この調子で2人は・・・

TV局の出口へと向かっていった。

リナ「あ、ちょっと待って。化粧直し行ってくるから」

若干冷静さを取り戻したリナが化粧室を探す。

慎吾「あ、あっちにあるみたいです」

トイレ表示を見つけた慎吾が、その方向を指さす。

慎吾「じゃあ僕、この辺で待ってますね」

リナを見送った後、慎吾は先ほどもらった招待状を見た。

慎吾「・・・・・・」

見た瞬間、慎吾の表情が一瞬固まる。

招待状には、松浦のマネーギャのサインと・・・

特別番組の番組名と収録時間が書かれているだけだった。

その番組名は・・・・・・

【10年ぶりに復活！ 徳川埋蔵金を追え！ ついに発見！？】

慎吾「・・・・・・」

招待状から目が離せない。

慎吾「徳川・・・埋蔵金か・・・」

軽くため息をついき、天井に視線を移した。

慎吾「・・・・・・・・」

じつと蛍光灯の光を見つめる。

「驚いたな」

ふと慎吾に声をかける者がいた。

慎吾「え？」

視線を正面に戻すと・・・男が立っている。

慎吾「・・・・・・・・」

この男こそ・・・後の慎吾の運命を大きく変える人物。

慎吾にとってはまさに・・・運命的な出会だった。

（第7話へ続く）

第6話 運命の出会い（後書き）

次回予告

招待状を見つめながら、考え事をする慎吾に声をかけた男。
その男は慎吾に意味ありげな言葉をかけてくる。

後に慎吾の運命を大きく揺るがす事になる、彼の正体は・・・？

次回 「 第7話 スピリチュアル・カウンセラー 」

第7話 スピリチュアル・カウンセラー（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TV局へと向かった2人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。そしてアイドルの松浦から、2人は特別番組の観客としての招待を受けた。

TV局から出ようとした慎吾に、何者かが声をかける。

第7話 スピリチュアル・カウンセラー

第7話 スピリチュアル・カウンセラー

慎吾「……………」

その男は……

Yシャツネクタイ、黒いスーツをびしッと決め、銀縁メガネはその知性をにじみ出している。右手はポケットの中、左手は黒い大きなバッグを持っていた。

年の頃は40歳前後といったところか、メガネの向こうの優しそうな目は慎吾を冷静に見つめている。

慎吾「あ……あなたは？」

男「驚かせて失礼。私の名は江浜。」

スピリチュアル・カウンセラーをしている」

そう言うと、眼鏡を外し胸ポケットにしまった。

江浜「この眼鏡は……まあ、フィルターのようなもんでね……」

ズボンのポケットから名刺入れを取り出すと……一枚の名刺を慎吾に渡す。

慎吾「……………」

無言で受け取る慎吾を見て、江浜は静かに話し始めた。

江浜「仕事から、いろいろな霊を見てきたが・・・

日本を統^すべた人物を守護霊を持つ者は少ない」

慎吾「!？」

慎吾の表情が急に険しくなる。

江浜「安心しろ。私は敵ではない。1つ警告したいだけだ」

直立不動のままピクリとも動かず、江浜は慎吾の目を見続けている。

江浜「TV局は特異な所。芸能人やその関係者だけでなく・・・
政界や財界、各界の人間、はては暴力団や犯罪者なども訪
れる事がある。

君がこんな所に来るのは危険だ。悪意を持った者に狙われ
かねないからな」

慎吾「・・・」

緊張した表情の慎吾。江浜への視線を切らすことはない。

江浜「ふ・・・。それぐらい警戒してくれた方がちょうどいい。
とにかく、こういう所はなるべく避けるという警告さ」

優しいながらも厳しい眼差しを慎吾に向け、小さく笑った。

慎吾「・・・」

慎吾は、どんな言葉を返していいのかわからない。

ふと化粧直しを終えたリナが戻ってきた。

慎吾に「お待たせ」と声をかけようとしたが・・・にらみ合う2人の男にただならぬ雰囲気を感じ、足を止める。

江浜「万が何かトラブルに巻き込まれるようであれば・・・
いつでも連絡を。名刺は無くすなよ。お守りにもなっている」

慎吾「・・・」

名刺を見つめる慎吾。

江浜「もつとも君には・・・」

その程度のお守りなど、必要無いが・・・」

そう言つとりナの横を通り過ぎ、TV局の奥へと向かって行った。

江浜が横を通り過ぎた後、リナが慎吾の元へよってくる。

慎吾の目線は、江浜の後ろ姿を追ったままだ。その視界をリナがさえぎる。

リナ「あんたさあ・・・ 江浜氏と何話してたの？」

リナの声で我に戻る慎吾。

慎吾「え？ ああ・・・ えっと？ 何でしたっけ？」

軽く慎吾の頭をはたくリナ。

リナ「何、寝ぼけてんのよ。」

何であんたが、江浜氏とにらみ合っていたかつて話」

慎吾「え？ リナ先輩・・・今の人、知ってるんですか？」

慎吾の目を見て、リナは大きく口を開ける。

リナ「マジ！？ あんたマジ江浜氏、知らないの！？」

リナの大きな声に気圧けおされる慎吾。

慎吾「え？ ひょっとして超有名なタレント・・・？」

リナ「違うわよ！ 日本一有名なスピリチュアル・カウンセラーよ！

あんたさあ、あの有名な番組【ホラーの湖】見た事ないの？」

慎吾は迫ってくるリナに、両手でストップのジェスチャーをした。

慎吾「あ・・・ない・・・です」

リナ「霊に関する仕事してる人よ」

慎吾「霊・・・関係？」

リナ「行方不明になった亡骸をさがすとか、悪霊が憑いた人のお祓

いするとか・・・

他には、殺人事件の霊視による犯罪捜査とかもやってたわね。

すっごい霊能力の持ち主で、色んな事件を解決してるのよ」

慎吾「そ、そうなんだ・・・」

リナ「日本一の霊能力者として、超有名よ。マジ、知らなかったわけ？」

慎吾「は、はい・・・」

リナ「で？」

慎吾「？」

リナ「その江浜氏と何話してたのよ？」

彼も私のイケメンランキングベスト10に入ってるのよ。

とても50歳には見えない、若々し・・・」

慎吾「え！？ あの人50歳なんですか！？ 全然見えない・・・」

リナの言葉を遮って、慎吾は驚きの言葉をあげる。

リナ「噂じゃ、高校生ぐらいの娘がいるらしいわよ。」

まあ今日は私・・・ 松順さまでお腹いっぱいだから・・・

」

そう言うと、出口に向かって歩き出した。

リナ「さ！ 帰るわよ！」

慎吾「え．．ええ．．」

2人はTVSの出入り口で、入局許可証を返却して帰路につく。

．．．．．。

帰りの新幹線の中。

窓際に座るリナは、ずっと外の景色を見ている。

慎吾「あれ？ リナ先輩、麻雀しないんですか？」

隣に座る慎吾が声をかけた。

リナ「あんださあ。私が年中麻雀してると思ってるわけ？」

振り返ったリナは、怪訝な表情を浮かべる。

慎吾「い、いえ．．ただ、麻雀で勝つのがすごかったから．．

また見られるかなーって」

リナ「ったく．．」

まあ、あんだのおかげでサバンプ症候群とやらもわかった

し」

慎吾「わざと間違ってますよね？ サヴァン症候群です！」

リナ「そうだったけ？」

慎吾「でも、リナ先輩・・・1つ聞いていいですか？」

リナ「何？」

慎吾「いや、レンタカー店のページにハッキングしたじゃないですか」

リナ「もう少し小さな声で話してよ。それに絶対それ、他言しちゃだめよ！」

慎吾「わかってます。ただ、例えば金融関係とかにですね・・・」

声を小さくしながら話す慎吾。

慎吾「ハッキングして、お金とか引き出せるのかなーって・・・」

リナ「そういう所のファイアーウォールは、さすがに高度だから。

私でも、そう簡単には破れないわよ。

でも、まあ・・・本気出せば出来ると思うけど・・・」

慎吾は専門用語の意味を理解していないが、とりあえず頷く。
ふとリナが何かを思い出したように熱く語り始めた。

リナ「お金はね！　お金はハッキングして稼いでも意味ないの！！
ウデよ、ウデ！　自分のウデで稼いでこそのお金よ！」

そう言うのと右腕の上腕二頭筋を、左手でパチンと叩いた。

慎吾「そうですか・・・」

と言いつつも

（慎吾「賭け麻雀も、違法サイトなのに・・・」）

心の中ではそう思っている。

リナ「お金は・・・大好きだけどね・・・」

どうやらリナには・・・リナなりのお金に対するポリシーがあるらしい。

慎吾は同じセリフを、ちょうど7ヶ月後にも聞かされる事になる。
その時には・・・まだ知る事のない、リナの重大な秘密を知る事になるのだが・・・

慎吾「あともう1つ。お巡りさんがリナ先輩に声をかけた時・・・

リナ先輩、すごーい緊張してたじゃないですか。

過去逮捕された事でもあるんですか？」

リナ「はあー！？　なんで私が逮捕されんのよー！！

ばっかじゃないの、あんたー！！」

反射的に大声で言い返す。

リナ「賭け麻雀のサイトで荒稼ぎしてるのがあるからさ・・・
ちよつとドキツとしただけよ！」

まあ・・・アメリカのサーバ経由してるから・・・
簡単には足つかないはずだけど・・・」

慎吾「なるほど。てつきり逮捕歴があるのかと思いましたよ」

そうでない事が、ガツカリしたようなという表情で小さく笑う慎吾。

リナ「笑うつコじゃないっつーの!!」

私はあれで学費・生活費、その他全てまかかってるんだから!

あんたみたいな親の仕送りは一切ないんだからね!」

慎吾「わ・・・そうなんですか!? やっぱりリナ先輩はすごいな」。

自分で生きていく力を持っている!」

少しずつリナに関する知識が増えていく慎吾。なんだか嬉しくなり、さらに笑顔がこぼれた。

リナ「あー・・・でも、せっかく松順様に会えたんだから・・・
握手だけでなく、サインももらっておけばよかった」

リナはお祈りのポーズをして、新幹線の天井を見つめる。

その言葉を聞いて慎吾が、思い出したように声をあげた。

慎吾「あ！ 忘れてた！ リナ先輩！

事情聴取が終わった後ですね・・・

僕、松浦さんにサインもらっておきましたよ」

リナ「え！？ マジ！！」

慎吾「なんかリナ先輩、松浦さんの事すごい好きそうだったし。ほら！」

慎吾はリュックの中からタオルを取り出す。

それには日本のTOPアイドルの1人、松浦順のサインが書かれていた。

慎吾「このタオル、買ったばかりでまだ未使用ですから。

ホントは色紙があればよかったんですが・・・

あの時は事情聴取だったし、手元にはこれぐらいしかなく

て・・・

これでよろしければ、差し上げます」

リナ「わー！！ タオルでも全然OK！！ マジ嬉しい！

てかあんた気が利くじゃない！ やりい！！」

リナは松浦のサインが書かれたタオルのにおいをかぎ始めた。

（慎吾「はは・・・気を遣われるの、嫌いって言うってたのに・・・」
）

タオルを顔にくるみ、妄想モードに陥るリナ。しばらくそれを見ていた慎吾が、その妄想を打ち破る。

慎吾「あ・・・リナ先輩？」

ニヤけた顔が一瞬にして不機嫌な顔になる。

リナ「なに!？」

慎吾「あ、いや・・・ほら、明後日の収録見学・・・

行きます・・・よね？」

リナ「当たり前じゃない！」

今度は【山嵐】メンバー全員のサインゲットするわよ!」

（慎吾「・・・レポートの事、全く頭に入っていない・・・」）

すでにリナは本来の目的を忘れていると確信した。

慎吾はガッツポーズしてるリナに聞いてみる。

慎吾「明後日の収録なんですけど・・・

僕も行った方がいいですかね？」

（江浜「君がこんな所に来るのは危険だ」）

江浜に言われた言葉を、少し気にしていた。

リナ「はあ？　当たり前でしょ。あんたは私のレポ・・・」

リナは「あつ」という顔をする。そのリナの表情を見て、慎吾は笑顔でこたえた。

慎吾「はは。大丈夫ですよ。リナ先輩のレポートも、僕、書きますから」

リナ「あ、あら・・・ 気が利くわね、今日は」

ばつの悪そうな表情を見せるリナ。

江浜に言われた事も気になったが・・・ 慎吾は、再びリナとTV局に行く事を決意した。

・・・。

箱根湯本駅・駅前、午後9時過ぎ。

慎吾「なんだか・・・ 色々あった1日でしたね」

リナ「そうね・・・ うん・・・」

思いつき背伸びする。

リナ「今日は変な事件あったけど、スピード解決できたし。

松順様と握手も出来たし・・・ サインももらったし!!!

レポート書いてくれる約束も取り付けたし!!!」

そういうとリナは慎吾の顔を見た。慎吾は一瞬ドキツとする。

リナ「ありがとう！」

リナは笑顔で、素直に感謝の言葉を言った。

慎吾「こ・・・こちらこそ、ありがとうございます！」

あんなに遠くまで、案内して貰って・・・」

小さな笑顔で慎吾もこたえる。

慎吾「僕、女の人と2人で出かけたの・・・初めてです！ 楽しかったです！」

その言葉を聞いたリナが冷ややかな顔になった。

リナ「あんたさあ・・・いい1日だったと締めくくりたい時にそれ？」

何、この場でチェリーを宣言してんのよ・・・」

慎吾「え？ 何ですか、チェリーって？」

慎吾は笑顔のままリナに聞き返す。リナは小さく溜息をつき・・・

リナ「今度ネットで調べてみなさい。じゃ、ここでお別れね！」

そう言い放つと、片手でさよならのそぶりを見せ、スタスタと歩き出した。

慎吾「あ、待ってください」

慎吾がリナの後を追いかけてくる。

リナ「ちょっと・・・なんでついてくるのよ？　今日はもうバイバイっしょ？」

慎吾「あ、僕もこっちなんです、帰り道」

慎吾は、リナが歩き出そうとした方向を指さす。

リナ「えー・・・」

リナは露骨にイヤそうな顔をした。

・・・。。。

しばらく同じ道を歩いていた2人。

慎吾「でも今日のリナ先輩、カッコよかったです！」

リナ「あ、そ」

どうでもいいといった感じで、素っ気なく返事をするリナ。

慎吾「絶対リナ先輩以外、犯人捕まえられる人いませんでしたよ！」

慎吾は、少し興奮気味に話していた。

リナ「あんたさあ。まさか私に惚れたりしてないわよね？」

慎吾は笑顔のまま、リナを見つめる。

リナ「・・・・・・・・」

一瞬ドキツとするリナ。

慎吾「惚れたりなんて絶対ないですよ！」

慎吾は元氣よく素直こたえた。この日何度目だろうか・・・リナの冷やかな視線が慎吾を突き刺す。

リナ「あんたさあ・・・ホント、マジで空気よめないっつか・・・

天然で人に殺意与えるプロよね、プロ」

慎吾「え？　今、僕、何か失礼な事言いましたっけ！？」

だってリナ先輩が好きなのは松浦さんでしょ！

次のTVS訪問であいさつしに行くし・・・楽しみですな

」

リナは軽く頭をかく。

慎吾「今度、2SHOTの写真撮ってあげますよ！」

嬉しそうに話す慎吾。

リナ「・・・・・・・・」

慎吾と出会って何度目となるだろうか・・・リナは小さく溜息をつ

いた。

リナ「まあ．．．いつか．．．」

．．．．．。

数分後。

大通りから小道に入り、しばらく歩く2人。

リナ「結局あんた．．私んちの前までついてきたわね．．．」

2人は、とあるマンションの前で立ち止まった。

リナ「あたしはこのマンションだから。あんたたちは？」

まだ先？ それとも．．．

実は私を送ろうとか、変な気を利かせたわけ？」

慎吾「あー．．．」

慎吾はマンションを見つめ、こたえづらそうな顔をする。

リナ「あ、やっぱり私を送ったのね！ 気を遣わなくていいってば！」

不機嫌そうに語るリナに、慎吾が口を開いた。

慎吾「あ．．．僕．．．僕もこのマンションなんですけど．．．」

「

慎吾は目の前のマンションを、申し訳なさそうに指さす。

リナ「ええ！？ マジ！？」

閑散とした小道に、リナの大声が響き渡った。

（第8話へ続く）

第7話 スピリチュアル・カウンセラー（後書き）

次回予告

2度目のTV局見学前日。パソコン室で調べ物をしていた慎吾は、リナと鉢合わせる。徳川埋蔵金は眉唾ものだと主張するリナに対し、慎吾は豊富な知識で反論。

慎吾は実際に発掘された埋蔵金の話 시작했다。その価値10億円という話に驚くリナ。

次回 「第8話 埋蔵金伝説」

第8話 埋蔵金伝説（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TV局へと向かった2人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、2人は特別番組の観客としての招待を受ける。

慎吾はTV局で、スピリチュアル・カウンセラーの江浜に声をかけられた。

第8話 埋蔵金伝説

第8話 埋蔵金伝説

TV局での見学を終えた翌日。

（実際は盗難事件の犯人を捕まえ、タレントにサインをもらったただけで、見学はしていないが・・・）

2012年5月4日、正午過ぎ。

GWで大学は休講であったが、慎吾は大学のパソコン室にいた。

自宅にパソコンを持たない慎吾。課題や調べ物をする時、いつもここを利用している。

大学が休みとはいえ、構内にはまばらに学生や教授の姿が見えた。仕事に励む教授、サークル活動にいそしむ学生や図書館で勉強する学生、ただたむろしているだけの学生・・・

約50台のパソコンが設置されたこの部屋にも、5、6名ほどの学生の姿が見える。

慎吾は一番後ろ、一番奥のパソコンを利用していた。

【スピリチュアル・カウンセラー】【江浜】【霊】などを検索ワードにし、たどりついたページを熱心に読んでいる。

そしてTVS・週レギュラー【ホラーの湖】という番組に、彼が出演していることを知った。

番組中で彼は、行方不明になった家族の亡骸を見つけ出したり・・・

悪霊のようなものに憑かれた人を除霊したり・・・

悪夢にうなされる者へ、的確な助言を与えたり・・・

季節の変わり目などの特番では・・・殺人事件における死体を霊視し、犯人逮捕に貢献したりもしている。YOUTUBEでは、彼が除霊した回の放送分を見る事も出来た。

「あら・・・？」

パソコンから目が離せない慎吾に、何者かが声をかける。

「なんであんたがここにいるの？」

慎吾が振り向くと、眠そうな目をしたリナが横に立っていた。

慎吾「あ・・・リナ先輩。あれ？ 今日大学休みですよ？」

反射的に出た慎吾の言葉は、リナを不愉快にさせる。

リナ「あんたさあ・・・大学休みでも来ちゃいけないってルールある！？」

・
むしろ休みの日にパソコン室で仕事しようってんだから・・・

褒めてもらいたいぐらいだわ！」

慎吾「え？ 仕事って・・・麻雀ですか？」

リナ「そそ。ホントはいつもその席でやってるんだけどね」

アゴで慎吾の操作しているパソコンをさす。

慎吾「あ・・・変わりましたか?」

リナ「いい。気を遣われるのイヤだって言ってるでしょ。

ここでいいわよ」

そういうとリナは慎吾の隣に座り、パソコンを起動させた。

リナ「ノートより・・・デスクトップの方が、大きくて見やすいのよね」

パソコンが立ちあがる間、リナは慎吾のパソコンを覗き込む。

リナ「あら、江浜氏ね。ホントTV映りいいわよね。50歳に見えない!」

でも最近、この【ホラーの湖】も視聴率悪いらしくてさ・・・

打ち切りの話出てるんだって」

この番組では、よく「スピリチュアル・カウンセラー江浜氏は・・・」というナレーションが流れるため、リナも彼の事を【江浜氏】とよんでいた。

慎吾「リナ先輩は・・・この番組、よく見てるんですか?」

リナ「昔はよく見てたんだけどね、最近は全然。」

でもこの番組さ・・・モロやらせでしょ?」

慎吾「え・・・?」

目を丸くする慎吾。

リナ「だって霊なんているわけないじゃん! やらせってわかってても・・・」

江浜氏のイケメンさと、番組構成の巧みさ!

リアリティあつて面白いのよね!。

まあでも最近は・・・マンネリだから、見なくなっただけだよ」

(慎吾「そつかぁ・・・リナ先輩は、霊の存在を信じてないんだ・・・」)

慎吾は・・・

子供の頃から霊が見え、霊と会話して育ってきた。

幼い頃の慎吾は、人間も霊も同じ世界に住んでると思っていた。日常で人と会話もすれば、霊とも会話する。

霊は必ずしも人の形をしてるわけではない。

時には、火の玉が話しかけてきたり・・・時には、体長5cm程度の小さなおじさんが群れをなして話しかけたり・・・

時には、全く喋らない緑色の人や黄色の半漁人みたいな人も見かけ

る事があった。

霊の世界には・・・いろいろな形を有したものが存在するのである。

また霊の世界にも・・・人間界同様、悪い霊も良い霊も、普通の霊もいる・・・。

霊と話す慎吾は・・・周りから見れば、宙に向け独り言を言う不気味な子供だった。

母親が慎吾を気味悪がった事をきっかけに・・・
「霊なんて見えない方がいい」と強く思うようになる。

そして幼い慎吾は、無意識に「チャネル」と呼ばれるものを操作出来るようになった。いわゆる「霊の周波数」とよばれるもので、意識して霊を見えないように自分で調整できるのだ。

普段、慎吾は霊が見えないように「チャネル」を操作している。

しかし・・・それでも、霊が慎吾の前に現れる時がある。

そういう時は、どんなにチャネルを操作しようとしても・・・霊は視界に入り、霊の言葉は頭に入り込んでくる。

そしてそういう時は・・・決まって、何らかの危険が迫っている時だった。

リナ「ちよつと！ あんた聞いてる？」

心ここにあらずといった表情を見せる慎吾に、リナは大きな声をか

けた。

慎吾「え？ あ、もちろん！」

リナ「だからこの夏で、【ホラーの湖】も打ち切りか？ って話なのよね」

リナはすでにネット麻雀を始めている。

慎吾「そうですか・・・」

慎吾が見る限り、江浜の霊能力は本物だ。ディスプレイ越しでも十分にわかる。彼が霊に語りかける口調や視線は、自分が霊に語りかける時のしぐさと全く同じだった。

ただ慎吾は・・・除霊の仕方や、霊視の方法などは知らない。霊が見え、会話が出来ただけの能力に過ぎない。江浜の霊能力とは比べようもない程、未熟なものだ。

慎吾は江浜について約2時間調べ上げた後、今度は【徳川埋蔵金の謎を追え】をキーワードに検索を始めた。

リナ「よし！ 国土無双！！！」

隣でリナがガッツポーズをしている。

リナ「あら？ 今度は徳川埋蔵金？」

キリよく半荘を終えたリナが、ちらつと慎吾のパソコンを覗いた。
ハンチャン

リナ「埋蔵金なんて絶対見つからないって。

見つけたって聞いた事ないし！

賭け麻雀の方がよっぽど生産的！」

そう言うリナに、慎吾は反論する。

慎吾「そんな事ないですよ。埋蔵金は十分存在する可能性があります」

リナが眠そうな目を慎吾に向ける。

リナ「冗談・・・だって見つかった事、無いじゃん・・・」

慎吾「いえ！ あります！

戦後、公おおやけになっただけでも・・・

50件以上、埋蔵金発見の事例があります」

リナ「嘘ー、絶対嘘！！

てかあんたさ・・・そゆのくわしいの？」

慎吾「はい。僕、史学部ですから。

歴史や古代遺跡とか大好きですし、オーパーツなんか大好きです。

失われた古代大陸や文明なんて、想像するだけでワクワクします！

もちろん財宝伝説とか、埋蔵金なんかも興味津々です！」

リナ「あー・・・オタクってヤツね・・・はいはい。
一応、聞くけど埋蔵金見つかった例って？」

小判数枚で5万円ぐらいとか？　よくて15万円ぐらい？」

慎吾はニヤツと笑う。

慎吾「まさか・・・埋蔵金ですよ！」

歴史的価値を含めると、100万はくだらないものばかり
ですから！」

リナ「100万？　うーん・・・微妙・・・
それにそんな話、聞いた事ないしな」

慎吾「戦後最大の発見といえば、1963年の【鹿島清兵衛の埋蔵
金】でしょう！」

当時、時価で6000万円!!」

それを聞いて、リナが目を大きく見開いた。

リナ「6000万円!?　マジ!？」

慎吾「それが当時の価値ですから、今だと・・・
10億円ぐらいですねかね？」

リナ「じゅ、じゅ・・・10億円!?　嘘よ・・・絶対嘘よ!!」

リナは麻雀の手を止め、慎吾に言い寄る。

慎吾「ホントですって・・・ネットで【鹿島清兵衛の埋蔵金】って検索したら

多分、一発で出てくると思いますよ」

慎吾が言うが早いか、リナは高速でキーボードを打ち始めた。マウスをクリックした後・・・

リナ「ほ・・・ホントだ・・・今の価値で10億円・・・」

ディスプレイを見つめながら、目を丸くする。

慎吾「日本には、埋蔵金や宝物伝説が200以上もあるんです。

そのいずれも億単位の価値がありますよ」

リナ「は・・・」

溜息しか出てこないリナ。

慎吾「未だに発見されていない宝の総額は・・・

300兆円とも500兆円とも言われていますから」

リナ「あ、ごめん・・・数字に強い私でも500兆円とか想像できない・・・」

慎吾「北は北海道、南は沖縄まで・・・

どの土地にもお宝伝説はありますからね」

リナ「北海道や沖縄にもあんの!? 初めて聞くわ・・・」

慎吾「ええ。沖縄には【キャプテンキッドの宝物】伝説があります

よ！」

嬉しそうに慎吾は、自分の出身地の話をする。

リナが【待て！】と右手でジェスチャーをする。

リナ「ちょ、ちょ、ちょ……ちょっと待って！」

今、あんた……嘘ついたでしょ！」

慎吾「嘘？」

リナ「キャプテンキッドって、あたし……

確か、子供の頃漫画で読んだわよ！」

キッドって漫画のキャラでしょ！ それに外人なのに沖縄

！？
いくらあたしが歴史に疎いからって、嘘はやめてよ！」

慎吾「いやいやいや！！ キャプテンキッドは実在の人物です！」

ウィリアム・キッドが本名で、海賊船討伐に出たハズなのに……

自ら海賊になったっていう、ミイラ取りがミイラみたいな人ですから」

リナは慎吾の話を聞きつつ、【ウィリアム・キッド】を検索して調べている。

リナ「……………ホントだ……漫画の世界の海賊だと思ってた」

・ 慎吾「彼は結局ロンドンで処刑されるんですが、処刑される直前・

『私は財宝を隠している』と叫ぶんです。

でも場所を告げる前に絞首刑・・・」

リナ「・・・」

慎吾「キッドは強奪した宝物を、近辺の島に隠すクセがあっただけです。

だから彼の最期の言葉は、信憑性が高いと世界中に広まった。

こうして7つの海をまたにかけた・・・

【キャプテンキッドの財宝】伝説が世界中に生まれたんです」

リナ「いやいや・・・それはアリとしてもさ・・・

沖縄はないっしょ・・・いくら何でも」

慎吾がさらにニヤツと笑う。

慎吾「ところが・・・今から70年以上前。

キッドの残した地図が日本のある島と酷似していると・・・

調査した人がいたんです！これがまた非常に興味深くて・・・

」

リナ「あー・・・なんかあんたの話、長くなりそう。わかった！

信じるから！」

慎吾「え！？ 聞かないんですか？

新潟県のとある教師がですね・・・伯父からもらった遺品の中に・・・

何とキャプテンキッドの地図と同じものを見つけたんですよ！

漫画みたいですがホントの話で・・・教え子の夫のアメリカ人が・・・」

リナ「うわー、すっげー信じられないけど、なんか信じたい自分もいる・・・」

リナは両手で頭を抑え、苦悩するしぐさを見せた。

慎吾「全て本当です！！」

リナ「わかったわかった・・・じゃあ徳川埋蔵金つてのは・・・

ズバリ聞くけど・・・マジあんの！？」

慎吾「過去の文献や記録、また調査した範囲での出土品から・・・

間違いなく存在すると言われています」

リナ「ある・・・のね・・・」

慎吾「ええ。2年前の鳩川政権では、それをアテにした財源確保をうたってましたね。

政府関係だけでなく、組織ぐるみで発見に着手してる団体もいるとか・・・

暴力団なんか・・・よく探しているって話を聞きますね」

リナ「でも未だに見つかったって聞かないし・・・」

慎吾「実はすでに見つかっていて・・・公表してないという噂も・・・」

リナ「ふーん・・・。で？ もし見つけたとして、その・・・
お金の価値は・・・いかほどのの？ 徳川埋蔵金は？」

リナにとって、最も興味があるのはそこだ。

慎吾「もし伝説通りなら・・・」

現在の価値で、100億以上はありと言われています」

リナ「ひゃ・・・100億円以上!？」

慎吾「そんな簡単に見つけられる場所には隠さないですよ。

徳川埋蔵金を見つけるには・・・

いくつかの謎に挑戦しなければならぬんです」

リナ「うわー・・・お金は好きだけど・・・

やっぱり簡単じゃないのね・・・

数字がらみの謎なら、自信あるんだけどなー」

慎吾「過去、こういった埋蔵金のありかを示す方法として・・・

数字が使われた例もたくさんあります。」

あとは地図とか暗号とか・・・

徳川埋蔵金だと・・・有名なのは【かごめかごめ】なんてのもあります」

リナ「え？ かーごーめーかーごーめ ってヤツ？」

慎吾「ええ・・・後ろの正面・・・だあれ？ ってヤツです」

リナ「それが・・・ 徳川埋蔵金の謎を解く鍵？」

慎吾「そうです！」

慎吾はニヤツと笑った。

（第9話へ続く）

第8話 埋蔵金伝説（後書き）

次回予告

誰もが知っている「かごめかごめ」。

この歌詞に「徳川埋蔵金」のありかを示す手がかりがあるという・

ただの都市伝説か・・・それとも事実なのか・・・？

次回 「第9話 かごめかごめ」

第9話 かごめかごめ（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TV局へと向かった2人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、2人は特別番組の観客としての招待を受ける。

慎吾はTV局を出る時、スピリチュアル・カウンセラーの江浜に声をかけられた。

第9話 かごめかごめ

第9話 かごめかごめ

西暦1868年（慶応4年）。

永きにわたつて、徳川家が君臨した江戸城。幕府軍（徳川家）の代表・勝海舟と、明治新政府軍の西郷隆盛らとの交渉の末・・・江戸城は官軍（政府）に引き渡された。

当時100万人以上もの民を抱える江戸は、世界でも最大規模の都市。それらの住民を戦火に巻き込ませる事無く、江戸城の明け渡しを成しとげた・・・これが世に言う「無血開城」である。

当時財政難にあえいでいた明治新政府は、幕府の御用金を接收しようとして江戸城内の金蔵に足を踏み入れた。

ところが・・・

金蔵は空っぽ。

開城をよぎなくされた旧幕府が、それらを隠匿した・・・そう判断した政府は、御用金の搜索を始める。

真つ先に政府に目をつけられたのが、大政奉還たいせいほうかん当時勘定奉行であつた小栗忠順あぐりただまさ。小栗は開城前、政府側と徹底抗戦した主要人物であり、開城直前に幕府の再興資金として御用金を隠匿したと疑われた。

開城後、小栗は故郷の上野国（群馬県）に隠棲いんせいしていたが、政府の放った追っ手に捕まる。幕府の財政責任者であつたと小栗が、何も知らぬという事はありませんとした政府側は、彼を厳しく追及。

しかし小栗は御用金について何も喋る事は無かった。

業を煮やした政府は、小栗を謀反の罪で斬首の刑に処す。

「無血開城」と言われた歴史的偉業の背景で、唯一命を落とした男・
・それが小栗忠順である。

後に政府が小栗の故郷をくまなく探索するも・・・御用金はおるか、
小判の1枚も出てくることはなかった。それどころか謀反の証拠と
なるものすら、一切出る事もなかったのである。

小栗を処刑後も、新政府は躍起になって御用金搜索を継続。

幕府崩壊から数ヶ月・・・

赤城山周辺の村人達から、旧幕府の武士達を始め多くの人間が大量
の荷物を赤城山に運んでいたとの目撃情報が入る。

徳川御用金が赤城山に埋蔵されている・・・

この噂は世に広まり、埋蔵金の存在を確信する多くの民間人も徳川
埋蔵金搜索に着手・・・赤城山の各所で発掘が行われることになっ
た。

そして赤城山周辺の発掘で、黄金の徳川家康像が発見され・・・さ
らには埋蔵金のありかを示したといわれる銅板地図も発見される。

これらの発見をしたのが水野智義。

この発見と記録が、今の「徳川埋蔵金」伝説をさらに広く世に知らしめる事になった。

智義が徳川埋蔵金の発掘に着手したきっかけは、義父の中島蔵人^{なかじまくらんど}が死の間際に話した体験談からである。

中島は彰義隊の隊長として上野で活躍。敗色濃厚となった際、甲府に落ち延び・・・城代の柴田監物^{しばたけんもつ}と幕府御用金を持ち出し、24万両を榛名神社^{はるな}の近くに埋蔵。

戊辰戦争^{ぼしん}の後、中島は榛名神社に向かう。ところがすでに掘り起こされた後があり、埋蔵金はなかった。中島は柴田が先に掘り起こしたと確信。無血開城の際、江戸城御用金360万両と共に埋め直した可能性があることを語っている。

さらに中島は幕府の将来を不安視していた大老・井伊直弼が、腹心の小栗忠順や自分（中島）らごく少数の人間に御用金の埋蔵を指示したと語った。

【赤城の井戸を掘れば、埋蔵金の場所がわかる】

中島は死の間際、水野智義にそう語ったという。

水野は中島の死後、津久田原にある「源次郎の井戸」を発掘。その際、黄金の家康像や銅板地図を発見した。

水野家は智義死後も、次男の義治氏と弟の愛三郎氏が後を継いで発掘に携わる。また、愛三郎氏の次男智之氏が現在でも私財をなげうって発掘に携わっており、水野家は3代にわたって徳川埋蔵金を追いかけている事になる。

水野家以外にも、多くの民間人や組織が徳川埋蔵金の発掘に挑戦している。だが、未だに発見の報告はない。

勝海舟の日記に「軍用金として360万両有る」という記録があり、徳川埋蔵金の総額は360万〜400万両と推定され、現在の価値に換算すると100億円以上と言われる。

2年前の日本政府が、この徳川埋蔵金を財源のアテにしようとした話は有名である。

もともと最初に徳川家の御用金に目をつけたのは、明治新政府なのだが・・・

なお、これだけ多くの人が長年徳川埋蔵金に着手し未だに発掘の報告がない事から、「赤城山はおとりだった」「いや、それ以前に徳川埋蔵金自体がないのでは?」「絶対にある!」という議論が今なお続いている。

・・・。

リナ「で?　なんで【かごめかごめ】が、徳川埋蔵金とつながんのよ?」

慎吾「ええ、こういつた宝とかを隠す場合・・・

完成度の高い暗号や地図を使うケースが多いんです。

徳川埋蔵金は、この【かごめかごめ】の歌詞に・・・
そのありかを示したと、昔から言われています」

リナ「信じられないわね・・・ただの子供の歌でしょ？」

慎吾「じゃあ、リナ先輩。かごめかごめの歌って歌えます？」

リナ「多分、歌えると思う・・・」

かーごめー かーごめー

かーごのなーかのとーりーはー

いーついーつでーやあるー

よーあーけーのばーんにー

つーるとかーめがすーべったー

かめ【と】と歌われる）

うしろのしょうめんだあーれー

特にひっかかる事もなく歌ってみせた。

慎吾「リナ先輩。この歌詞の意味わかります？」

リナ「は？ 考えた事もないわ。

籠かごの中の鳥が出ようとしたら・・・

鶴と亀がすべって、後ろに何かある？」

慎吾「どついう意味ですか？」

リナ「全然・・・」

首を横に振るリナ。

慎吾「じゃあ何故、リナ先輩はこの歌を歌えるんですか？」

リナ「はあ？　だって・・・　有名だからでしょ？」

ニヤツと笑う慎吾。

慎吾「それですよ！」

慎吾はリナを指さす。

リナ「あの・・・　あんたが何言ってるかも、わかんないんだけど？」

慎吾「歌詞の意味が全くわからないのに・・・

何故、こうもう完璧に歌えるかって事です」

リナ「うーん・・・

子供の頃から、何度となく歌ったり聞いたりしてたから？」

慎吾「そう！　それが狙いです！」

リナ「？」

慎吾「無血開城時の幕府は、御用金を隠す事を決意。
時が来たらまた掘り起こすつもりで・・・

必要最小限の人間以外、誰も知らぬ場所へ埋蔵した・・・」

リナ「・・・」

無言で頷くりナ。慎吾の話に、かなりに食らいついている。

慎吾「御用金を埋めた連中が亡くなった後でも・・・

埋蔵した場所や情報を示す何かを、この【かごめかごめ】に隠した。

そして幕府は、その歌を世に広めたんです」

リナ「幕府が・・・【かごめかごめ】を広めた・・・？」

慎吾「はい。何でもない歌が、全国に広まるのは・・・
当時世を治めた幕府の力としか考えられない・・・

ってわけです」

リナ「でも・・・やっぱり信じられないわよ」

慎吾「日本人の多くは、【山嵐】のヒットソングより・・・
【かごめかごめ】の方を歌えますから」

リナ「そ、そうかな・・・？」

慎吾「【山嵐】のヒットソングと違い・・・

【かごめかごめ】は作詞作曲どころか、その発祥も不明な
んですよ」

リナ「むっ・・・」

腕組みをし、眉をひそめるリナ。

リナ「確かに・・・謎の多い歌だわ・・・」

埋蔵金伝説に対し、最初全く信じていないリナだったが・・・信憑性の高い慎吾の話の後では、半信半疑になっていた。

慎吾「じゃあ、リナ先輩は【ドナドナ】って曲知ってます?」

リナ「あー、あの子牛が売られていくよーって歌ね。知ってる知ってる」

あーるはれたー ひーるーさがりー いーちばーへつづくみちーにーばしやーが ごーとごーと こーうーしーをのせーていくー

かーわーいーいこうしー うられていーくーよー
かわーいそーなひーとーみーでー みーてーいーるーよー

ドナドナドーナードーナー こうしをのーせーてー
ドナドナドーナードーナー にばしやがゆーれーるー

リナは歌ってみせた。

リナ「あら。中学校の音楽の時間で習って以来だけど・・・

結構、歌えるものね」

慎吾「この歌、ユダヤ人がアウシュビッツに連れて行かれる歌なんですよ」

リナ「は? えっと・・・ナチスドイツに?」

慎吾「ええ。子牛はユダヤ人。」

荷馬車は、アウシュビッツへ行く車を表現してるんです」

リナ「言われてみれば……でも、そうだとしたら恐ろしい歌じゃない！」

慎吾「【ドナドナ】だって、何でもない歌のはずなのに誰もが歌える歌。」

そういう曲には、何らかのメッセージが隠されている……

そういう例の1つですね」

リナ「ふん……何かだんだん……

あんたの言う事が、すっげー正しい気がしてきたわ」

とはいえ、まだまだ完全には信じられない。

慎吾「【かごめかごめ】も……

メッセージが隠された歌の1つってわけですよ」

リナ「確か……子供の頃にやったわね、かごめかごめって遊び。目隠しして輪の中心に座って、歌が終わった時に……

自分の後ろにいる人を当てる遊びだったわよね？」

慎吾「そうです」

かーごーめー かーごめー

かーこのなーかのとーりーはー

いーついーつでーやあるー
よーあーけーのばーんにー

つーるとかーめとすーべったー
うしろのしょうめんだあーれー

リナ「でも埋蔵金とつながるようなのって・・・

この歌詞にはないと思うけどねー ふあー」

リナは大きなあくびをした。

慎吾「そもそも【かごめかごめ】の歌詞自体、不思議な表現が多いんです」

リナ「？」

慎吾「まず最初の【かごめ】。

これは、籠^{かご}の編み目という意味や・・・

【囲め】のなまった音、そうとらえる事もできます。
埋蔵金を何かで囲った・・・という人もいます」

リナ「それだけじゃー、話にならないわね」

慎吾「【かごのなかのとり】も、単純に籠の中の鳥ともとれるし・・・

・ 籠の中の鳥居、つまり竹林の中にある鳥居とも。

あるいは、隠した金そのものを鳥と表現しているのかも・・・

」

リナ「ふ〜ん・・・」

だんだんと瞼まぶたが重く感じてきたリナ・・・。

慎吾「【いついつでやる】は、いつ出られる。つまり子供の遊びとして・・・

・
・
輪の中にいる鬼がいつ出られるという意味・・・ではなく・

埋蔵金がいつか出てくる・・・という意味なのかも」

熱く語る慎吾に対し、リナには眠気が襲っている。

慎吾「そして一番おかしい歌詞が次。【よあけのばんに】です。

夜明けは朝をさすのに、晩は夜をさす・・・

夜明けのような晩なのか、順番として夜明けの番なのか・

・

リナ「・・・」

慎吾「あるいは夜明けと晩とは、反対の意味として・・・

存在しないという意味なのか・・・」

慎吾の催眠術のような語り口は、リナの眠気を促進させる。

・
慎吾「【つるとかめが滑った】。縁起の良い鶴と亀がすべるので・

・
とても悪い事ともとれるし、とてもいい事ともとれるんで

す。

敦賀と亀岡を統べたという事で、明智光秀の意味という人もいますし。

あるいは、埋蔵金を発見するために何かしろという意味なのか・・・」

腕組みをしたままりナは・・・

リナ「・・・zzz・・・」

本格的に眠り始めた。

慎吾は気を遣って小さな声で語り続ける。

慎吾「そしてもう1つおかしな歌詞【うしろのしょうめんだあれ】。

普通後ろの人を誰か聞くなり、【後ろはだあれ？】ですむのに・・・

【後ろの正面】はおかしな表現・・・」

リナ「zzz・・・」

さらに声のトーンを落とす慎吾。

慎吾「だって、後ろは後ろだし、後ろの正面は結局自分という事に・・・

自分に向かって【だれ？】というのもおかしな話・・・」

リナはスースーと寝息をたて始めた。慎吾はすでにリナにでなく、自分自身に話しかけている。

慎吾「この歌に隠された場所は・・・

日光東照宮という興味深い説もあるんですよ・・・

それだけでなく・・・」

・・・。。。

慎吾「・・・・・・」

一通り話し終わった後、慎吾はリナを見て優しい視線を送った。

リナ「zzzz・・・」

腕組みをしたまま、とても心地よさそうに・・・そして器用に寝ている。

今一度ニコツと笑顔を見せた慎吾は、自分のパソコンを見つめた。

慎吾「・・・・・・」

【TVS】【徳川埋蔵金の謎を追え】を検索ワードに、いくつかのページを読み始める。

そして・・・

翌日起こる大きな事件・・・

その首謀者の書き込みを、目にする事になった。

(第10話に続く)

第9話 かごめかごめ（後書き）

次回予告

慎吾はTV番組【徳川埋蔵金の謎を追え！】に関するページをいくつか検索しているうち、とある掲示板にたどり着く。

そこでは、徳川埋蔵金の存在について賛否両論が展開されていた。ふと目を覚ましたリナが、その掲示板に違う名前の同一人物がいると指摘。

そしてその人物は・・・意外な場所から、その書き込みをしていた。

次回 「 第10話 謎の同一人物 」

第10話 謎の同一人物（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 F i r s t s e a s o n

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TV局へと向かった2人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、2人は特別番組「徳川埋蔵金の謎を追え！」の観客として招待を受ける。

慎吾はリナに、徳川埋蔵金のありかを示すヒントは、【かごめかごめ】の歌にあると語った。

第10話 謎の同一人物

第10話 謎の同一人物

【TVS 徳川埋蔵金の謎を追え！】

ネットで検索していると、必ず一人の男が現れる。

この番組のプロデューサーである・・・糸見という男だ。

1990年代に活躍した、日本を代表するコピーライターであり・・・作家でもある。

彼の発案した【徳川埋蔵金の謎を追え！】の企画が通り、番組として大々的に放送される事になったのが1999年。

第1回放送では、徳川埋蔵金にまつわる史実を歴史研究家やタレントを交えて放送。見事高視聴率をとり、国民の話題をかつさった。

半年後の第2回放送からは、大型重機を使って赤城山周辺を発掘。番組中、江戸幕府に関する出土品が数点発掘されたものの・・・その歴史的価値は低く、徳川埋蔵金につながる事はなかった。

地中50mもの大規模な発掘作業の際、いくつかの不自然な横穴を発見するが・・・こちらも徳川埋蔵金につながるものではなかった。

番組自体は数度の特番が組まれるも、視聴者を惹きつけるような結果を出す事が出来ず・・・視聴率の降下と共に2002年、同企画は打ち切りとなる。

あれから10年・・・

番組改編期のこの時期に・・・特番で【徳川埋蔵金の謎を追え！】が放送される事が決まった。

何故10年の時を経て、この番組が再度登場したのか・・・

徳川埋蔵金のありかを示す信憑性の高い「何か」が、新しく発掘されたのだろぅというのが大方の見方である。

5月5日・・・すなわち明日、その番組収録がある。

プロデューサーでもあり、発掘の陣頭指揮をとっている糸見。もちろん番組の主要な出演者の1人だ。他にも歴史学の権威や、考古学の教授、タレントサイドからは人気絶頂アイドルグループ【山嵐】の出演も決まっていた。

TVSのページで同番組をチェックすると、スペシャルゲストも来るという。

慎吾「・・・」

この番組について調べている慎吾だが・・・10年ぶりの復活となった理由は、どのサイトにも記されていない。番組を見てのお楽しみといった所であろぅ。

慎吾「・・・」

日本最大の巨大掲示板【5ちゃんねる】では、この番組に関するス

レッドが賑わいを見せていた。埋蔵金は発見できないであろうという「否定派」の書き込みが圧倒的に多い。

「10年前はマジ騙された。今度もダメされるのがオチ」

「どうせまた、世界一の土木番組になるって」

「だいたい埋蔵金の存在自体が怪しい話」

「え？ まだ懲りてないの？ この不況時、制作費無駄遣いナンバ
ー」

「何か出ても、ヤラセとしか思えないし」

「夢見るオヤジじゃいられないってか？」

「ま、宝くじと同じ。夢見る番組って事でいーんじゃね？」

多くの否定派に混じって、ポツリポツリと肯定派の書き込みもある。

「何故、10年越しに番組再開したか考えろよ。あるって事だろ？」

「なけりや番組再開する意味ねーじゃん」

「無血開城の際に、蔵が空っぽだったんだぜ？ 絶対持ち逃げしてるって」

「黄金の家康像見つかったる！ 絶対どこかにあるだろ！」

注意深く読んでいくと、深い知識で肯定する人間もいた。

慎吾「・・・・・・・・・・」

さらに1つ1つの書き込みを丁寧に目を通していく。

ふと、腕組みをしたまま眠っていたリナが目をさました。

リナ「う、うん・・・・」

大きな伸びをした後、メガネをかけ直す。

リナ「あ、あれ？ 私、何で寝てんの？

あ、ヤベ！ 麻雀の途中だったんだ！

ラスのまま放置してるし・・・・」

慎吾がリナの方を振り返り、ニコツと笑う。

慎吾「おはようございます」

リナはいったん麻雀サイトからログアウトする。

リナ「えーっと・・・かごめかごめの話してたような・・・

あまりにつまらなくて寝てたわ・・・

私、歴史とか興味ない話聞くと、すぐ眠くなるのよね」

慎吾はくすつと笑いながら声をかける。

慎吾「なのに、明日の番組収録は行くんですよね？

徳川の話がメインの番組ですよ？」

リナ「もちろん行くわよ！ レポートあんた書いてくれるでしょ？

私は【山嵐】のサインをもらって使命があるしね」

慎吾「……」

リナ「あら？ 何、あんた？ 番組の予習でもしてんの？」

リナは慎吾のパソコン画面を覗き込む。

慎吾「ええ。とりあえず過去、この番組がどんな進行だったのかとか……

どんな発見があったのかとか……色々調べてるんです」

リナ「は、あんた真面目よね」。

ま、私のレポートのためにも頑張ってるね……

あら？」

リナが何かに気づいた表情をした。

慎吾「何か？」

リナ「……」

じっと慎吾のパソコン画面を凝視するリナ。

リナ「うん。これ・・・そしてコレ」

リナは慎吾のパソコン画面の2ヶ所を指さした。そこには、ハンド
ルネーム

【A r i t o u T o m o k i】【T o k u m o t o A i r i】

の書き込みがあった。

慎吾「？」

リナ「この2人、同一人物ね」

慎吾「え？」

慎吾はスレッドを確認する。

【A r i t o u T o m o k i】が、徳川埋蔵金の存在を肯定する
書き込みに対し・・・

【T o k u m o t o A i r i】は、それを否定する立場をとつて
いる。

慎吾「どう見ても同じ人に見えませんが・・・」

リナ「こういう掲示板ではよくあるのよ、自作自演ってヤツが。

自分の意見を通じたり、周りを盛り上げるためにね。

反対の立場とってるのは、同一人物と思わせない偽装よ、
偽装！」

慎吾「いや、だから何故・・・同一人物だってわかるんですか？」

リナ「見えるのよね、こういうの。意識しなくてもさ」

そう言うとりなは、自分のパソコンでワープロソフトを開いて説明し始めた。

【A r i t o u T o m o k i】 " A R I T O U
T O M O K I

【T o k u m o t o A i r i】 " T O K U M O
T O A I R I

リナ「わかる？ 片方のアルファベット並び替えたらさ・・・
もう片方の名前が出来るの？」

慎吾はゆつくりと、1文字1文字確認する。

慎吾「ほんとだ・・・アナグラムってヤツですね。
でも、ただの偶然って可能性も・・・」

リナは慎吾の目の前で、右手を左右に振る。

リナ「ないない。ただか数10人が書き込んでるスレッドなのよ。

こんな長い適当なハンドルネーム2つが、ローマ字並び替えて・・・

一致する確率、0・1%以下よ。こんな偶然ないって」

慎吾「でも性別も言葉遣いも違うし・・・

やっぱり違う人にしか見えないな」。

0・1%の方じゃないですか？」

リナ「あんたさあ。0・1%を知らないでしょ？」

数学の世界では、起こりえないって意味よ。

それにネット世界で、どれだけ性別偽ってるヤシがいる事か・・・」

慎吾「そ・・・そうですか？ うん・・・でも・・・」

それでも納得できない慎吾。リナは小さいため息をついた後、

リナ「しゃーない、見てて」

と声をかける。

カタカタカタカタ・・・

画面を見ながら、ブラインドタッチでキーボードを高速で打ち始めた。

リナ「別パソコン使って自作自演しても、IPアドレスを調べれば一発よ・・・」

慎吾「・・・・・・」

慎吾は黙って、リナの作業を見ている。

リナ「あら・・・？」

眉をひそめるリナを見て、慎吾が少し勝ち誇ったように

慎吾「ほら、やっぱり別人だったでしょう？」

と言った。

リナ「・・・」

眉をひそめたままのリナは、自分のパソコン画面を確認している。

リナ「いや・・・同一人物なだけどさ・・・」

慎吾「あれ？　そうなんですか？　何かおかしい事でも？」

リナ「うん・・・ IPアドレスからはプロバイダと・・・

使用者がどこにいるかってのが、だいたいわかるんだけど・

・

会社とか組織単位なら、書き込んだ住所まで特定できるのよ・・・」

慎吾「え？　じゃあ、書き込んだ場所までわかつちやったとか？」

リナ「うん。この同一人物が書き込んだ場所・・・

何度も確認したけど・・・間違いないわね、うん」

自分を納得させるようにつぶやき、意外な一言を口にした。

リナ「この部屋よ。絶対間違いない」

慎吾「ええ！？」

驚きの声をあげる慎吾。

リナ「何度も確認したけど・・・絶対この部屋から。間違いない！」

リナはパソコンのIPアドレスを指さしているが、慎吾にはただの数字と英字の羅列にしか見えない。

慎吾「この部屋から・・・」

しばらく自分のいるパソコン室を見渡す。今、この部屋にいるのは慎吾とリナの2人だけだ。

慎吾「・・・」

慎吾は再度【徳川埋蔵金の謎に迫る！】専用スレッドを読み直した。

【Aritou Tomoki】 書き込み日時 5月3日 16:07

俺は、明後日の収録に参加する。とっても楽しみだ！

【Tokumoto Airi】 書き込み日時 5月3日 16:11

埋蔵金なんて見つからないわよ。ある意味、またやっちゃいそうで
楽しみだけど

【A r i t o u T o m o k i】 書き込み日時 5月3日 16:
13

スタジオには埋蔵金のありかを知ってる人がくるんだってよ!

【T o k u m o t o A i r i】 書き込み日時 5月3日 16:
16

今までもありかを知るって人が出てたけどダメだったじゃん!
どうせ今度の人間だって、期待ハズレよ

慎吾「・・・」

リナの言う事が正しいなら・・・

この2人は前日の午後4〜5時の間で、このパソコン室で自作自演
をしている事になる。ちょうど松浦順のバッグ盗難事件を解決して
いる頃だ。

慎吾「この人、明日の収録に参加するんだ・・・」

リナ「みたいね」

リナは全く興味なさそうだ。

慎吾「この部屋で書き込んで・・・」

ひょっとしたら・・・マスメディアのレポートを書くため
に?」

リナ「さすがの私でも、そこまではわからないわ。

まあ明日スタジオに行けばわかるんじゃない？

講義で見た顔がいればそうだし、いなければ関係無し！」

慎吾「ええ・・・」

元氣のない返事をする慎吾。

今なお埋蔵金を発見したという情報は見つけれられない。新たな情報が出ない限り、埋蔵金発見へは遠い道のりに思えた。

（慎吾「それよりも・・・」）

何故、この人物はこの部屋から自作自演を演じたのか・・・

そして・・・慎吾にはどうしても気になる1つの書き込みがあった。

【A r i t o u T o m o k i】 書き込み日時 5月3日 16:13

スタジオには埋蔵金のありかを知ってる人がくるんだってよ！

埋蔵金のありかを知る人物とは・・・

（慎吾「いたい・・・？」）

多くの謎を抱えた慎吾。この後も、ずっと番組に関するサイトを閲

覧していた。

（第11話へ続く）

第10話 謎の同一人物（後書き）

次回予告

5月5日。リナと慎吾は再度TVSに訪れる。
松浦との挨拶を済ませ、いよいよ番組収録に参加。

最初、前説のお笑い芸人のネタ見せから始まった。
その後、ニュースでよく見る女子アナやプロデューサーの糸見が姿
を現し・・・

スペシャルゲストの【山嵐】に加え、スピリチュアル・カウンセラ
ーの江浜も姿を見せた。

慎吾は、このスタジオで・・・
これから巻き込まれる大事件の黒幕と遭遇する。

次回 「 第11話 ファースト・コンタクト 」

第11話 ファースト・コンタクト（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 F i r s t s e a s o n

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TV局へと向かった2人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、2人は特別番組「徳川埋蔵金の謎を追え！」の観客として招待を受ける。

第11話 ファースト・コンタクト

第11話 ファースト・コンタクト

2012年5月5日土曜日。 正午・・・

慎吾とリナはTVSの受け付けで、入局許可証を受け取った。

2日前にもらった招待状を受け付けに見せると、待つように指示される。しばらくすると、松浦順のマネージャが2人の前に現れた。

軽い挨拶をすませると、マネージャが2人を連れて歩き出す。そしてたどり着いたところは・・・小さな楽屋。

マネージャが軽くノックして先に中に入った。すぐにまた楽屋の扉が開き、2人を招き入れる。

2人が楽屋に入ると・・・

日本のTOPアイドルグループ【山嵐】のメンバーの1人、松浦順がいた。

白いTシャツの上から黒いベストを羽織り、室内にも関わらず黒い帽子をかぶっている。松浦は自信に満ちたその表情と、余裕のある笑顔を2人に投げかけた。

芸能人をよく知らない慎吾でも、アイドルの存在感・・・オーラを感じる。

松浦の笑顔をキャッチしたりナは、大きなポニーテールをなびかせ両手を広げた。そして松浦に向かって走り出し、熱烈なハグをしよ

うとする。

それをスルリと華麗にかわした松浦は、自然な流れで慎吾に握手を求めた。熱烈ファンへの対応もお手の物である松浦。慎吾は「さすが日本のトップアイドル」と感心しながら、握手に応じる。

松浦「やあ、2日ぶり。ちゃんと来てくれたね」

握手をしながら松浦は・・・アイドル光線とでもいおうか、華やかな雰囲気周りに発散した。

慎吾「はい！今日はTV収録に招いていただき感謝です！」

松浦の手を力強く握り替えし、笑顔で応える慎吾。

リナ「・・・」

ハグが空を切ったりリナは、腕をクロスしたまま固まっている。

松浦「収録まで1時間あるけど・・・」

打ち合わせで、もう行かなくちゃいけないんだ。

またスタジオで会おう」

慎吾「はい！」

松浦はリナの方を振り返って静かに握手を求めた。

松浦「リナ・・・今日はよろしく」

慎吾に見せた笑顔とは違う、【女性専用】の笑顔がリナの硬直を解く。

【これでもか！】というぐらいのにこやかな笑顔を見せたリナは、松浦の右手を両手で握り返した。

リナ「あの・・・ あ・・・」

普段慎吾に対してふてぶてしいリナが、緊張のあまり声を出せない。

松浦「じゃあ、2人とも。スタジオで！」

そう言うと松浦は、リナの両手を半ば強引に引き離して楽屋の出口に向かった。

リナ「あ・・・」

松浦に何か言いたいが、何を言ったらよいのかわからず言葉が出ない。

察した慎吾が代わりに声をかけた。

慎吾「松浦さん！」

出口手前で慎吾の方へ振り返るしぐさがいちいちカッコイイ。

松浦「なに？」

笑顔を絶やすことはない松浦。

慎吾「もしよろしければですが・・・

後で【山嵐】さんの他のメンバーにも会えないでしょうか？」

松浦は迷う表情を一切見せずに即答する。

松浦「ああ、構わない。メンバーに君たちを紹介してあげるよ。

あと望めばだけど・・・サインも全員分書かせてやるさ」

時にアイドルは、打算的にファンに接する時がある。周りに誰もいなければ、たかだか一人二人のファンに冷たい態度をとるものだ。

しかし松浦にそのようなそぶりは一切無い。ファンに対する真摯な姿勢・・・それが日本一のアイドルたる条件なのかもしれないと慎吾は思った。

松浦「じゃあね」

今一度笑顔を振りまいた松浦は、楽屋から出て行く。

その後松浦のマナージャから、収録に関しての説明を受ける慎吾とリナ。

慎吾「わかりました」

心ここにあらずのリナに変わって、慎吾がしっかりと説明を聞く。

説明が一通り終わった後、2人は楽屋を後にした。

慎吾「あ、すいません！」

松浦の楽屋を出た際、慎吾は何者かにぶつかる。

「・・・・・・・・」

慎吾「あ・・・・・・・・」

ぶつかった相手は・・・2mはあろうかという大男。その男は、ギリと慎吾を睨み付けた。

慎吾「す・・・・すいません・・・・」

深々と頭を下げる慎吾。

「ほら、マリオ！　行くぞ！！」

その大男・・・マリオと呼ばれた男は、後ろから来た別の男に背中を叩かれ、無言のままその場から立ち去った。

慎吾「・・・・・・・・」

その大きな背中を、しばらく見つめる慎吾。

リナ「で？　どれぐらいでスタジオに向かえばいいの？」

楽屋から出てきたリナに声をかけられる。あわてて携帯の時間を確認する慎吾。

慎吾「あと40分。午後1時から第17スタジオで収録です」

リナ「OK」

慎吾と2人になったリナは、いつもの調子に戻っていた。

リナ「しっかし・・・。」

時々、あんたの空気読めない性格をうらやましく思っわ」

慎吾「ありがとうございます！」

リナ「いや・・・褒めてないっつの・・・。」

でも【山嵐】メンバー全員分のサインは大きいわ！」

慎吾「写真もOKなら、リナ先輩と一緒に撮りますから」

リナ「マジ！？ 絶対写真撮って！ 絶対よ！！」

そついうとリナはお祈りのポーズをする。

リナ「これがきっかけで・・・」

メンバーの誰か、私の彼氏にならないかしら」

慎吾「そついう夢を見るのもアリだと思いますよ」

相変わらず屈託のない笑顔でリナに話しかける慎吾。

リナ「・・・」

その言葉に反応したリナは、冷たい視線で慎吾を睨み付ける。

リナ「・・・・・・」

何か言いたげだが、ぐっとこらえた。

リナ「ま、今日はメンバー全員のサインで許してあげるわ」

・・・・・・

午後1時。約束の時間にスタジオ入りする慎吾とリナ。

観客席に座らせられるも、メインステージにはセットのみで【山嵐】
や他の出演者の姿はない。

観客は約100人。慎吾はキョロキョロと観客席の方を見渡すが、
知った顔はいなかった。

慎吾「・・・・。授業で見た顔、いませんね・・・・」

リナ「あ、そ」

素っ気ない返事を返すリナ。

リナ「てか、まだ【山嵐】は出てこないの？」

席について数分。観客の前に真っ先に出てきたのは・・・・若手お笑い芸人だった。

慎吾「あ！」

芸人右「どうも、時任マリオです！」

芸人左「どうも、赤塚ルイジで〜す！」
あかつか

コンビ芸人の片方・・・慎吾が楽屋から出てきた際、ぶつかった大男だ。

2人「2人合わせて・・・スーパーマリオブラザーズで〜す！」

マリオ「コント！」

【1upキノコと間違えて、リアル毒キノコを食べるマリオ】！」

ルイジ「あ！兄さん！1upキノコだよ！早く食べなきゃ〜」

TVカメラが回っているわけでもないのに、彼らは観客の前でネタを見せ始めた。

慎吾「な・・・何ですかね？」

全然番組と関係無いし、カメラも回ってないのに」

リナ「知らないの〜？ 前説まえせつってやつよ」

慎吾「前説？」

リナ「収録前に、観客に注意事項とか色々説明したりすんのよ。

まずは芸人とかが盛り上げて、雰囲気作りをしたりすんの」

慎吾「へ〜、収録前にこういうのがあるんですね」

芸人のコントに慎吾は笑っている。

慎吾「なかなか面白いですね、あの芸人」

リナ「はあ！？ どこがあ！？ あんた、笑いのレベル低すぎ！」

慎吾「あ・・・リナ先輩。ちょっと声、大きい・・・」

リナは眠そうに芸人のネタを薄目で見ていた。

マリオ「はい、じゃあ盛り上がった所ですね」

ルイージ「観客のみなさんに注意事項がありま〜す！

よく聞いてくださいね」

ネタ見せを終えた芸人は、観客に「拍手する時は大きく」、歓声を上げるときは「お〜」と大げさに言うなどの指導を始めた。

マリオ「写真撮影は禁止ですから」

大きなジェスチャーと共に、携帯の電源を切るよう指示する。

慎吾は指導された通り、大きな拍手の練習に参加した。リナはかつたるそうにリズム感のない拍手をしている。

リナ「もう・・・早く【山嵐】を見せて欲しいのに・・・」

慎吾「まあまあ。もうすぐですよ。」

でもあのマリオって人、かなり大きいですね」

リナ「全く興味ない」

慎吾「2 m越えてるんじゃないですか？」

リナ「あんた目え悪い？」

細目でその芸人を見るリナ。

リナ「私が見た所・・・」

イケメン俳優の大栗旬と同じぐらいかな。

ズバリ184 cmと見た」

慎吾「ええ！？ 絶対2 m越えてますって！」

リナ「はいはい。じゃ、2 m50 cmにしとくわ」

全く興味のない話題に適当に応えるリナだった。

・・・。

2人がスタジオ入りして20分ほど過ぎた後・・・

撮影用の大きなTVカメラを持ったスタッフらしき人が、数名入ってきた。さらには音声マイクや、見慣れぬ機器を持った人たちもぞろぞろとスタジオ入りする。

カメラクルー、撮影スタッフ、アシスタント・ディレクターADら20名以上がステージに上がり、色々な機器の調整を始めた。

慎吾「あ．．．何か慌ただしくなってきましたよ」

すると今度は司会者用のマイクと思われる場所に、TVでよく見る女子アナウンサーが現れる。

慎吾「あ、リナ先輩！ 見てください！

いつもニュース読んでる人ですよ！！

TVで見るより綺麗な人ですね」

リナ「だからあたしはイケメンしか興味な．．．」

台詞が言い終わらないうちに、観客席から大きな女性の歓声があがった。

日本を代表するアイドルグループ．．．【山嵐】が全員揃ってスタジオに入ってきたのだ。

リナ「きゃーーーーー！！！」

腹の底から黄色い声をあげるリナ。右側に座っていた慎吾は、反射的に左耳を押さえる。

リナ「きゃーーーーー！！　　きゃーーーーー！！　　きゃーーーーー！！！」

もはや声にならない奇声をあげ、彼らに大げさに手を振った。その大げさなアクションが功を奏し、松浦が2人に気づく。

松浦は指をパチンと鳴らし、2人を指さして笑顔を振りまいた。

リナ「きゃーーーーー!!! 松順様が、きゃーーーーー!!!」

慎吾の左耳を抑える手は・・・しばらくそのままだった。

【山嵐】に続いてスタジオ入りしたのは、この番組の企画発案者である糸見。

黒一色で固めたコーディネートで登場し、鋭い目つきのまま所定の位置につく。今回の収録に対してのただならぬ意気込みが伝わってきた。

続いて、いかにも大学教授っぽい貫禄あるスーツにネクタイ姿の男が3名スタジオに入ってきた。

さらに・・・

慎吾「あ・・・」

思わず声が出た慎吾の視線の先に・・・
スピリチュアル・カウンセラー江浜の姿があった。

Yシャツネクタイの上から黒いスーツ。2日前、初めて出会った時と同じ格好。銀縁眼鏡の奥にある優しい目つきは、一瞬だが間違はなく慎吾をとらえた。

プロデューサー系見、スピリチュアル・カウンセラー江浜。

慎吾はまだ気づいていないが、あの掲示板へ書き込んだ人物も・・・
今まさに慎吾の身近にいる。

そして・・・

掲示板の書き込みにあった「埋蔵金のありかを知ってる人」・・・

その正体を慎吾が知るのは・・・ もうしばらく後だった。

（第12話へ続く）

第11話 ファースト・コンタクト（後書き）

次回予告

とうとう10年越しに・・・【徳川埋蔵金の謎を追え！】の収録がスタートした。

最初は糸見や、学者のディスカッションが続く。

糸見が新たに発見した銅版について語り出した所から、スタジオ内は盛り上がってきた。徳川埋蔵金のありかを示したと言われる銅版。

その銅版を持って現れたのは・・・意外な人物であった。

次回 「第12話 白ずくめの男」

第12話 白ずくめの男（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TV局へと向かった2人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、2人は特別番組「徳川埋蔵金の謎を追え！」の観客として招待を受ける。

番組収録では、スピリチュアルカウンセラーの江浜がスペシャルゲストとして招かれていた。

第12話 白ずくめの男

第12話 白ずくめの男

女子アナ「お待たせしました。ついにこの日が来ました！

今宵、とうとう・・・徳川埋蔵金発見か！？」

TVSを代表する美人女子アナ。その綺麗な声で、収録が始まった。

観客席の慎吾達は、前説の芸人に指示された通り大きな拍手を送る。

慎吾「・・・」

気になる人物がいた。スピリチュアル・カウンセラーの江浜だ。

（慎吾「・・・体調が・・・悪そうだ・・・」）

何となくではあるが、慎吾には江浜の顔色がすぐれていないように見えた。

女子アナ「では早速。まずは糸見さんにお話を・・・」

いつもは発掘現場にいる事が多い糸見だが、今回はスタジオ収録に参加している。

収録開始最初の30分は・・・過去の番組構成と同じ、徳川幕府が終焉を迎える歴史的背景や無血開城の話がスタジオ内にある大型VTRで説明された。そして本来あるべきはずの御用金が全て行方知れずになっていた流れから、出演者との間でディスカッションが始まる。

教授A「今まで見つかった文献や資料を見渡しても・・・
埋蔵金の存在は間違いないですよ」

教授B「ならば何故、御用金消失から150年近くも見つからないのですか？

そもそも新政府が勝手に江戸の御用金を目当てにしているだけ。

【ある】でなく、【あるはずだ】って思い込んでただけでしょう!？」

糸見氏「ならば勝海舟の記録にある360万両はどこへ行ったのでしょうか？」

教授A「それに徳川家康の黄金像の発見からも・・・」

教授B「いやいや、それ、行方不明になったんでしょ？

確かな鑑定も受けてないのに、まともに取り合っただけのこと。

過去、ここまで大規模な発掘をして見つからない・・・
って事は、埋蔵金なんかないって事ですょ」

教授C「それは論理的におかしいですね。

今まで見つからなかったから、存在しない・・・

それは論理的に真ではない」

・・・。

スペシャルゲストの【山嵐】のメンバーはこのディスカッションに何とか加わろうとするが、埋蔵金の知識に関しては教授陣や糸見氏にはかなうはずもない。

アイドルの彼らが発言しようものなら、微妙な空気が流れてしまうのをスタジオ内の全員が感じていた。

少しでもTVに写ろうとするアイドルの使命感がそうさせるのか、彼らはタイミングを見計らって彼らなりの発言をする。後にこの番組をTV放映で見る事になる慎吾とリナだが、スムーズに彼らがディスカッションに加わる様^{さま}に、編集のなせる業^{わざ}を感じる事になる。

江浜はというと・・・終始無言。ただそこに座っているだけで、我関せずといった感じた。その表情は何か考え事をしているようだった。

・・・。

リナ「・・・退屈ね。まあ、イケメンアイドル見るだけでも来た価値はあるか・・・」

慎吾「そうですね。今やつてる議論って昔からあるヤツですし。ちよっと退屈ですね」

リナが眠そうに慎吾に視線を向ける。

リナ「……あんたの退屈と私の退屈は、質が違うつーの。

ま、サインもらうためにも、最後まで我慢して見てやるか・

……」

収録から1時間が過ぎた頃……

劣勢な埋蔵金存在説側の糸見が、奥の手を出した。

糸見氏「実は……以前我々が発掘した源次郎の井戸の付近ですね……

今から1ヶ月前、ある銅板が見つかったんです。

まさに……埋蔵金のありかを示した銅板です！」

観客の慎吾達は大げさに「おーーー！！」という歓声をあげた。

リナ「ふん……どうせまた、ガセネタっしょ……」

大きな歓声に混じってリナがつぶやく。

糸見が銅板発掘の経歴や苦勞話を短めに語った後、アナウンサーに合図を送った。

ガコン！

会場内の電気が一斉に消える。

ザワザワ……ザワザワ……

急にスタジオ内が真っ暗になったため、観客席からは自然とざわめ

く声が漏れた。

数秒の間を経て……

パン……

女子アナウンサーのみに、スポットライトが当たる。

女子アナ「では…… 今宵徳川埋蔵金のありかを記した銅板が……

TVの前みなさんに、お披露目されます！」

そう言うと、今度はステージ上の1人の男にスポットライトが当たった。

そこには大柄な男が、銅板を両手に抱えて立っている。

白のスーツ、白のネクタイ、白のズボン……完全に白一色のコーディネートを意識したかと思いきや、大きな黒いサングラスが際だち、その年齢を不詳にしていた。

数秒の間の後、おもむろに男はサングラスを取る。

慎吾「あ……あの人……」

リナ「何、あんた？ 知ってんの？」

慎吾「いや、ほら……さっき、前説してたお笑い芸人です。

大きい方の人ですよ！」

リナが目を凝らして大男を見つめる。

リナ「あ、言われてみればそうね・・・

さっきまでラフな格好だったのに。

ヤクザっぽい格好して・・・

なんでステージの真ん中にいんの？」

女子アナ「ご紹介しましょう。ステージに立つておられる彼は・・・

・ 若手お笑い芸人【スーパー・マリオ・ブラザーズ】・・・

・ 時任マリオさんです」

アナウンサーの紹介直後、観客席はとりあえず拍手をした。

慌てたADが、観客席に向かって「もっと大きな拍手を！」のジェスチャーをする。

慎吾「そっか・・・僕らにはさっき見た芸人ですけど・・・

TV見てる人には、初登場なんですよね。

盛り上げなきゃって事です」

リナ「どーでもいーつーの・・・眠・・・」

リナは小さなあくびをする。

女子アナ「今年、二十歳はたちになるマリオさん。

今回、赤城山周辺の過酷な発掘ロケに参加してもらい・・・

・・・」

女子アナが、銅板発掘の経緯を紹介し始めた。ステージの中心にいる時任マリオ・・・スタジオ内の出演者や観客席に対して、無表情を貫く。

一通りスタジオ内を見渡した後、大きなサングラスを再びかけた。

リナ「あー・・・はいはい、あれね・・・。

過酷なロケに、ギャラのかからない無名若手芸人ってパターン」

ふと慎吾が何かを思い出したような顔をする。

慎吾「どこかで・・・」

右の拳をコツンと額にあてるしぐさをした。

慎吾「どこかで・・・見た事がある・・・彼・・・」

リナ「さっき前説で見たんでしょ？」

慎吾「あ、いえ。そうでなく・・・」

リナ「松順様の楽屋出た時、ぶつかってなかった？」

慎吾「あー、それもそうなんですが・・・。

今日でなくて、どこかで・・・彼を見た事があるような・・・。

あの雰囲気・・・ごく最近・・・どこかで・・・」

リナ「ま、売れてないとはいえ芸人だし・・・何かのＴＶで見たんじゃない？」

慎吾が静かに首をふる。

慎吾「違います・・・直接見た事が・・・」

記憶を探るが、思い出すことが出来ない慎吾。

マリオ「・・・」

白ずくめの太男・・・その両手に抱えられている、徳川埋蔵金のありかを示したとされる銅版・・・スポットライトの光を浴びたまま、みな目の前に触れられるのを待ち構えていた。

時任マリオ「・・・」

サングラスの奥で、殺気じみた鋭い眼光を放っている。

その瞳の先には・・・

慎吾の姿があった。

（第１３話へ続く）

第12話 白ずくめの男（後書き）

次回予告

とうとう徳川埋蔵金のありかを示したとされる銅板が、皆の目に晒される。

それを見たりナが、何かをつかんだような表情を見せるが・・・？

収録の後、慎吾はリナに意外な言葉を発する。

慎吾「黙ってましたけど僕・・・」

リナ先輩の自己中にウンザリしてたんです！」

次回 「 第13話 魔方陣 」

第13話 魔方陣（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TV局へと向かった2人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、2人は特別番組「徳川埋蔵金の謎を追え！」の観客として招待を受ける。

番組収録では、スピリチュアルカウンセラーの江浜がスペシャルゲストとして招かれていた。お笑い芸人の時任マリオは、徳川埋蔵金のありかを記しているという銅板を持って現れた。

第13話 魔方陣

第13話 魔方陣

その銅板は・・・時^{とき}任^じマリオの手によって、高々と持ち上げられた。ボクシングのラウンドガールがごとく、マリオはその銅板の角度を変えていく。

慎吾「・・・・・・」

そしてそれは・・・慎吾を始め、スタジオ内の全ての人物の目に触れた。

スポットライトはその銅板にまぶしいほどの光を与え、TVカメラはアップでとらえる。スタジオ内の大型TVにそれは映し出された。

30cm四方といった大きさぐらいか。

多少の傷やはげた部分もあるものの、140年の眠りから覚めた割には遠目で見ても「何かが書いてある」と判断ぐらいはできる。

ただ光の反射が強すぎて、書かれてある詳細までは判別できない。

ようやくここで会場が明るくなった。

女子アナ「今の銅板は先ほど糸見氏がおっしゃられた通り・・・」

TVSの看板アナウンサーが、説明を始める。

女子アナ「黄金の徳川家康像が見つかった源治郎の井戸。」

その付近にある横穴から、新たに発掘されました。

4日前、金沢大学のO教授に銅板の鑑定を依頼。
1860年代のものという鑑定結果が出ました」

観客「おー！」

観客席の慎吾達・・・意識したわけではないが、自然と大げさな声が出た。

女子アナ「では、この銅板を発見したマリオさんに話を聞いてみます。

マリオさん、発見当初の状況をお聞かせください」

ステージの大男は、ゆっくりと口を開く。

マリオ「そうですね・・・今からちょうど1週間前、激しい雨が降る中。

スタッフとこの日の発掘を中止にしようかと、検討していました。

でも、こういう日こそ何か発見できそうな気がして・・・

」

女子アナ「何かそういう・・・予感がしたって事ですか？」

マリオ「ええ。だからスタッフに無理を言って・・・」

観客席にいるリナがぼそっとつぶやいた。

リナ「どうでもいいわよね、あの会話」

慎吾「まあ・・・TV見てる人にわかるようにって・・・

番組的な事ですから、仕方ないです」

リナ「あの銅板・・・ライト反射して、何なのかわからなかったな
ー」

慎吾「あれ？ リナ先輩、興味あるんですか？」

リナ「いや・・・一瞬見えたのがね・・・

なんか頭にさーっと入ってきてね」

慎吾「まあ、しばらく待ちましょう。絶対また出ますって」

リナ「うん・・・」

リナは一瞬だけ見えた銅板の情報が、頭の中に数字として入ってきていた。

ただ見えない部分があり、それが何を意味するかはわからなかった。

しばらく銅板発見者のマリオと女子アナ、そしてスタジオ内のゲストらの会話が続く。

そして・・・

女子アナ「この銅板は、地図・・・という事ですね？」

マリオ「ええ、間違いありません。いくつかの情報と地図が混在し

たものです。

地図は赤城山周辺のもので間違いありません。

はつきり言いましょう・・・」

TVカメラが、マリオのアップを捉える。

マリオ「これこそ・・・徳川埋蔵金のありかを示した地図です!」

観客「おー!!!」

女子「何と埋蔵金のありかを示した地図!

ただ劣化が激しいところがあり、見づらい部分もあります。

そこでスタッフが銅板に書かれた地図と同じ尺度の航空図
を用意。

銅板の地図と完全に重ねたものが・・・コレです!」

スタジオ内の大きなスクリーンに、それが映し出された。

> i 3 3 7 0 3 — 2 4 3 0 <

赤城山周辺の地図が9分割にされている。そして各部分に妙な線の
羅列と漢字が書かれてあった。

慎吾「あ!」

スクリーンの画面を見た瞬間、慎吾が声をあげる。

リナ「・・・。一応聞くけど、何、その反応？

まさか、埋蔵金の場所わかった？」

とりあえず慎吾の声に反応するリナ。

慎吾「いや・・・あの文字とか線の書かれた図・・・

八卦はっけですよ」

リナ「は？ はっけ？ 【当たるもはっけ、当たらぬもはっけ】の？」

慎吾「そうです！」

リナ「え・・・マジ？ ボケたつもりなんだけど・・・」

慎吾「古代中国の【陰陽思想】を表したもので、【易経】における・・・」

リナ「あー・・・ちよっちよっちよっと・・・私、歴史とかダメなのよ！」

慎吾「五経ごけいの話ですよ・・・歴史で学びましたよね？

儒教の教典！ 易経は五経の1つだし、徳川の將軍も・・・

「

リナ「わかった！ わかったから黙ってて！ あんたの話長くなりそうだし・・・」

歴史に全く興味のないリナは、慎吾の歴史オタクトークを制止した。

リナ「ただ、あの【-】とか【- -】は数学的な意味がありそうね・・・」

2進法に近いものが・・・」

それを聞いた慎吾が、再び反応する。

慎吾「そう！ それ！ さすがリナ先輩！ 数字【は】強い！」

リナ「・・・。 なんか、あんた・・・ム力つくんだけど・・・」

慎吾「確かにあの記号は数字に対応するって・・・」

ライプニッツって人が、解読したと聞いた事があります」

リナ「ライプニッツ・・・。 高校の時数学の授業で出たわね、その名前。」

ニュートンと並んで【微分積分、やな気分】の発見者よ」

慎吾「び・・・微分積分・・・」

その言葉聞くだけで僕、確かにやな気分でした・・・」

そんな2人の会話をよそに、女子アナが銅板に書かれた図の説明を始めた。

これらの記号が易经で使われる八卦の記号である事。【-】【- -】の記号が2進数に対応する事などを説明する。

リナ「うん・・・ わかった・・・」

慎吾「え！？ 埋蔵金のありが！？」

リナ「まさか・・・あんたが歴史ヲタクだって事がわかったって話よ。」

あんたの言った事が、今説明してる事と同じだもん」

そういうと、リナは携帯を取り出し何かを操作し始めた。

慎吾「何やってるんですか？」

リナ「いや、携帯のあんたの名前を【歴ヲタ】に変えてるの。」

一発であんただとわかるし」

慎吾「えゝ。何だか微妙な名前ですね・・・。

でもちよつとカッコいいかも・・・。」

リナ「・・・。」

リナは無言で携帯を操作し終える。

銅板に使われた図は・・・八卦で使われる歸蔵図きぞうと呼ばれる図であり、各所に対応する数字を当てはめ・・・

> i 3 3 7 0 4 — 2 4 3 0 <

そして真ん中に【5】を入れると

> i 3 3 7 0 6 — 2 4 3 0 <

魔方陣になる事を女子アナが説明した。

リナ「魔方陣か・・・」

慎吾「歸藏図が魔方陣になるってのは、けっこう有名な話なんですよ」

リナ「財宝を隠すために、魔方陣使う・・・っていうのはアリなの？」

慎吾「ええ、ありますよ。日本の場合、財宝秘宝を隠す手がかりとして・・・」

高度な暗号や数値記号を使い、そのありかを示した例はいくつもあります」

リナ「ふ〜ん・・・そっかぁ・・・」

リナはスタジオの巨大スクリーンをじっと見つめている。

6 — 1 — 8

7 — 5 — 3

2 — 9 — 4

魔方陣とは・・・縦・横・斜めの数字3つを足すと、全て同じ和になる数字配置の事である。今回の魔方陣は全ての和が15となる。

リナ「でも・・・」

ふとリナが口を開いた。

リナ「私が見たのは・・・銅板の裏。

あの裏にまだ何か書かれてあつたのよね」

確かに見た。一瞬だけだったが・・・銅板の裏に何かの対称的な図形と、文字が書かれてあるのを。

慎吾「あの一瞬で見えたんですか？」

リナ「メガネかけてはいるけどさ。動体視力はいいもんよ。

それに一瞬で覚えるのが得意なのは・・・あんたも知ってるでしょ？

あの裏に書かれてあるのも・・・見たいな・・・」

慎吾「何で見せないんでしょう？」

リナ「決まってるでしょ！」

裏には埋蔵金のありかを示す【確信的な何か】があるのよ！」

慎吾「確信的な・・・何か・・・？」

リナ「私達が埋蔵金を獲らないように、秘密にしてるんじゃないの？

くそー・・・あの裏、見たいな・・・ちえっ！」

この後・・・

スタジオ内では、銅板をめぐるディスカッションが行われた。

埋蔵金否定派は「どうせ、またガセ」「見つけてから大口を叩け」の姿勢を崩さない。

肯定派は「ならば見つけてみせよう」と強気の姿勢。

しばしの時が流れた後・・・

マリオ「1週間！」

いつの間にか、肯定派の席に着いていた時任マリオときとうが高らかに宣言した。

マリオ「1週間で埋蔵金が見つからない場合・・・

あなた方がた、否定派の勝ちを認めましょう！」

女子アナ「おお！ 強気な発言が出ました！」

マリオ「我々はこの後・・・

銅板に示された地図を手がかりに、発掘作業へと戻ります。

今ここで宣言します！

1週間以内に我々は徳川埋蔵金を見つけます！」

TVカメラがマリオのアップを捉える。観客席の慎吾らは、ADの指示に従って大きな拍手で会場を盛り上げた。

拍手の音が静まった頃、カメラは女子アナのアップに切り替わる。

女子アナ「本当に徳川埋蔵金は出るのか！？」

いよいよ来週・・・

お茶の間の皆様に、衝撃映像をお届けします！！」

・・・。。

こうしてこの日の収録が終わった。

慎吾ら観客は、ADの指示に従ってスタジオの出口へと歩いて行く。

リナ「え？ 何？ この番組、2段階構えなの！？

来週に続くって・・・」

慎吾「さっきADの方が言っていましたけど・・・

次の収録は10日後ですって・・・」

リナ「くぁー！ 2週にまたがって引つ張るつもりね！

てか、マジで埋蔵金1週間以内に発掘するって事？」

慎吾「どうやら発掘に相当の自信があるみたいですね・・・
あのマリオって人」

リナ「でも今日の収録、つまんなかったー！

【山嵐】いなかったら、絶対こんなTV見ないわね！」

慎吾「だからですよ・・・

視聴率取るためにアイドル呼んだって事ですな

リナ「ま、いーわ。どうせ次の収録なんて見学しないし！

さー、サインもらいに行くわよ！サイン！！」

慎吾「はい！」

2人にとって・・・徳川埋蔵金は、すでに対岸の火事だった。

5分後。

ポーン・・・

2人は松浦の楽屋のある6階でエレベーターを降りる。
松浦に【山嵐】のメンバーを紹介してもらったとあらば、リナの機嫌も最高潮に達するしかない。

だが・・・。

エレベーターを降りた瞬間だった・・・。

「*****、*****」

慎吾「え？」

突然慎吾が右手でコメカミを押さえた。

リナ「何？」

周りに変わった様子はない。

「*****、*****」

慎吾「な・・・？」

「*****、*****」

慎吾「・・・」

慎吾の様子が変だ。

リナ「ちよつとあんた・・・大丈夫？ 気分悪くなるならせめて・・・」

「！」
【山嵐】メンバー、全員のサインもらってからにしてよ！

様子のおかしい慎吾の肩に手をおいてゆするリナ。

慎吾「・・・・・・」

突然慎吾は、真剣な目でリナを見た。

リナ「な・・・何よ？」

慎吾「リナ先輩！好きな言葉は！？」

唐突に慎吾はリナに変な質問をぶつける。

リナ「は！？」

慎吾「急いで！好きな言葉ありますか！？」

リナ「うゝん・・・【イケメン】かな」

慎吾のは迫力に押され、正直に応えた。

慎吾「わかりました！いいですか、よく聞いてください！」

ものすごく焦った表情で喋る慎吾に、どう対応していいかわからないリナ。

慎吾「僕からのメールは、必ず最初に【イケメン】と書きますから！」

リナ「は？何言ってるの、あんた？」

慎吾「それ以外のメールは絶対返さないください！いいですね！！！」

リナ「言ってる意味、わからないっつーの!!!」

慎吾の不自然な行動にイライラし始める。

突然・・・

慎吾が不愉快そうな表情を浮かべ、信じられない事を口にする。

慎吾「黙ってましたけど僕・・・

リナ先輩の自己中にウンザリしてたんです!」

リナ「!?!」

慎吾の言葉が頭に入ってくるのに、しばしの時間を要した。

リナ「は〜!?! あんた何言ったの? マジ言ってるの!?!」

思いつきり眉毛をつり上げたリナが、大声で返す。

慎吾「もちろんですよ。僕が嘘ついた事ありますか?」

慎吾は挑戦的な態度をとる。

リナ「あんた、言ってる事がしつちやかめっちゃかよ!」

慎吾の言葉と態度に、リナの怒りの度合いが加速する。

慎吾「ホントは、松浦さんの楽屋も3階なんですよ。

6階まで来て騙されましたね!」

赤メガネの向こうの瞳が大きく見開いた。

プチッ。

そして何かが切れた。

瞬間、慎吾の顔面右頬に……リナの右ストレートが炸裂していた。

もんどりうって、フロアに倒れる慎吾。

その慎吾に背を向けてエレベーターに向かうリナ。

イライラしながら、エレベーターの「↑」ボタンを連打する。

リナ「ちょっと優しくしたら……全く、だから男ってヤツは……」

ようやく開いたエレベーター。

リナ「おっと……」

イライラしながら乗り込もうとするが、エレベーターの中から降りる人物がいた。

黒いスーツ、黒いズボン、黒いサングラス……黒ずくめの男が3名、降りてくる。

怒り心頭のリナは男らをかわし、すぐにエレベーターに乗ろうとした。

一人の男とすれ違った瞬間・・・

リナ「・・・」

男のスーツが一瞬めくれた際、【それ】がリナの視界に入る。

ズボンとメタボなお腹の間にある・・・

拳銃を。

そして黒ずくめの男3人は・・・

慎吾を取り囲んだ。

（第14話へ続く）

第13話 魔方陣（後書き）

次回予告

銃を持った黒ずくめの男3人に取り囲まれた慎吾。
直後江浜も現れ、慎吾に相對する。

エレベーターの中からその様子を見ていたリナ。

ただ事でない雰囲気を感じ、慎吾の元へ向かおうとする。

その時、江浜は慎吾に向けて強烈な攻撃をくわえた。

そして慎吾は・・・ リナは・・・

次回 「 第14話 拉致 」

第14話 拉 致（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TV局へと向かった2人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、2人は特別番組「徳川埋蔵金の謎を追え！」の観客として招待を受ける。

その番組収録後、突然慎吾がリナに暴言を吐き・・・直後、黒ずくめの男等に慎吾は包囲された。

第14話 拉 致

第14話 拉致

慎吾の無礼な発言に、怒り心頭のままエレベーターに向かったリナ。

一人の男とすれ違った瞬間・・・

リナ「・・・・・・・・」

エレベーターから出てきた黒ずくめの男・・・銃らしきものを持っているのが見えた。

（リナ「まさか・・・ドラマか何かの小道具よね？」）

そう言い聞かせ、エレベーターの中に入り【3】を押す。
ふと自分が来た道に目を見やると・・・

倒れている慎吾を、黒ずくめの男3人が囲っていた。

リナ「え・・・？」

不穏な空気を感じたりナ。閉まろうとしたエレベーターの扉を手で止め、事態を見つめる。

無様に床に倒れた慎吾は、右頬を抑えながら・・・

慎吾「・・・・・・・・」

3人の男に囲まれている事を確認した。目の前に一人、後ろに2人・
・・3人とも慎吾を凝視している。

慎吾「・・・」

背後の男を確認するふりをして、チラッとエレベーターの方を見た。
リナはエレベーターに乗っているものの、その扉は開いたままこちら
らを見ている。

(慎吾「ま、まずい・・・」)

正面に目をやると、さらに一人の男が向こう側の廊下から現れた。

スピリチュアル・カウンセラーの江浜である。

こちら黒ずくめ。 慎吾は4人の黒ずくめの男に囲まれた事になる。

「*****。*****」

慎吾「う・・・」

慎吾はコメカミを抑える。

「*****」

慎吾「ぐ・・・」

慎吾は小さな悲鳴を上げながらゆっくりと立ち上がった。
リナのパンチで軽い脳しんとうを起こしているため、足下がおぼつ

かない。

エレベーターにいるリナの視界が江浜をとらえた。

（リナ「な．．． 江浜氏！？ 何が．．．？」）

江浜を含めた黒ずくめの男4人に囲まれた慎吾が、無理に立ち上がろうとしている。それを見ていたリナはただならぬ事態と感じ、エレベーターを降りようとした。

その時．．．

江浜「．．． ．．．」

数m離れた慎吾に向け、江浜は右の手のひらを垂直に向ける。

江浜「？！^{おん}」

大きなかけ声と共に、その手のひらを数10cm押し出した。

慎吾「！？」

瞬間、慎吾の右肩に激痛がはしり、そのまま後ろに吹っ飛ばされる。

江浜、慎吾の直線上．．．エレベーターを出ようとしたリナにも、目に見えない風圧が襲いかかった。

リナ「きゃー！」

風圧に押され、エレベーターの中で尻餅をつく。

そのままエレベーターの扉が閉まり、下へと移動を始めた。

リナ「ちょ．．． ちよつと待つて．．．」

すぐにエレベーターの【開】ボタンを連打するが、その要求を受け入れられる事はない。

エレベーターは3階↓1階まで降りた後、各階で停止しながら6階まで上っていく。

再度6階に降り立ったりリナだが．．

慎吾の姿はおろか、黒ずくめの男達、江浜の姿もそこにはなかった。

．．．．．。

その頃、慎吾は．．

黒ずくめの男に抱えられ、とある場所へと身を移されていた。

慎吾「．．．．．」

リナに受けた右ストレートにくわえ、江浜に受けた【何らかの衝撃】

で気絶寸前。

意識朦朧いしきもうろうの中、慎吾はとある部屋へと連れて行かれる。

男は、無造作に慎吾を床に放り投げた。

極限にまで気分の悪い慎吾は・・・

慎吾「・・・」

ひどい頭痛のまま、気絶する。

江浜「・・・」

気絶した慎吾を見て、江浜がつぶやいた。

江浜「だから警告したんだ。ここには来るなと・・・」

・・・。

ただならぬ事態を察したリナは、TVS局内を駆け回る。

リナ「リュックを背負った、オタクっぽい男の子を見ませんでした？」

局内の人に聞き回るが、誰一人満足のいく回答をする者はいなかった。

（リナ「今、思えば・・・」）

あの慎吾が、自分に暴言など吐くはずがない。どう見ても、あの態度は不自然。

(リナ「だとしたら・・・」)

何らかの危険を察知した慎吾が、わざと自分を逃すためにひどい事を言った・・・

(リナ「そう考えるのが妥当・・・か・・・」)

【山嵐】の事など、すでに脳内がない。慎吾を見つけ出そうと、広いＴＶ局の中を・・・ただ、ひたすら探し回った。

(リナ「ったく・・・気を遣うな！って、いつも言ってるのに・・・」)

慎吾のおせっかいにイラつく以上に・・・慎吾の異変に気づいてやれなかった自分にイラつく。

結局・・・慎吾を見かけたらすぐ連絡するよう、事務の人に電話番号を伝える事しか出来なかった。

これまでの事を振り返るリナは

(リナ「ひょっとして・・・拉致られた・・・？」)

そう思い始める。都内にうとい慎吾が、自分を局内に残して出て行くはずがない。

（リナ「もしそうだとして・・・何故、あいつが拉致られるの？
それに男が持っていた銃は・・・本物？」

江浜氏はいつたい・・・？」

多くの謎がリナの頭を駆け巡る。

・・・。。

慎吾「・・・」

ふと慎吾は意識を取り戻した。

軽い脳しんとうのせいか、まだ視界がぼやけている。小さな部屋・
・六畳ほどの薄暗い部屋にいるようだ。

イスに座っていた。いや・・・イスに座らされ、縛られていた。

慎吾「・・・」

両手は後ろでイスに縛られ、両足も1本のひもでぐるぐるに結ばれている。

目の前には・・・黒ずくめの男が2人いた。江浜の姿は見えない。
慎吾の意識が戻ったのを確認すると、1人が外に出て行く。

残った一人は慎吾から目を離さない。監視役だろうか？

慎吾「・・・・・・」

5分後・・・・男は戻ってきた。そしてもう1人別の男が部屋に入ってくる。

その男は、折りたたみ式のパイプイスを広げ・・・・慎吾の前に置くと、向かい合うように座った。

「やあ・・・・お目覚めかい？」

慎吾が目の中の男を確認する。

慎吾「あ・・・・あなたは・・・・」

TV収録で、番組の中心人物だった・・・

あの男の姿があった。

（第15話へ続く）

第14話 拉 致（後書き）

次回予告

収録を終えた糸見は、出演者らに握手を求めている。
楽屋に戻ると、中にはお笑い芸人のマリオがいる。

2人は握手を交わし、今後の確認作業を始めた。

そして・・・

時任マリオ・・・その素性が明らかになる。

次回 「 第15話 時任マリオ 」

第15話 時任マリオ（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TV局へと向かった2人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、2人は特別番組「徳川埋蔵金の謎を追え！」の観客として招待を受ける。

番組収録後、突然慎吾がリナに暴言を吐き・・・直後、黒ずくめの男等に慎吾は包囲された。さらに江浜も現れ、慎吾に攻撃。そして慎吾は、連中に拉致された。

第15話 時任マリオ

第15話 時任マリオ

慎吾が拉致される20分前。

TVS特番【徳川埋蔵金の謎を追え！】収録直後・・・

番組の出演者でありプロデューサーでもある糸見は、出演者らと握手を交わしている。徳川埋蔵金存在否定派の教授陣にも、笑顔で握手を求めた。

糸見「十日後の収録も・・・お願いします・・・」

1週間以内に徳川埋蔵金を確実に発掘する・・・糸見の笑顔は、その自信の表れでもある。ただ一人だけ糸見の握手を拒否した男がいた。

スピリチュアル・カウンセラー江浜・・・

握手を求めた糸見に対し、江浜はポケットの中に手を入れたまま。

江浜「・・・」

鋭い視線で糸見を睨みつけ、その手を外に出すことはない。

「わかったよ」という表情を見せ手を引っ込める糸見。そして小さな声で江浜に声をかけた。

糸見「まだ、大丈夫さ。後はお前次第・・・」

不適な笑みを浮かべた糸見は【山嵐】のメンバーに握手を求めるため、その場を離れる。

江浜「・・・ゴホッ・・・」

1つ咳をした江浜は・・・とある場所へと向かった。

糸見「・・・」

その江浜をチラリと見つめる糸見。

糸見「・・・ふっ・・・」

今回新たに発見した銅板。それに加え、糸見には・・・

埋蔵金を発見するための、もう1つの切り札があった。

・・・。

出演者と一通り握手を終えた糸見は、自分の楽屋に戻って来る。

ガチャッ

楽屋のドアを開けると・・・中に一人の男がいた。

白づくめの大男・・・お笑い芸人、そして銅版発見者である時任マリオである。

マリオの顔を確認した糸見は、右手を差しだし握手を求めた。彼は迷わずその右手を力強く握りしめる。

マリオ「あれでよかった？」

糸見「ああもちろん！すばらしい演出だった！

あの【一週間！】は、まるで映画のワンシーン。最高さ！」

握手を解いた2人。マリオは小さな椅子に、糸見は大きなソファ―に座った。

糸見「今日は完璧。

とうとう、埋蔵金を見つける時が来たな・・・」

マリオ「ああ。でもあの銅版の解読は？」

糸見「任せろ。専門家に頼んである。もうすぐ結果が出るはずだ。それに・・・もう一人強力な助っ人がいる」

マリオ「助っ人？」

糸見「ああ・・・いずれお前にも会わせる。

何も知らなさそうな青年だがな。

ある霊能者が言ってたよ・・・

彼は埋蔵金のありかをよく知る人物だ・・・ってね」

マリオ「・・・」

マリオは2、3度、額くしぐさを見せる。
ある霊能者が誰かと聞くことはない。マリオ自身、よく知っているからだ。

マリオ「そうか・・・　ありかを知ってる男なんだね。」

でも彼が、埋蔵金について情報を口にするのかな？」

糸見は拳こぶしを握る。

糸見「青年については任せる。そこは心配しなくていい。」

銅版の解析結果によらず、喋らせる手はずは整えている。

どんな事があっても、必ず埋蔵金は手にするさ」

その言葉を聞いたマリオは小さく笑った。

マリオ「わかった。じゃあ俺は、発掘に専念する・・・」

糸見「ああ。お前の宣言通り1週間以内に埋蔵金は見つかる！

そして10日後の収録では・・・

否定派連中の鼻をあかす事になる！」

嬉しそうに語る糸見に対し、マリオは無表情になる。

マリオ「ああ・・・　楽しみだね」

感情のこもらない返事を返した。マリオの素っ気ない表情を【本当に見つかるのか】という不安だと解釈した糸見。笑いながら彼の肩

を叩く。

糸見「安心しろ！ 絶対見つかるから！ 心配は一切無用！

次の収録のサブタイトルはこうさ・・・」

【徳川埋蔵金！ 親子2代で、ついに発見！！】」

そう。この2人は・・・

マリオ「タイトルは好きにするといい。父さんの長年の夢だったしね」

親子である。

糸見「何言ってる！？ 元々埋蔵金発掘の企画は、お前だっただろう？」

マリオ「まあ・・・そうだけど・・・」

糸見「お笑い芸人になると聞いた時は、正直驚いたが・・・

1週間後には、誰もが知っている歴史の謎を解く事になる。

お前は芸能界で一躍名が知れ渡るところか・・・

歴史に名を刻む事になるんだ！！」

マリオ「あんまり興味が無いけどね・・・埋蔵金以外は」

糸見「何だろ？ うだつが上がらない芸人は・・・

親として、認めるわけにはいかないぞ！」

そういう糸見は笑顔であった。もはや埋蔵金は、我が手中といった感じである。

マリオ「ま・・・俺は発掘に専念する。それだけさ」

糸見「ああ。私の年齢では、体力的に現場は無理だからな。頼むぞ」

マリオ「わかった。じゃあ早速俺は行くかな・・・

まずは源治郎の井戸だ。

何かわかったらすぐに携帯に連絡して。

こちらでも何か見つけたら連絡する」

糸見「もちろん！ 私は解析と、例の青年からの情報を確認する」

マリオは席を立ち、楽屋の出口へ向かった。

マリオ「・・・」

出口の前で立ち止まり、ふと父親に視線をやる。

マリオ「父さんは・・・埋蔵金を見つけた後は、どうするの？」

糸見は笑いながら応える。

糸見「まずは、次の収録に全てをかける。ゴールデンで40は取るぞ！

その後は・・・本でも書くさ。タイトルはもう決まってる

んだ。

【ある事はわかっていた】

どうだ？ コピーライターらしいタイトルだろ？」

マリオは小さく笑って頷いた。

マリオ「そうだね……。じゃあ、お互いの仕事を……」

そう言うとマリオは父に背を向けドアノブを回す。

糸見「ああ、またな。小太郎」

マリオ「……」

ドアを開けた手を一瞬止めるマリオ。そして父に背を向けたまま口を開く。

マリオ「父さん……」

TV局では、名前で呼ぶの……やめてくれよ」

そう言うと、マリオは楽屋を後にした。

糸見「……」

閉まるドアを見て、糸見は目を細めている。

糸見「ふ……お前は、いつまでも俺にとっちゃ息子さ……」

小太郎「……」

芸名【時任マリオ】、本名【糸見小太郎】。

彼が楽屋を出てわずか3分後……。

黒ずくめの男が、周りを警戒した様子で、糸見の楽屋に入ってきた。

ソファーでタバコをふかす糸見の横に立ち

男「確保しました。第5スタジオ・小道具部屋です」

そう告げる。

糸見「……」

男の方に視線を移すことはない糸見。正面の鏡を見つめたまま「ふ」と煙を吐き出した。

糸見「わかった。5分後に行く」

黒ずくめの男は一礼をし、また警戒しながら楽屋を出て行った。

糸見「……」

しばらくタバコを吹かしていた糸見。やがて、タバコを灰皿に押しつけ……

糸見「よし！」

と立ち上がる。その表情は目がギラギラし、これから獲物を真剣に

狩りに行くといった表情である。

楽屋を出て向かった所は・・・

・・・。。

第5スタジオ。

さりげなく周りを警戒しながら、糸見はドアを開け中に入った。

30m四方の広いスタジオだ。

中に入ると・・・ドアの側に、先ほどの黒ずくめの男が立っている。

男は無言で、スタジオの右奥にある小さな部屋の指さした。

頷いた糸見は、そこへ歩を進める。部屋の前にはさらに2人の男がいた。

黒ずくめの男、そしてスピリチュアル・カウンセラーの江浜である。

江浜「・・・」

糸見「・・・」

視線は合わせど、言葉を交わすことはなかった。糸見は2人を一瞥した後、部屋の中に入っていく。

江浜「・・・コホッ・・・」

1つ咳をした江浜。糸見が部屋に入るのを、ただ睨み付けるだけだった。

第5スタジオ・小道具部屋。

部屋は6畳程度の薄暗い小さな部屋。四方には棚があり、ドラマやバラエティで使う小道具がたくさん並べられている。

部屋に入ると、さらにもう一人黒ずくめの男が立っていた。そして部屋の真ん中に、イスに縛られた一人の青年がいる。

黒ずくめの男は、糸見に小さな声で語った。

男「ちょうど今、目覚めたところです」

糸見は小さく頷き、部屋の横にあったパイプイスをその青年の前に置く。そして静かに青年と向き合うように座った。

糸見「……」

目の前にいる具合の悪そうな青年をしばらく見つめた後、口を開いた。

糸見「やあ…… お目覚めかい？」

青年が目の中の男を確認する。

「あ…… あなたは……」

(第16話へ続く)

第15話 時任マリオ（後書き）

次回予告

糸見は椅子に縛られた慎吾に銃口を向けた。

糸見「ここは小道具部屋だ。本物かどうか試してみるか？」

銃口から目を背け、齒を食いしばる事しかできない慎吾。

そして・・・慎吾の悲鳴が部屋に鳴り響いた・・・。

次回 「 第16話 撃鉄^{げきてつ} 」

第16話 撃鉄（げきてつ）（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TV局へと向かった2人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、2人は特別番組「徳川埋蔵金の謎を追え！」の観客として招待を受ける。

番組収録後、突然慎吾がリナに暴言を吐き・・・直後、黒ずくめの男等に慎吾は拉致された。

一方、番組収録を終えたプロデューサーの糸見は、息子である小太郎と埋蔵金発掘の打ち合わせを行う。その後・・・糸見は、慎吾の前に現れた。

第16話

撃鉄^{げきてつ}



第16話 撃鉄（げきてつ）

小太郎「ふ」……」

TVSを出る車の中で、小太郎はタバコをふかしていた。埋蔵金発掘のクルーらと、大きめのバンの後部座席に座っている。

小太郎「……」

タバコを片手に、窓の外を眺めた。

小太郎「……」

糸見小太郎 〃 Itomi Kotarou

このローマ字を並び替えれば……

時任マリオ 〃 Tokitou Mario

自らの芸名になる。

（小太郎「……くだらん芸名だ……」）

ふと、車内の時計を見た。

小太郎「……」

短くなったタバコを、再びふかす。

（小太郎「・・・そろそろか・・・」）

そして窓の外に、火の点いたままのタバコを投げ捨てた。

・・・。

第5スタジオ・小道具部屋。

糸見「さて・・・何から話せばいいのやら・・・」

まだ意識が朦朧もうろうとしている慎吾・・・黙って糸見の目を見ている。

糸見はイスの横に置かれてあったリュックを拾い上げ、チャックを開くと・・・中身をこそごととあさり始めた。

慎吾「・・・」

慎吾は、自分のリュックの中身を無造作に取り出される様さまを静かに見守っている。

やがて糸見は財布を手にして、その中をチェックし始めた。

糸見「ふむ・・・慎吾・・・か・・・」

箱根大学、1年生・・・18歳・・・」

慎吾の学生証を見ながら、独り言のようにつぶやく。しばらく慎吾のリュックをチェックしてた糸見は、静かにそれを置き・・・慎吾に視線を合わせた。

糸見「さて慎吾君。何故、今・・・

君がここにいるか、わかるかな？」

慎吾「・・・・・・」

無言で小さく首を横に振る慎吾。

糸見「ふ・・・・」

糸見は満面の笑みを浮かべる。そして静かに後ろに手を回し、腰の辺りからある物を取り出した。

慎吾「!？」

それを見てぎよっとする慎吾。

（慎吾「け・・・・拳銃!？」）

糸見の右手には・・・・銃が握られている。

糸見「・・・・・・」

そして無言で、銃口を慎吾の顔面に向けた。

慎吾は目を閉じ、歯を食いしばる。何とか銃口の照準から逃げようとするが・・・・イスに縛られた状態では、顔を背ける事しか出来ない。

糸見「ここは小道具部屋だ。本物かどうか試してみるか？」

糸見は静かに撃鉄^{げきてつ}をひいた。

ガチャリ。

重苦しい音が、薄暗い小さな部屋に響き渡る。

慎吾「……………」

かつて……慎吾はこの撃鉄の音を聞いた事がある。

（慎吾「おもちゃなんかじゃない……本物だ……」）

歯を食いしばったまま、恐怖と戦う事しかできなかった。

銃口を向けられ、5秒ほど過ぎた後……

ヴーン　ヴーン　ヴーン……

何かの振動音が部屋に鳴り響く。

糸見は銃口を慎吾からそらし、その音源を探り出そうとした。

慎吾「……………」

慎吾はチラリと目を開け、銃を向けられていない事を確認すると少しほっとする。

しばらくして、糸見はリュックの中から携帯電話を取りだした。バイブモードになっている状態で、着信は【リナ先輩】となっている。

糸見はその着信を慎吾に見せた。

糸見「彼女か？」

慎吾は無言で首を横にふる。

糸見「ふん。まあ、こいつはどうでもいい……」

そう言うと糸見は【切】ボタンを押し、リナの着信を遮断した。

糸見「さて……」

銃口を再び慎吾に向け……

そして今度は、慎吾の右膝みぎひざに垂直に銃口を向ける。

糸見「君は知らないだろう……」

この角度で引き金をひくとだね……」

言いながら糸見は、慎吾の顔を下から覗き込んだ。

糸見「一生、君の右足は使えなくなるんだ」

慎吾「……」

ゴクリと唾を飲む音が、糸見にもはつきり聞こえる。

糸見「……………」

糸見は無表情で慎吾を見つめ続けた。

慎吾「……………」

糸見「何故、君がここに連れて来られたか……言ってみろ」

糸見は銃口を慎吾の右膝に押し当て、慎吾の目からけして視線をそらさない。

慎吾「……………」

慎吾は糸見から顔を背け、歯を食いしほるだけだった。

しばらくその表情を見ていた糸見は……

ガチャリ。

銃の撃鉄を戻す。

糸見「ふん。どうやら君は……

本当に何も知らないようだな……」

そう言うと糸見は、銃のトリガー部分に人差し指を奥までさし、銃をブラブラさせた。

糸見「ふゝ．．．」

小さなため息をついた後、背後の腰の辺りに銃をしまう。そして慎吾を見つめ、口を開いた。

糸見「私が、徳川埋蔵金を追ってるのは知ってるな？」

慎吾「．．．．．」

無言で縦に首をふる。

糸見「ある人物から．．．

君が埋蔵金の情報を持っていると聞いてね。

だから君に来てもらった．．．んだがな」

慎吾「ぼ．．．僕が？」

ふと慎吾は前日に見た書き込みを思い出した。

【スタジオには埋蔵金のありかを知ってる人がくるんだってよ！】

（慎吾「まさか、あの書き込みは．．．僕．．．？」）

糸見「今日の番組収録にお前が現れる。

だから収録後に、お前を捕まえろ．．．そう指示されてな。

こうして、君をここに連れてきたというわけだが．．．」

腕組みをし、糸見は少し悩んだ表情を見せる。

糸見「君は何も知らない・・・どうしたものか・・・」

慎吾「・・・」

勇気を出して、慎吾は聞いてみた。

慎吾「だ・・・誰・・・なんですか？　その・・・」

指示したって人は・・・？」

糸見「・・・」

慎吾を睨み付ける糸見。

糸見「君は質問できる立場ではない。

まあ、その男は・・・君が直接会うことはないだろう」

慎吾「・・・」

糸見は数10秒、慎吾を見つめ・・・静かに口を開いた。

糸見「彼の言う事は・・・過去、全て正しかった。

最近では、埋蔵金のありかを示した・・・

あの銅板のありかも言い当てている」

（慎吾「ど、銅板のありかを・・・言い当てた？」）

糸見「すごい霊能力者さ。まあ、霊能力とやらを・・・

信じる信じないは自由だがな」

（慎吾「れ．．． 霊能力者．．． まさか、江浜さん？」）

糸見「その彼が．．．

埋蔵金について、君が何かの情報を持っている．．．

そう言ったんだ」

（慎吾「ぼ、僕が．．．？ 埋蔵金の情報を．．．？」）

糸見「潜在意識か、あるいは君に憑いている．．．

何かが、情報を持つてるのか．．．」

一瞬、慎吾の顔に緊張がはしる。

糸見「まあ、こんな時のため．．．

あいつを用意しているんだがな」

糸見は、後ろに立っている黒ずくめの男に合図を出した。

男は一度部屋を出た後、すぐに戻ってくる．．．スピリチュアル・カウンセラーの江浜を連れて。

慎吾「．．．．．」

江浜「．．．．．」

2人の男は、視線を合わせる。

（慎吾「誘拐を指示したという人は．．．

僕に会う事はないと言っていた・・・

指示した人は、江浜さんじゃない。

それじゃあ、誰が・・・？」

糸見「この男は知ってるかな？」

江浜「彼とは会ったことすらない」

江浜が即答した。2日前、慎吾と直接会話を交わしたにも関わらず、
慎吾との接触を否定した。

糸見「お前には聞いてない。彼に聞いてるんだ」

慎吾を指さした糸見は、江浜を睨み付ける。そして無表情のまま慎
吾に視線を移した。

糸見「で？ 知っているのかな？ この男を・・・」

慎吾は無言で1度だけ深くうなず頷く。

慎吾「で、テレビで・・・見た事が・・・」

糸見「ふむ。まあ、数字を持つてる番組だし・・・

じゃあよく知ってるだろう？ 彼の霊能力を」

慎吾は無表情のまま。

糸見「知つての通り・・・

彼は悪霊に取り憑かれた人を、過去何度も救っている。

江浜「覚悟はいいな？」

江浜は目を閉じ、精神を統一した。

糸見「・・・」

その後ろで、糸見が腕組みをして見守っている。

江浜「・・・」

カツと目を大きく見開くと・・・

江浜「^{おん}?!!」

大きなかけ声をかけた。

瞬間・・・ 肩に置かれた江浜の手を通じ、慎吾の中に何かが侵入する。

そして・・・

慎吾「うわぁあああ!!!!」

大きな悲鳴が、小さな部屋に鳴り響いた。

(第17話へ続く)

第16話 撃鉄(げきてつ) (後書き)

次回予告

慎吾から情報を得ようと、江浜に拷問を指示する糸見。
江浜の拷問に耐え続ける慎吾。

そして・・・江浜が糸見に手を貸す理由が明らかになる。

次回 「 第17話 江浜の苦悩 」

第17話 江浜の苦悩（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TV局へと向かった2人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、2人は特別番組「徳川埋蔵金の謎を追え！」の観客として招待を受ける。

番組収録後、突然慎吾がリナに暴言を吐き・・・直後、黒ずくめの男等に慎吾は拉致された。

一方、番組収録を終えたプロデューサーの糸見は、慎吾の前に現れる。さらに江浜も慎吾の前に現れ・・・埋蔵金的情報を吐かせるため、慎吾に拷問を開始した。



第17話 江浜の苦悩

慎吾「うわあああああ!!!!」

大きな悲鳴が、小さな部屋に鳴り響いた。

- 90分前 -

収録を終えた後・・・慎吾とリナの2人は、松浦の楽屋のある6階でエレベーターを降りる。

降りた瞬間だった・・・。

（江浜「慎吾君、私の声が聞こえるはずだ」）

慎吾「え？」

突然慎吾が右手でコメカミを押さえた。

リナ「何？」

周りに変わった様子はない。

（江浜「今から2分後、君は拉致される。」

すでに局内で君は包囲された状態にある。

もう1度言う。君達に危険が迫っている！」

慎吾「な・・・？」

（江浜「逃げようとするれば、間違いなく2人とも捕まる。

今すぐ、連れの女性だけでも逃がすんだ！ 今すぐ！

でなければ彼女の命に関わる事になる！」）

慎吾「・・・」

慎吾の頭の中に、直接語りかける【声】。

（慎吾「こ、これは・・・？ 霊の声・・・？」）

リナ「ちょっとあんた・・・大丈夫？ 気分悪くなるならせめて・・・

・
【山嵐】メンバー、全員のサインもらってからにしてよ！

！」

様子のおかしい慎吾の肩に手をおいてゆするリナ。

（慎吾「このままだと・・・リナ先輩が危険・・・？」）

突然慎吾は、真剣な目でリナを見た。

リナ「な・・・ 何よ？」

慎吾「リナ先輩！ 好きな言葉は！？」

唐突に慎吾はリナに変な質問をぶつける。

リナ「は!？」

慎吾「急いで！好きな言葉ありますか!？」

リナ「うゝん・・・【イケメン】かな」

慎吾のは迫力に押され、正直に応えた。

慎吾「わかりました！いいですか、よく聞くいてください!」

ものすごく焦った表情で喋る慎吾に、どう対応していいかわからないリナ。

慎吾「僕からのメールは、必ず最初に【イケメン】と書きますから!」

リナ「は？何言ってるの、あんた？」

慎吾「それ以外のメールは絶対返さないでください！いいですね!」

リナ「言ってる意味がわからないっつの!!!」

慎吾の不自然な行動にイライラし始める。

突然・・・

慎吾が不愉快そうな表情を浮かべ、信じられない事を口にする。

慎吾「黙ってましたけど僕・・・

リナ先輩の自己中にウンザリしてたんです!」

リナ「!?!」

慎吾の言葉が頭に入ってくるのに、しばしの時間を要した。

リナ「は〜!?! あんた何言っただの? マジ言っただの!?!」

思いつきり眉毛をつり上げたリナが、大声で返す。

慎吾「もちろんですよ。僕が嘘ついた事ありますか?」

慎吾は挑戦的な態度をとる。

リナ「あんた、言ってる事がしつちやかめつちやかよ!」

慎吾の言葉と態度に、リナの怒りの度合いが加速する。

慎吾「ホントは、松浦さんの楽屋も3階なんですよ。

6階まで来て騙されましたね!」

赤メガネの向こうの瞳が大きく見開いた。

プチッ。

そして何かが切れた。

瞬間、慎吾の顔面にリナからの右ストレートが炸裂していた。

もんどりうつて、フロアに倒れる慎吾。

その慎吾に背を向けてエレベーターに向かうリナ。

イライラしながら、エレベーターの「↑」ボタンを連打する。

リナ「ちょっと優しくしたら・・・全く、だから男ってヤツは・・・」

ようやく開いたエレベーター。

リナ「おっと・・・」

イライラしながら乗り込もうとするが、エレベーターの中から降りる人物がいた。

黒いスーツ、黒いズボン、黒いサングラス・・・黒ずくめの男が3名、降りてくる。

怒り心頭のリナは男らをかわし、すぐにエレベーターに乗ろうとした。

一人の男とすれ違った瞬間・・・

リナ「・・・」

男のスーツが一瞬めくれた際、【それ】がリナの視界に入る。

ズボンとメタボなお腹の間にある・・・

拳銃を。

（リナ「まさか・・・ドラマか何かの小道具よね？」）

そう言い聞かせ、エレベーターの中に入り【3】を押す。
ふと自分が来た道に目を見やると・・・

倒れている慎吾を、黒ずくめの男3人が囲っていた。

リナ「え・・・？」

不穏な空気を感じたりナ。閉まろうとしたエレベーターの扉を手で止め、事態を見つめる。

無様に床に倒れた慎吾は、右頬を抑えながら・・・

慎吾「・・・」

3人の男に囲まれている事を確認した。目の前に一人、後ろに2人・・・3人とも慎吾を凝視している。

慎吾「・・・」

背後の男を確認するふりをして、チラッとエレベーターの方を見た。リナはエレベーターに乗っているものの、その扉は開いたままこち

らを見ている。

（慎吾「ま、まずい……」）

正面に目をやると、さらに一人の男が向こう側の廊下から現れた。

スピリチュアル・カウンセラーの江浜である。

こちら黒ずくめ。慎吾は4人の黒ずくめの男に囲まれた事になる。

（江浜「今から君を連れ去る。だが君の安全は保証する」）

慎吾「う……」

慎吾はコメカミを抑える。頭の中、直接彼の声が入ってくる。

（江浜「まずはエレベーターにいる君の連れを逃がす。

無理してでも立つんだ！」）

慎吾「ぐ……」

慎吾は小さな悲鳴を上げながらゆっくりと立ち上がった。

リナのパンチで軽い脳しんとうを起こしているため、足下がおぼつかない。

エレベーターにいるリナの視界が江浜をとらえた。

（リナ「な…… 江浜氏!? 何が……?」）

江浜を含めた黒ずくめの男4人に囲まれた慎吾が、無理に立ち上がろうとしている。それを見ていたリナはただならぬ事態と感じ、エレベーターを降りようとした。

その時・・・

江浜「・・・」

数m離れた慎吾に向け、江浜は右の手のひらを垂直に向ける。

江浜「?^{おん}!」

大きなかけ声と共に、その手のひらを数10cm押し出した。

慎吾「!?」

瞬間、慎吾の右肩に激痛がはしり、そのまま後ろに吹っ飛ばされる。

江浜、慎吾の直線上・・・エレベーターを出ようとしたリナにも、目に見えない風圧が襲いかかった。

リナ「きゃ!」

風圧に押され、エレベーターの中で尻餅をつく。

そのままエレベーターの扉が閉まり、下へと移動を始めた。

リナ「ちょ・・・ ちよつと待つて・・・」

すぐにエレベーターの【開】ボタンを連打するが、その要求を受け入れられる事はない。

エレベーターは3階↓1階まで降りた後、各階で停止しながら6階まで上っていく。

再度6階に降り立ったりナだが・・・

慎吾の姿はおるか、黒づくめの男達、江浜の姿もそこにはなかった。

・・・。。

慎吾は第5スタジオの小道具部屋に連れて行かれ、そこで糸見に「お前の知ってる事を話せ」と銃で脅される。

「何も知らない」態度を貫く慎吾を見て、糸見は江浜を呼び寄せた。

糸見「慎吾君。今から彼が・・・君の中に入る。

そして、必要な情報を取り出してもらおうってわけだ」

そう言うのと糸見は席を立ち、入れ替わるように江浜を座らせる。

江浜「・・・」

背中を糸見につつかれた江浜。 慎吾の目を見つめ、彼の両肩に手を

置いた。

（江浜「私の声が聞こえてるな？」

【Yes】なら、瞬きを一度だけしろ！」）

慎吾は一度、瞬きまばたをした。

（江浜「今から君を痛めつけるフリをする。

だが中途半端な演技では、目の肥えた糸見に通用しない。

少しだが痛みを感じてもらおう・・・いいな？」）

慎吾は深呼吸をして・・・今一度、瞬きする。

江浜「覚悟はいいな？」

江浜は目を閉じ、精神を統一した。

糸見「・・・」

その後ろで、糸見が腕組みをして見守っている。

江浜「・・・」

カッと目を大きく見開くと・・・

江浜「?!おん！」

大きなかけ声をかけた。

瞬間・・・肩に置かれた江浜の手を通じ、慎吾の中に何かが侵入する。

そして・・・

慎吾「うわぁああああ!!!!」

大きな悲鳴が、小さな部屋に鳴り響いた。

慎吾の両肩に置かれた江浜の両手。そこから何か熱いものが侵入してくる感覚に襲われる。

江浜「・・・」

慎吾「ぐうううう・・・」

覚悟してた以上の苦痛が、体中かけめぐった。

江浜「・・・」

10秒ほどして、江浜は手を離す。瞬間、慎吾が大きく深呼吸をした。

慎吾「は・・・は・・・」

目を閉じ、苦しそうにうつむく慎吾。

糸見「・・・」

後ろで腕組みをしていた糸見が、江浜に声をかける。

糸見「どうだ？」

江浜は慎吾を見つめながら応えた。

江浜「まだわからない」

糸見「そうか。ならもう一度だ」

江浜は糸見の方を振り返る。

江浜「少し間を開けた方がいい。彼の命に^ま関わる」

その言葉を聞いた糸見は、かるく鼻息を吐いてみせた。

糸見「ああ、そうか。じゃあ気にせず^ずにやれ」

糸見は江浜の言う事は耳に入っていないかのように、慎吾の方をアゴでさす。

江浜「……」

慎吾の両肩に……江浜は再度、自分の両手を添えた。慎吾を見つめ……

江浜「覚悟はいいか？」

慎吾は瞬きを一つだけする。

江浜「?!」

慎吾「うわあああああ！！！」

小さな部屋に・・・再び、慎吾の悲鳴が鳴り響いた。

・・・。。

慎吾が小道具部屋に閉じ込められ、1時間が過ぎた。
何度となく、江浜の拷問のような攻撃に耐えている慎吾。

慎吾「・・・。。」

汗びっしょりで、かなり衰弱している。

江浜は糸見を見て

江浜「これ以上はダメだ。間違はなく死ぬ」

と、強く言った。

糸見「・・・。。」

親指の爪を噛み、少しばかりイライラした表情を見せる糸見。

糸見「出る」

江浜に部屋の外へ出るよう指示した。

部屋の外で糸見は・・・江浜の胸ぐらを掴み、凄味をきかせる。

糸見「どういう事だ？」

胸ぐらを捕まれた江浜は、無表情のまま応えた。

江浜「どういう事だ・・・とは？」

糸見「お前が除霊をする時・・・

いつも30分足らずで、悪霊を追い払ってきたらろう？

すでに1時間。

もうヤツから情報を得てもいいはずだ!!」

相変わらず江浜は、無表情のまま応える。

江浜「あの子は、何かに取り憑かれているわけではない。むしろ正常。

その状態で彼の体に入り込むには、大きな危険を伴う。

除霊と違って時間がかかるのは当然だ」

糸見「・・・ちつ。じゃあどれぐらいかかる？」

糸見はさらに強い力で、江浜の胸ぐらをつかんだ。

江浜「さあ。3日もあれば・・・」

糸見「ふざけるな!! そんなに待てるか!!」

お前、自分の立場わかってるのか！？

娘の命がかかってるんだぞ！！」

江浜「・・・・・・」

急に江浜の表情が曇り始める。

江浜「ああ・・・・わかってる」

糸見は江浜の前に人差し指を立てた。

糸見「１日だ。１日だけやる。明日の午後５時がリミットだ。

これを過ぎて、何も進展がない時は・・・・わかってるな？」

そついうと江浜を放り出すように投げ飛ばす。

糸見「言っておくが・・・・逃げようなんて思わないよ。

お前らを見張ってるのは、ここにいる３人だけじゃない。

この局内・・・・いたるところで、組織の連中が見張っている。

逃げたようとしたら・・・・容赦はしない！」

江浜「・・・・・・」

しばらく糸見を睨んでいた江浜。静かに口を開いた。

江浜「わかった。明日の５時までに・・・・」

糸見「リミットを過ぎた場合・・・

次の【ホラーの湖】のサブタイトルは・・・

【実の娘の亡骸を探せ!】となる!

その事を忘れるな!!」

大声で怒鳴った糸見は、そのままスタジオを出て行った。

江浜「・・・コホッ・・・」

それを確認した江浜。1つ咳をした後・・・左手の拳を額にあて、かなり困った表情を浮かべる。

江浜「・・・」

そして・・・

慎吾のいる小道具部屋に戻っていった。

(第18話へ続く)

第17話 江浜の苦悩（後書き）

次回予告

楽屋に戻った糸見は一本の電話を受ける。この事件の鍵を握る男がらだった。

男の指示で糸見は慎吾に銅板の裏を見せ、情報を得ようとする。埋蔵金のありかを示す銅板。表と裏に書かれた内容を読み取れば埋蔵金のありかは示される……。

一方、自宅に戻ったりナ。同じマンションに住む慎吾が、戻ってない事を確認。
危険を感じつつも……イチかバチか、慎吾とコンタクトを取ろうとした。

次回 「 第18話 銅板の裏 」

第18話 銅板の裏（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TV局へと向かった2人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、2人は特別番組「徳川埋蔵金の謎を追え！」の観客として招待を受ける。

番組収録後、慎吾は黒ずくめの男等に拉致された。

一方、番組収録を終えたプロデューサーの糸見は、慎吾の前に現れる。さらに江浜も慎吾の前に現れ・・・埋蔵金の情報を吐かせるため、慎吾に拷問を開始した。

江浜は糸見に娘を誘拐され、仕方なく協力しているのだが・・・

第18話

銅板の裏



第18話 銅板の裏

糸見「ふゝ．．．」

楽屋に戻ってきた糸見。慎吾のリュックを逆さまにし、中身を全てテーブルの上にぶちまけた。

糸見「．．．．．」

何かしらの情報を得ようと、持ち物全てに目を通す。
ふと慎吾の携帯がブーン、ブーン．．．となり始めた。

着信【リナ先輩】

糸見「あいつの彼女が．．．」

糸見は着信を切った。

その携帯をチェックすると、ここ1ヶ月のメールや着信履歴は．．．
全てこの【リナ先輩】だった。

糸見「．．．．．」

注意深くそのメールの内容をチェックする。

糸見「なるほど．．．2人でここに来たのか．．．」

またしても慎吾の携帯が鳴る。着信は相変わらず【リナ先輩】だ。

糸見「・・・・・・」

再度着信を切り、メールをうつ。

【体調が悪かったので先に帰ります。心配しないで】

そのまま【リナ先輩】に送信した。

（糸見「ふん。これで・・・・」）

ブーン、ブーン・・・

しばらくすると今度は、糸見自身の携帯が鳴る。

着信【鳳】おおとり

慌てて糸見は電話に出た。

糸見「あ！ 巧さん！たくみ！ 糸見です！！」

電話の向こうからは、重低音の声が聞こえてくる。

糸見「はい、はい。ええ・・・はい。」

明日にはあの青年から情報を得てるはずです。

任せてください！ 巧さんに必ずいい情報を伝えます！」

焦りながら喋る糸見。

糸見「ええ！？ え・・・あ・・・あいつにですか？」

突然、大声を出した。

糸見「あいつに・・・銅板を!？」

わ、わかりました。やってみます・・・

はい、急ぎます。今すぐ!」

そう言つと電話を切る。

糸見「・・・」

しばし迷つた表情を見せたが、思い立つたように楽屋の奥へと歩き出す。

そしてクローゼットの奥にある金庫を取り出した。

糸見「・・・」

おもむろに金庫を開けると、あの銅板を取り出す。

糸見「・・・」

しばらくじつと銅板を見つめた。

(糸見「これを・・・あいつに・・・?」)

溜息をついた糸見は、銅板を元に戻す。金庫を閉めると、楽屋の中をウロウロ歩き回り、再び悩み始めた。

（糸見「………本物は、渡せない……」）

自分のデスクに置いてあった……番組用のレプリカを手に取ると、再び慎吾のいる第5スタジオへと向かった。

………。

リナ「………ったくもう……」

リナは、TV局の外で慎吾の携帯に電話をかけていた。

おそらく……江浜と黒ずくめの男3人に、慎吾は拉致された。そう思ったリナは、メールではなく電話で直接慎吾の声を聞こうと試みていたのだが……

慎吾にかけた携帯の呼び出しは、途中で切れる。

（リナ「留守電にならないって事は……

途中で切ったわね……」）

慎吾でない誰かが……慎吾の携帯を操作しているだろうと推測するリナ。

（リナ「でも……」）

どうする事もできない。

その後何度か電話をかけるも、全て途中で切られてしまふ。

ふとリナの携帯にメールが届いた。

【受信 歴ヲタ】

リナ「……………」

あわててメールをチェックする。

【受信 歴ヲタ】

【タイトル なし】

【内容 体調が悪かったので先に帰ります。心配しないで】

メールを受け取ったリナだが……

（リナ「状況は……ヤバい感じね……」）

慎吾の携帯を使い、誰かが偽りのメールを送信している。あるいは、

慎吾に無理矢理そう送るよう、何者かが指示した。

（リナ「間違い……なさそうね……」）

推測から確信に変わる。

慎吾は黒ずくめの男達に囲まれる直前……確かにリナに言った。

慎吾「僕からのメールは、必ず最初に【イケメン】と書きますから
！」

それ以外のメールは絶対返さないでください！ いいです
ね！――」

リナ「……………」

しばらく携帯を見ていたリナだが……どうする事も出来ない。

リナ「…………。まったくあいつ……何があったーっの？

どうすれば…………？」

1時間ほどTV局周辺をうろろしていたリナだが……。後ろ髪ひかれながらも、自宅のマンションに戻る事にした。

万が一にも……。あのメールの通り、慎吾が体調悪く、先に帰っていることを期待して……。

…………。

糸見は再度第5スタジオを訪れる。入り口には1人、黒ずくめの男がいた。彼に視線を合わせる事無く、無造作に奥の小道具部屋へ向かう。

小道具部屋のドアを開けた瞬間、中にいた黒ずくめの男が反射的に銃を抜こうとするそぶりを見せた。

それを片手で制止し、部屋の中へと入って行く。

糸見「ふん。まだ進展はないようだな……」

慎吾の前に座る江浜に声をかけた。

江浜「あれからまだ20分だ……。リミットはまだ先」

糸見「わかつてるさ。しばらくお前は出ている」

江浜「・・・」

慎吾の事を気にしながらも、言われた通り小道具部屋の外へ出る。

糸見「さて・・・」

汗びつしよりになつてゐる慎吾の前に立つと、糸見は慎吾の目の前に銅板を静かに置いた。

糸見「見る」

慎吾は衰弱した様子で・・・ゆっくりと銅板に目を向けた。

慎吾「・・・」

そこには、対称的な直線で描かれた図形と「宣言、新將軍ノ元、光明」と文字が書かれていた。

> i 3 4 0 4 2 — 2 4 3 0 <

糸見「意味がわかるか？」

慎吾「・・・」

無言でそれを見つめている慎吾。

（慎吾「リ、リナ先輩が見たという・・・銅板の裏・・・」）

糸見「これを見て、わかった事を素直にいえ！」

体の疲労はひどいものの、頭は回る。頭の中で感じた事を整理して口を開いた。

慎吾「・・・おそろく・・・。

左の図形は、籠かこの目を表しているかもしれない・・・」

思った事を素直に言った。

糸見「籠の目？」

慎吾「・・・。」

糸見「続ける」

慎吾「右の文字は・・・新將軍・・・。

15代將軍の慶喜は・・・わずか1年で城を明け渡しているから・・・

埋蔵金を隠したとするなら・・・

16代將軍になるべき人物の元・・・という意味かも」

糸見「それぐらいは、誰でも解析できる。もつとないのか!？」

慎吾はじつと銅板を見つめる。

慎吾「……開城後、將軍家から公爵家へと変わった徳川家。

その16代当主・家達の、幼ない頃の名は亀之助……」

ゆつくりと語り始めた。

慎吾「明治2年。新政府により、6歳にして江戸を追われ……

駿河府中へ移住する事になった。当時6際だった家達……

すなわち亀之助。駕籠かごの中から、駿河の光景を見て……

はしゃいだという逸話がある……」

その視線は、銅板の裏から離れる事は無い。

糸見「……」

慎吾「埋蔵金のありかを示したと言われる【かごめかごめ】の歌。

その歌詞にある【亀】は、亀之助を暗示している可能性も。

左の図形が、何らかの【かご】を示していると考えれば……

【かごの中の鳥】が……あるのかも……」

糸見「鳥!? 鳥とは!?!」

慎吾「……。すぐにはわからない。でも……何か見えそうだ……

」

何のかけひきもなく、慎吾は銅板を見て思った事を素直に言った。

慎吾「間違いなく……これは埋蔵金のありかを示している……

ような気がする。もう少し・・・

もう少し時間があれば・・・」

糸見「・・・」

慎吾が記憶だけで、徳川家にまつわる歴史的事実を述べた事や・・・嘘をついたり、フェイクを装っているようにも見えない事から、糸見は慎吾の言葉を信じるに至ると感じ始めた。

（糸見「やっぱりこいつ・・・」

巧さんの言う通り、埋蔵金に関わる情報を持っている・・・？」）

だが、慎吾は埋蔵金のありかを今のところ知らない・・・。

糸見「・・・」

結論に至らない事がイライラの原因だが、慎吾に時間を与える余地はあると判断した。

糸見「ふん。いいだろう・・・。しばらくお前に時間をやる。

何かわかったら、その黒服の男に言え」

糸見は黒服の男に「何かわかったらすぐ連絡しろ」と伝えて、小道具部屋を出た。

江浜「・・・」

部屋の外で壁に背をもたれ、腕組みをしている江浜。出てきた糸見

を見て、声をかける。

江浜「私はもう必要無いのかな？」

糸見が江浜を睨み付けた。

糸見「今、彼に埋蔵金のありかを示す銅板を解析させている。

明日朝まで様子を見て、何も出なかったらお前が情報を引き出せ」

江浜「・・・」

無言で頷く江浜。スタジオを出ようとした糸見に再度声をかけた。

江浜「1つ、いいかな？」

かったるそくに振り返る糸見。

糸見「手短にな」

江浜「・・・。娘の声を聞かせろ。

まだ生きているという保証が欲しい」

糸見「安心しろ。それは保証する」

江浜「信用できない。声を聞けないなら、私がここにいる理由がない」

江浜は強気な姿勢を崩さなかった。

糸見「・・・」

糸見にとって江浜は、慎吾から情報を取り出す最終手段である。ここで江浜が離脱するのはまずい。糸見は頭をかきだした。

糸見「わかった。1度だけだぞ！」

そう言うと糸見は携帯を取り出し、どこかにかける。つながった電話の向こうの誰かと2、3の会話をした後、江浜に携帯を渡した。

糸見「お前の娘だ」

江浜はゆっくりと携帯を受け取り、電話口に出る。そして・・・

江浜「あんず・・・」

娘の名を呼んだ。

あんず「お父さん！？ お父さん！！」

電話の向こうから、娘の声が聞こえてきた。

江浜「あんず！ よく聞け！ 必ず助けるから！ それまでの我慢だ！」

あんず「う、うん・・・何とか・・・大丈夫だから・・・私・・・」

電話の向こう・・・今にも泣き出しそうな、か細い声が聞こえてくる。

江浜「とにかく今は・・・」

会話の途中で、糸見が電話を取り上げる。

糸見「そこまでだ」

そう言うと電話を切った。

糸見「明日の5時までに、俺から連絡がない場合・・・

女を殺せと命じている・・・」

その言葉に反応した江浜は、殺気のこもった視線を糸見に送る。

糸見「娘の命が惜しいなら、部屋の中のあいつを殺しても情報を得るんだ。

それだけだ。さあ、部屋に戻れ。

あいつと一緒に謎解きをするもよし。

すぐにヤツの体に侵入して、情報を引き出すもよしだ」

今一度江浜を睨み付けた糸見は、スタジオを後にした。

江浜「・・・」

この先の事を悩みながら・・・江浜は小道具部屋へと戻っていった。

・・・。

自宅のマンションへ戻ってきたリナ。

同じマンションに住む慎吾・・・マンションの出入り口にある彼の郵便受けに、夕刊が見えた。真面目な慎吾は朝刊も夕刊も欠かさず毎日熟読している。

（リナ「この時間なら・・・とつくに新聞は取っているハズ・・・」）

夕刊がまだ郵便受けにあるという事実を受け止め、リナがため息をついた。

リナ「・・・何か・・・手はないかしら・・・」

夜、お風呂に入りながらリナは今までの事を整理する。

？ 慎吾は、江浜と黒ずくめの男に拉致されたらしい。

？ 男は銃を持っていた可能性がある。

？ 慎吾の携帯はONになっていたが、電話には出ない。

？ 何者か・・・おそらく拉致した誰かが、嘘のメールを自分につてきた。

どうにかして慎吾とコンタクトをとらなければ・・・

（リナ「嫌な予感が・・・する・・・」）

リナは一つ危険な案を浮かべた。もし相手が本物の銃を扱う連中であれば・・・実行するには大きな危険を伴う。慎吾どころか、ヘタ

したら自分自身にも危険がおよぶかもしれない。

かといって、慎吾を見捨てる事などできない・・・それはリナ自身がよくわかっていた。

その夜、リナは悩みながら眠りにつく。

・・・。

翌朝。

あまり眠れなかったリナ。

リナ「・・・。」

マンションの1階、入り口。慎吾の郵便受けには昨夜の夕刊、その上に今朝の朝刊が入っているのを確認した。

（リナ「イチか、バチかね・・・」）

リナは意を決して、慎吾の携帯アドレスに【ある内容】のメールを送った。慎吾を拉致した人間がメールを見ることを前提として。

（リナ「これで・・・あいつから、メールが返ってこなかったら・・・」）

最悪、死んでるかもしれない。

（リナ「その可能性も・・・否定できない・・・」）

そう思うと不安でどうしようもなかった。

（リナ「頼むわよ・・・来てよ！ 慎吾！-！」）

リナはじつと自分の携帯の前で祈り続ける。

20分後・・・

メールが返ってきた。

【受信 歴ヲタ】

【タイトル イケメンには会えました？】

（リナ「き、きた！！ 慎吾からだ！！」）

リナは慎吾が生きている事を確信し、安堵のため息をつく。

メール内容をよんだリナは

（リナ「第5スタジオ・・・」）

慎吾が監禁されている場所を突き止めた。

リナ「・・・」

じつと携帯を見つめながら・・・ これからの事を考える。

リナ「・・・」

そして慎吾の救出作戦を・・・わずか5分で計画した。

(第19話へ続く)

第18話 銅板の裏（後書き）

次回予告

銅板の裏を見つめる慎吾は・・・確実に埋蔵金に近づいていた。

リナは慎吾からのメールを受け取り、監禁場所を特定。
慎吾を救出に単独でTV局に乗り込むことを決意する。

次回 「 第19話 コンタクト 」

第19話 コンタクト（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 F i r s t s e a s o n

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TVSへ訪れた2人は「徳川埋蔵金の謎を追え！」の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

慎吾の身を心配したリナは、何とか慎吾とコンタクトを取ろうとするが・・・

第19話 コンタクト

第19話 コンタクト

5月5日、土曜日。午後7時過ぎ。

第5スタジオ・・・奥にある小道具部屋。

慎吾はじつと銅板を見つめていた。

> i 3 4 0 4 2 — 2 4 3 0 <

慎吾の真正面には、腕組みをした江浜が座っている。そしてもう一人、見張り役の黒ずくめの男が部屋の出入り口に立っていた。

江浜はその霊能力で、慎吾に言葉を伝えられる。見張の男に気づかれず・・・テレパシーのように、直接言葉を伝える事が出来るのだ。

しかし、慎吾からの言葉を受け取ることはできない・・・一方通行の能力だった。見張り役のスキを見て、江浜は時々慎吾に言葉を送っている。

糸見は、先月からある暴力団の資金援助を受け、埋蔵金の発掘を再開した事。

その暴力団に娘を誘拐され、仕方なく慎吾の拉致に協力した事。何とか慎吾をここから安全に出したい事。

万が一の場合、最終手段がある事。

何故、慎吾が拉致されたのか・・・その理由は2人ともわかって
いた。

それは・・・ 慎吾の守護霊だ。徳川埋蔵金と深く関わっている。

（江浜「黒幕がいる・・・ 慎吾君の守護霊を知る者が・・・」）

しかし誰が慎吾の守護霊を見抜いたのかは・・・江浜にもわからな
い。

（江浜「糸見の後ろで・・・誰かが糸をひいているのは間違いない」
）

その意外な黒幕の正体を江浜が知るのは・・・翌日だった。

慎吾は江浜からのメッセージを受け取る度に「わかりました」の合
図である、瞬きを1つする。まはた

江浜には【心配するな】と言われている慎吾だが・・・正直、不安
で仕方がない。

仮に徳川埋蔵金のありかにたどり着いた場合・・・果たして解放さ
れるのだろうか？

埋蔵金にありつけなかった場合は？

この先の事を考えると、どうしても「明るい未来」が想像できない。

慎吾「・・・」

ただ、不安になっているだけでは何も進展しない。ならば、少しでも銅板が示す事実に近いと思っていた。

それに銅板を見て、頭を働かせるだけでも恐怖が追い出されていく。ならば今は、銅板にある謎を解こうと・・・自分に言い聞かせた。

何度も何度も銅板を見つめる。時々深呼吸し、目を閉じては・・・また銅板を見つめる。

> i 3 4 0 4 2 — 2 4 3 0 <

文字の部分に関しては、いくつかの仮説が立てられた。ただ、対称図形の意味がよくわからない。

この図形の意味するものと、文字の部分とが論理的にマッチした時・・・

（慎吾「埋蔵金のありかが示される・・・」）

そう感じていた。

（慎吾「リナ先輩がいたら・・・解けるかもしれない・・・」）

携帯はおろか、全ての持ち物を糸見に取られている。リナに連絡を取る術などない。

銅板を見つめ、江浜の声に耳を傾けるしかできない慎吾。

娘を人質に取られて、糸見の言うとおり動くしかない江浜。

誘拐されている江浜の娘・あんず。

時間が過ぎていく度・・・

この3人の運命は確実に【死】へと近づいていた。

その運命を変える人物がいる・・・

5月6日、日曜日・・・ 午前8時過ぎ。

糸見は自分の楽屋で横になっている。ゴールデンウィーク期間中、第5スタジオと楽屋を借り切っている糸見は、その楽屋を生活の拠点としていた。

ブーン、ブーン、ブーン・・・

携帯電話の振動音で目が覚める。テーブルの上・・・雑に置いていた慎吾の携帯だった。

糸見は無言でその携帯を開く。

糸見「……………」

電話でなくメールだ。

【受信 リナ先輩】

【タイトル 浮気相手に告ぐ！】

【内容】

【あなた、昨日スタジオにいた金髪の子でしょ！？

あなたが彼氏の携帯使ってメールしたの、バレバレだから！

言つとくけど、私は彼と同棲してるの！

あなたの出る幕無いつつの！！

今、あたしの彼氏といるんでしょ！？

いい！？ 彼氏と話をさせて！！

1時間以内に、彼氏から連絡ない時は……

迷わず警察に通報する！

TVSの防犯VTRであなた探してやるから！】

メールを見て……糸見は眠気の中、頭を抱えた。

糸見「……………つたく……………」

昨日から今日にかけ、思い通り事が進まずイライラがつのる。

適当にメールを返そうかと思ったが・・・
慎吾本人でないのがバレたら、TVSに警察を送り込まれる可能性がある。

江浜といい、慎吾の彼女といい・・・

糸見「つち!!」

舌打ちをする。5分ほど悩んだ後、慎吾の携帯を持って三度^{みたひ}第5スタジオへ向かった。

・・・。。。

第5スタジオに入り、入り口にいる見張り役の男には目もくれず奥の小道具部屋に早足で行く。

小道具部屋の前にまた1人、部屋に入ってまた1人の見張り役がいた。

そして慎吾と江浜がいる。2人とも一睡もせず、例の銅板を中心に向かい合って座っていた。

糸見は江浜を立たせ、その椅子に座る。そして、携帯を広げて見せた。

糸見「お前の彼女からだ」

慎吾「・・・」

見せられたメールを見る。

糸見「大学入学してすぐに同棲か・・・いいな」大学生は」

糸見は睨み付けたまま皮肉を言った。

慎吾「・・・」

肉体疲労はピークなれど、頭は回る慎吾。

（慎吾「リナ先輩が、僕とコンタクトを取ろうとしている・・・」）

糸見「このままだと、TVSに警察が来るかもしれないな。

どうすれば彼女は黙ってくれるかな？」

ちよつと考えた後、慎吾は口を開く。

慎吾「電話を・・・かけさせて下さい・・・」

糸見「それはダメだ」

糸見は即答した。

糸見「下手な事を口走られると困るんでな」

慎吾「・・・じゃあ・・・メールを・・・」

糸見はしばらく悩むがそれを了承する。

糸見「いいだろう。だがお前に携帯は渡せない。メールの内容を言え」

慎吾「・・・わかりました・・・」

慎吾の頭の中では、

「リナ先輩を巻き込みたくない」

「このままでは自分も、江浜さんも、その娘さんも危ない・・・
リナ先輩にかけるしかない」

この2つの思いが、何度も交錯していた。

慎吾が選んだのは・・・

後者だ。

慎吾「じゃあ、僕が言う通り・・・メールをうつてください・・・」

糸見「・・・」

糸見は慎吾の言葉をそのままメールにした。

特に変わった内容ではなかったので、そのまま送信する・・・。

その様子を見ていた慎吾。

（慎吾「リナ先輩ならきつと・・・」）

・・・。

その頃、リナは自宅のマンションで慎吾からのメールを待っていた。

（リナ「メールがこなかったら・・・死んでるかも・・・」）

そう思うと不安でどうしようもない。

（リナ「頼むわよ・・・来てよ！ 慎吾！！」）

8時半過ぎ・・・メールが返ってきた。

【受信 歴ヲタ】

【タイトル イケメンには会えました？】

リナ「き、きた！！ 慎吾からだ！！」

合い言葉の【イケメン】が、最初に書かれてあるのを確認。慎吾が生きている事を確信したリナは、安堵のため息をつく。

【内容】

【まだレポート仕上がってなくて・・・。
だいたいは出来ているんですけど。

今、マックで仕上げに入ってます！

誤解しないで、浮気はないです！

すぐに戻ってきますから！

多分夕方にはレポート仕上がってます。

時間は7時までで、戻ってきます。

お詫びにケーキ買っていきますね。

でもホントにホントに……
【すいませんでした！】

リナ「……」

じつとメールを読んだ。

リナの脳は、慎吾の隠されたメッセージを余裕で読み取る。

（リナ「第5スタジオ……」）

慎吾の居場所はわかった。ならばと、次の行動を悩む。

（リナ「銃を持ってるとなれば……警察はまずいかも……」）

現時点で、慎吾を誘拐した連中の正体は不明。警察沙汰はかえってマズいかもと判断した。

（リナ「仕方ない……。世話のやける歴ヲタを……
助けに行くか……。そうとなれば……」）

慎吾のメールに対し、返信メールを打ち始める。

（リナ「【今から行くわ】・・・送信つと！」

慎吾を救出する決意をし、早速準備を開始した。

（リナ「・・・久々だわ、コレ使うの・・・」

クローゼットの引き出しから、ある物を取り出す。

リナ「・・・」

過去・・・これを使った事がある。

（リナ「今は・・・慎吾の事に集中・・・」

首を横に振る事で、過去も振り払う。

今回は【敵】がいる。そう思ったリナは、リュックに荷物を入れた。

（リナ「全く・・・リュックが動きやすいとはいえ・・・

私まで、ヲタク風の格好しなきゃならないとは・・・」

メール受信からわずか10分。リュックを背負ったリナは、慎吾救出へと向かった。

・・・。

ヴーン、ヴーン、ヴーン・・・。

小道具部屋で待機していた糸見は、【リナ先輩】からの返信メールを確認した。

バイブの音に反応した慎吾が、糸見に視線を向ける。

慎吾「リナ先輩からですか？」

糸見「ああ・・・」

糸見がそのまま携帯を閉じるのを見て、慎吾が即座に声をかけた。

慎吾「メール見せてください！」

彼女、冷静なフリして・・・

平気で、ひどい行動に出る時ありますから！！」

糸見は不満そうな表情を見せたが、返信メールを慎吾に見せる。

糸見「どうだ？」

【受信 リナ先輩】

【タイトル イケメン、会えるわけねーだろ！】

【内容】

【マジ信じられない！！

帰らないってありえないっしょ！

来週でしょ、レポートの締め切りは！！

いいから早く帰って来い！

くだらん言い訳はするな！
わかった！？」

慎吾「……」

リナからのメッセージを、しっかりと受け取った。

慎吾「大丈夫です……。警察に言ったりはないと思います」

糸見「ああ、そうか。よかったよ。」

じゃあ、昨日から今までの成果を聞かせろ。

銅板について何かわかったか？」

慎吾「はい……」

ここで何か進展のある答えを出さないと危険かもしれないと感じた
慎吾。

徹夜で出した仮説を口にした。

> i 3 4 0 4 2 — 2 4 3 0 <

慎吾「文字の一番上、【宣】は6代将軍【家宣】を。

一番下【光】は、3代将軍【家光】を指してる可能性がある
ります。

新将軍が16代将軍とすれば……

上から【6】【16】【3】という数字を示している事に

なります」

糸見は銅板を見直す。確かに【宣】と【光】が、歴代將軍の名前にちなんでいる可能性はある。

糸見「なるほど……。他には？」

慎吾「その数字の何らかの組合せで……

表の枠の1つをさしてるとか……」

$$\begin{array}{r} > i 3 3 7 0 3 \\ \hline 2 4 3 0 < \end{array}$$
$$\begin{array}{r} > i 3 3 7 0 6 \\ \hline 2 4 3 0 < \end{array}$$

慎吾「あるいは対称的な図形ですが、点が8個。

表には魔方陣を示す枠が9つ。つまり表は裏より1つ多い」

糸見「……」

慎吾「ひよつとしたら数字の組合せで、8つの数を割り出し……

残った1つに、埋蔵金の場所が示されているのかも……」

糸見「ふむ……。8つの数字の出し方は？」

慎吾「例えば……【-6+16-3】とか。

四則演算か何か……。あるいは割った余りとか……

僕は暗算は苦手です。コンピュータで計算パターンを調べれば……」

糸見「……なるほど……」

予想以上に慎吾が深く考えている事に驚いた。

糸見「ふん……。他には？」

慎吾「あの広大な地図の範囲全てを発掘出来ない。

間違いなく、どこかの1箇所を示す何かがあると……」

糸見「……」

慎吾「今はまだわからないけど……

もう少し時間があれば……」

慎吾はさらなる時間の要求をしてきた。

糸見「……」

現在午前8時半過ぎ。

（糸見「確かに……もう少し彼に考えさせれば……」）

もつと何かが出るかも知れない……そう思った糸見は、慎吾の口車に乗る。

糸見「いいだろう。今しばらく時間をやる」

そう言うのと携帯を取り出し、どこかに電話をかけた。

糸見「いいか！ 【宣】を【6】、【光】を【3】として・・・
計算パターンをいくつか試せ！

特定の1箇所を見つけるつもりでな！！」

銅板の解析を任せているであろう、何者かと話しているようだ。

糸見「また昼過ぎに来る。

その前にありかがわかれば、すぐあいつに連絡しろ」

見張り役の男を指さす。そして今度は江浜に視線を移した。

糸見「お前も協力しろよ。午後5時までだぞ」

江浜「・・・」

江浜は無言のまま立っている。

糸見は部屋を出て行く際、見張り役の男に一言「とにかく何かあればすぐ伝えろ」と指示した。

糸見が黒ずくめの男に話した瞬間・・・

その隙について、慎吾は江浜に小声で伝える。

慎吾「今から、助けが来ます」

(第20話へ続く)

第19話 コンタクト（後書き）

次回予告

江浜と黒ずくめの男に慎吾は拉致された。
その慎吾が第5スタジオにいと突きとめたりナは、救出作戦を練る。

度胸と行動力で黒ずくめの男らを翻弄するが・・・

リナは一人の男に銃口を向けられてしまった。

次回 「 第20話 救出 」

第20話 救出（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TVSへ訪れた2人は「徳川埋蔵金の謎を追え！」の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

慎吾の身を心配したリナは、何とか慎吾とコンタクトを取る事に成功。慎吾救出に向け、TV局へと向かった。

第20話 救出

第20話 救出

2012年5月6日、日曜日。午前9時半。

ゴールデンウィーク最終日ゆえ、乗車率100%を超えるJR新幹線【こだま638号】。

混み合う電車内にも関わらず、ノートパソコンを広げるリナがいる。

リナ「……………」

TVSのページを真剣な目で見ていた。周りを気にしつつ、そのページのあるサーバに侵入し……素早くキーボードを叩く。

リナ「……………」

チラリと周りを見渡し、Enterキーを押した。

(リナ「よし……………」)

さらにもう一つ、とあるページに侵入する。

リナ「……………」

そして、とあるDATAを勝手に書き換えた。

リナ「……………」

しばらくPCの画面を見つめた後、ゆっくりと電源を切る。

（リナ「後は・・・ ヤバい状況じゃない事を祈るだけね・・・」）
ポケットから携帯を取り出すと、慎吾からのメールを今一度確認した。

【受信 歴ヲタ】

【タイトル イケメンには会えました？】

【内容】

【まだレポート仕上がってなくて・・・。
だいたいは出来ているんですけど。

今、マックで仕上がりに入ってます！
誤解しないで、浮気はないです！

すぐに戻ってきますから！

多分夕方にはレポート仕上がってます。

時間は7時まで、戻ってきます。
お詫びにケーキ買っていきますね。

でもホントにホントに・・・
すいませんでした！】

メールを見た瞬間、すぐに慎吾からのメッセージを受け取った。

【タイトル 【イ】ケメンには会えました？】

【内容】

【【ま】だレポート仕上がってなくて・・・。

【だ】 いたいは出来ているんですけど。

【い】 ま、マックで仕上げに入ってます！

【ご】 解しないで、浮気はないです！

【す】 ぐに戻ってきますから！

【た】 分々方にはレポート仕上がってます。

【じ】 間は7時まで、戻ってきます。

【お】 詫びにケーキ買っていきますね。

【で】 もホントにホントに・・・

【す】 いませんでした！】

頭文字だけ読めば【イまだいごすたじおです】↓【今、第5スタジオです】となる。慎吾が拉致された時の状況を考えると・・・そこに監禁されていると考えるのが妥当だ。

（リナ「第5スタジオ・・・銃持ったヤツも・・・
いるんでしょうね・・・」）

不安な気持ちを抑えつつ、何とか慎吾を救出すべく・・・今一度、作戦を練り直した。

・・・。

第5スタジオ・小道具部屋。

【受信 リナ先輩】

【タイトル イケメン、会えるわけねーだろ！】

【内容】

【マジ信じられない！！】

帰らないってありえないっしょ！

来週でしょ、レポートの締め切りは！！

いいから早く帰って来い！

くだらん言い訳はするな！

わかった！？】

慎吾は確かにこのメールを確認した。

【受信 リナ先輩】

【タイトル 【イ】ケメン、会えるわけねーだろ！】

【内容】

【【マ】ジ信じられない！！】

【か】えらないってありえないっしょ！

【ら】い週でしょ、レポートの締め切りは！！

【い】いから早く帰って来い！

【く】くだらん言い訳はするな！

【わ】かった！？】

自分が送信したメッセージと同じ・・・頭文字だけ読めば

【イマからいくわ】↓【今から行くわ】

このメッセージを受け取った。

リナを巻き込みたくなかった慎吾だったが・・・このままでは自分だけでなく目の前の江浜、そして彼の娘も非常に危険な状況になる。

（慎吾「リナ先輩に・・・かけるしかない・・・」）

同じ部屋にいる江浜は、慎吾の連れが来る事だけは直接聞いた。

江浜「・・・」

しかしそれ以外の会話は、見張りのいる状況では出来ない。

とにかく何らかの事態が少しでも動いた時・・・まずは目の前の慎吾、そしてその連れを無事に逃がしてやることを第一に考え、様々な状況を頭の中でシミュレートしていた。

・・・。

午前11時前。

リナはTVSの事務局で、入局許可証を受け取る。

あらかじめTVSのページに侵入し、この日の局の見学予定リストに自分の名前を書き加えておいたのだ。

入局許可証を受け取ったりリナは、すぐにそれをリュックに押し込む。

（リナ「さて・・・」）

TVS1階の広いロビーの中を歩いて行き、局内の見取り図の前で立ち止まった。

リナ「・・・」

4階奥に、第5スタジオがある事を確認。
そして見取り図の上を指でなぞりながら・・・「ある場所」を探し出した。

（リナ「ここが第5スタジオ・・・。奥に小道具部屋がある・・・
そしてここが・・・あのエレベーターか・・・」）

リナは複雑な局内の見取り図を全て暗記する。

さりげなくロビー内を見渡すと・・・

リナ「・・・」

黒いサングラス、黒いスーツ、黒いズボンの男が入り口付近に2人、
その他の場所にも、同様の格好の男がチラホラと歩いているのが見えた。

（リナ「黒ずくめって・・・暴力団か何かの制服？ 目立つわね・・・」）

リナの脳はそれらの男を【敵】としてインプットする。

リナ「ふ・・・」

一呼吸したリナは・・・TVSを一度出て行った。

・・・。。

15分後。

リナは第5スタジオに向かい、局内の廊下を歩いていた。
一度入り口の前を通り過ぎ、扉の前に誰もいない事を確認する。

（リナ「この中、どうなっているのか・・・」）

全くわからない状況だ。何度も入り口の前を往復する。

（リナ「えゝい！ 迷ってもしょうがない！！」）

意を決して、リナは第5スタジオの扉を開いた。

・・・。。

その頃。

楽屋の中で糸見は、鳳巧おおたけみという男からの電話に応じていた。

糸見「ええ。どうやら【宣】と【光】は將軍の名前を表してるよう
で・・・

はい。はい、そうです。

今、早急にあらゆるパターンを解析させています」

電話の向こうから重低音の音が響き渡る。

鳳「そうか……。もう少し……。と、信じていいのかな？」

糸見「もちろんです!!」

鳳「我々が莫大な発掘の資金援助し、困難な発掘許可を得た……。その恩義をしっかりと返してくれるな？」

糸見「ええ。息子も昼夜問わず、発掘作業にいそしんでいますので。

必ず数日以内に結果を出します！」

鳳「期待している。埋蔵金の……

場所がわかったら、真っ先に私に連絡するように……」

糸見「承知してます」

鳳「万が一、何も出なかった時は……」

糸見「そ、それも承知しています！」

必ず埋蔵金を発掘してみせますので！」

電話を切った後、糸見は大きなため息をついた。

（糸見「絶対に……。見つけてやる……。
どんな手を使ってでも……」）

腕時計で時間を確認する。

（糸見「1時間、仮眠をとるか・・・」

その後は、また第5スタジオだな・・・」

そういうと、楽屋にある大きなソファーに横になった。

糸見「・・・」

鳳、そして慎吾と江浜の間に挟まれ・・・疲弊仕切っている糸見。

糸見「・・・」

眠りに落ちるまで、1分とかからなかった。

・・・。

ボタン！！

勢いをつけて第5スタジオの扉を開け、1、2歩と中に入っていくリナ。

男「おい！！」

右手から大声が聞こえた。振り向くと・・・

リナ「・・・」

例の黒ずくめの男がサングラスの向こうから睨み付けている。そ

れどころか、男は右手を不自然に腰の後ろに回していた。

（リナ「……………絶対、銃を握ってる！！」）

その様を見て、一気に緊張が全身を駆け巡る。

リナ「あ。あ……………えっと……………すみません。間違えたようです」

そう言うとリナはすぐにスタジオの外へ出て行った。

男が追っかけてくる事がないのを確認したリナは、胸をなで下ろす。

リナ「……………」

スタジオから20m離れたところ、廊下の角を曲がり、深呼吸をするリナ。

（リナ「やつベーーーーって！絶対あれ、やつベーーーーって！！」）

このまま何も見なかった事にして…………

（リナ「帰りたい気持ちで、いっぱいだわ……………」）

しかしそれが出来ない事を、リナ自身わかっている。

（リナ「あいつ……………まだ生きてるわよね……………」）

左手の拳を額に打ち付けた。

リナ「……」

深呼吸した後

（リナ「第5スタジオ……扉から入って、ちょっと見渡した限りでは……」

慎吾の姿は見えなかった……」

冷静に状況を振り返る。

（リナ「って事は……奥の小道具部屋に……いる……？」
）

だとしたら、スタジオの奥まで入っていかなければならない。

リナ「……」

しばらく深呼吸をし続けたリナは……

リナ「よし!!」

気合いを入れた後、意を決する。

そして再び……第5スタジオへ向かった。

……。

慎吾と江浜は、誰かがスタジオの扉を開ける音を聞き取った。小道

具部屋からは、誰が入ってきたのかはわからない。

2人とも前日から一睡もしていない。体の疲労は限界に近い状況だ。それでも助けが来たかもしれないと、来るべき事態に備えて気を引き締めた。

男「おい！ お前、さっきもここに入ってきたな！

ここはもうすぐ撮影に入る。

関係者以外立ち入り禁止だぞ！」

相変わらず黒サングラスの男は、右手を不自然に後ろに回している。

リナ「………」

臆せずリナは、とぼけた声を出した。

リナ「あー……でも、第5スタジオだって、プロデューサーが……」

小道具部屋から、必要な物を取って来いって……」

緊張を見せまいと意識すればするほど……声が緊張する。

男「ふん、ADか……。何かの間違いだ。さっさと出て行け！」

リナ「えー！！ また私【P】に怒られちゃう！

あんたのせいって言うわよ！ 責任とってよー！！」

男「………」

あっさり部屋を出て行くと予想していた男は、一瞬ひるんだ。

男「・・・・・・」

しばらくリナを見つめた後、口を開いた。

男「そのプロデューサーとやらは・・・誰だ？」

リナ「え・・・・？」

まさかの返しに、今度はリナがひるむ。

リナ「あー・・・糸見！　糸見プロデューサーですよ！

わかるでしょ！　あの埋蔵金の糸見プロデューサーです！」

緊張のあまり【糸見】を連呼するリナ。

とっさにつかんだ口から出任せでだが・・・

それが功を奏する。

男「・・・・・・」

糸見の名を聞いた男は、首をかしげた。

男「ちよつと待ってろ」

男は携帯を取り出し、電話をかけた。

（リナ「え・・・まさか、直接【糸見】に電話してんの！？
何で銃を持ったおっさんが・・・

彼の番号知ってんのよ？」

男はしばらく携帯を耳にあて、相手が出るのを待っている。

（リナ「私・・・ヤバくね？」）

拉致事件に糸見が関わってる事など、リナは全く知らない。

リナ「・・・」

チラリと後ろの扉に視線をとばす。嘘がバレた時、すぐ逃げるために・・・。

・・・。

糸見の携帯が鳴っている。

しかし前日から蓄積された疲労と、極度の緊張は・・・

彼を目覚めさせる事は無かった。

・・・。

男は携帯電話を耳にあてながら、糸見が出るのを待っていたが・・・

男「っち！」

電話が通じることはなかった。逡巡した後、男はリナを睨み付ける。

男「ついてこい！」

（リナ「た・・・助かった・・・」）

リナの両手は、汗でびっしょりだった。

男はスタジオ右奥の小道具部屋へ向かい、リナはその後ろを付いていく。小道具部屋の近くに、また一人別の黒ずくめの男がパイプ椅子に座っていた。

（リナ「2人か・・・ 昨日は、3人プラス江浜氏だったけど・・・」）

男は小道具部屋の入り口の前で止まり、パイプイスに座る男をよぶ。

男「こいつは絶対中にいれるなよ」

と小声で伝えた後、リナの方を振り返った。

男「おい、A D。どんな小道具だ？」

リナ「え!？」

焦りながらもリナは

リナ「あー・・・ えっと、こういうヤツです!」

両手で長方形を作るしぐさをした。

男「何だ、それは?」

男は怪訝な表情を受ける。

リナ「あつと・・・スタ・・・スタンガン!

そう! スタンガンの小道具!

ここにあるって、糸見プロデューサーが・・・」

その場しのぎの嘘を突き通す・・・リナの心臓はバクバクで、今にも破裂しそうだ。

男「ふん。しばらく待っている」

そう言うとなんは小道具部屋をノックし、入っていく。

リナ「・・・」

リナはもう1人の男に、背後から肩を掴まれていた。

男「ふあ・・・」

男は眠そうにアクビをしている。

（リナ「絶対・・・私を、ただのADだと思ってる・・・」）

緊張で、心臓の鼓動が早くなっていくリナ。

（リナ「今なら男1人・・・ここしかない！！」）

千載一遇のチャンスとみたリナ。肩を掴まれたまま、自分のリュックを手前に持ってきた。

男「・・・」

男は特に気にとめる様子もない。

リナ「・・・」

リュックの中をあさくり、【それ】を取り出した。

リナ「あら・・・スタンガン、私、持ってたわ」

男「？」

リナは本物のスタンガンを右手に持っている。

男「・・・」

小道具だと、信じて疑わない男に・・・リナは顔だけ男に向け、一瞬笑顔を見せた。

スタンガンのスイッチを入れると、体ごと振り返り、男の腹部にスタンガン突き刺す。

瞬間

男「ぐ!!!」

リナ「きゃ!!」

2人に高圧電流が流れ、反射的にスタンガンのスイッチから指が離れた。2人ともその場に倒れ、全身がしびれた感覚に襲われる。

人に掴まれた状態で、その人に電流を流せば・・・掴まれた本人にも電流が流れる。

リナ「人は伝導体だった・・・初歩的なミスを・・・」

男に視線を移すと・・・錯乱気味で後ろの腰辺りに、手を回していた。

リナ「や、ヤバ・・・」

すぐにスタンガンのスイッチを入れ、思いっきり男の腹部に突き刺す。

ジジジジ・・・

男「ぐぐぐ・・・」

高圧電流により、全身の筋肉が極度に緊張し・・・大声を出すことすら出来ない。

男「く．．．ぐ．．．」

数秒後、男は気を失った。

リナ「はあ、はあ．．．」

倒れた男を確認し

リナ「まず一人．．．」

予断を許さない状況で、気合いを入れ直す。

リナ「次は．．．」

そして、小道具部屋の入り口に視線を移した。

．．．．．。

この時、小道具部屋にいた男は4人。慎吾、江浜、見張りの男、そして．．．

リナに言われた小道具を探す男。

江浜「．．．．．」

部屋の外の異常に気づいていたのは．．．江浜だけ。すかさず慎吾に言葉を送る。

（江浜「来たぞ．．．」）

慎吾「・・・」

慎吾は瞬きを1つした。

スタンガンの小道具を探していた男は、すぐにそれを見つける。それを持って、部屋の扉を開けた。

開けた瞬間、リナが目の前に立っていて・・・その右手にスタンガンが見える。

男「？」

思わずリナのスタンガンと、小道具のそれを見比べた。

リナ「・・・」

スタンガンの電源をオンにしたリナは・・・迷わず男に突き刺す。

男「ぐぐぐぐ・・・」

先ほどの男同様・・・大声を出せず、全身の筋肉が緊張を始めた。

男「・・・つく・・・つく・・・」

数秒後気を失い、その場で崩れ落ちる。

リナ「これでふた・・・」

男が倒れた直後・・・リナの開けた視界には、銃を向けている3人

目の男がいた。

銃口はリナの顔面を、寸分違わずとらえている。

リナ「!？」

男の右手は、今まさに引き金を引こうとしていた。

リナ「ちょ．．．」

江浜「?!！」

3人目の男が銃の引き金をひくよりも早く、江浜の大声が部屋に鳴り響く。と、同時に銃を構えていた男が、真横に吹っ飛んだ。

男「ぐおお!！」

男は壁に全身を強打。すかさず江浜は男に近寄り、男の胸に拳を軽く当てたあと

江浜「?!！」

かけ声と共に、拳の先から何かを男に流し込む。

男「ぐく．．．!？」

そして男は．．．気を失った。

リナ「．．．．．」

呆然とするリナ。銃を向けられ、その男が勝手に吹っ飛び、江浜が男にとどめをさした。

リナの脳は何が起こってるかを理解出来ない。

（リナ「江浜氏・・・敵・・・敵!?」）

【江浜「敵」とインプットしていた脳が、リナを正気に戻させる。

リナ「・・・」

スタンガンをONにすると、それを江浜に向け戦闘態勢をとった。

すかさず慎吾が声をかける。

慎吾「リナ先輩!! 江浜さんは味方です!!」

リナ「・・・」

リナの視線が・・・部屋の奥、椅子に縛られた慎吾を確認する。

慎吾「江浜さん・・・味方なんです!」

リナ「・・・」

江浜への警戒と、慎吾が生きている安堵が交錯した。

慎吾「江浜さんは、娘さんを誘拐されて仕方なく・・・」

それに昨日、リナ先輩を逃がしたのは・・・江浜さんなんです!」

リナ「・・・」

リナは前日の事を思い出す。確かに見えない力でエレベーターに閉じ込められ、慎吾の拉致事件に直接巻き込まれる事はなかった・・・。

江浜「・・・」

江浜は手のひらを見せ、戦闘意志がない事を示している。

リナ「・・・OK・・・」

ようやくリナはスタンガンのスイッチを切った。そして椅子に縛られている慎吾にかけより・・・無言で抱きしめた。

リナ「よかった・・・」

慎吾「あ・・・」

突然の抱擁・・・疲労を忘れ、動揺する慎吾。

（慎吾「いい匂い・・・」）

女性に抱きしめられた経験など1度もない慎吾は、頬を赤らめた。

慎吾「あ・・・あの・・・リナ先輩・・・」

少しのぼせ気味で声を出す。

慎吾「あの・・・おっぱいあたってますけど・・・？」

瞬間、リナが正気に戻った。

リナ「……………」

慎吾から離れ、じっと目を見つめる。

リナ「ふん……相変わらず空気よめないわね。

まあ、無事って事ね……」

そう言つとリナは、慎吾を縛っているロープを解き始めた。

江浜「リナ君……だね？ 彼から君が助けに来ると聞いていた。

私からもお礼を言わせてくれ。ありがとう……」

リナ「……………」

江浜が慎吾を追い詰めたシーンが頭から離れないリナ。

リナ「……………」

江浜にどんな態度で接すればいいかわからなかった。その様子を察した慎吾が再度声をかける。

慎吾「江浜さんがいなければ……僕はもっと危険でした」

リナは慎吾の目を見つめた。

リナ「わかった……」

そう言くと、リナと江浜は握手を交わす。

江浜「改めて・・・ありがとう」

江浜は部屋の外に倒れている男2人を部屋の中に入れる。男の胸に拳をあてると、先ほどのように拳から何かを流し込む動作をした。

江浜「これで3人とも・・・3時間は目が覚めない」

慎吾「・・・」

リナ「・・・」

江浜が何をしたのかわからないが・・・それが江浜の【霊能力】とやらなのだろうと、2人は理解する。

部屋にいる敵を小道具部屋に押し込み・・・部屋の外に出た3人は、一息ついた。

江浜「落ち着いている暇はない。まずはここを出なければ」

慎吾「でも、局内には見張りが何人もいるって・・・」

リナは不敵な笑みを浮かべる。

リナ「任せて。手はうつてある」

慎吾「え・・・？」

そう言うとりナは、先頭を切って歩き出した。

（第21話へ続く）

第20話 救出（後書き）

次回予告

リナが用意した逃走ルート・・・
それはかつて慎吾が見つけたルートだった。

しかし、またしてもトラブルが発生する。
江浜は機転をきかせて脱出を試みるが・・・？

次回 「 第21話 機転 」

第21話 機 転（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TVSへ訪れた2人は「徳川埋蔵金の謎を追え！」の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

慎吾の身を心配したリナは、何とか慎吾とコンタクトを取る事に成功。慎吾救出に向け、TV局へと向かった。

男2人をスタンガンで倒し、江浜の協力も得て、何とか慎吾を解放。TV局内から脱出するため、策を練ってあるという。

~~~~~

## 第21話 機 転

リナ「……………」

リナは黒ずくめの男のポケットから携帯を取り出すと、素早く操作し始めた。

江浜「何をしてる？」

リナ「いや、ちょっと……………」

言いながらも、男の携帯を操作し続ける。

江浜「持ち出しはしないほうがいい。GPSで追跡されるぞ」

リナ「わかってます……………」

しばらくして、携帯を男のポケットに戻した。  
ついさっきまで手を縛られていた慎吾は、初めて目の前の銅板を手にする。

慎吾「……………」

> i 3 4 0 4 2 — 2 4 3 0 <

それを見たリナが反応した。

リナ「それ！ それよ！ 私が見たの！！」

番組収録でチラッと見えた・・・対称図形と文字に間違いないと確信する。

慎吾「ええ。これはレプリカですが・・・

おそらく本物も、同じだと思います。

この図形に、何か意味があると思うのですが・・・」

江浜「今は、ここを脱出するのが先だ。糸見が来る前に・・・」

リナ「ちょ・・・糸見!？」

この時リナは、初めて慎吾の拉致に糸見が関わっていると知った。

リナ「あんた拉致したの、あの糸見プロデューサーなの!？」

慎吾「ええ・・・」

銃を向けられた事は黙っておく。

リナ「やつべー……。このスタジオ入る時、そいつの名前を使っただのよ。

まさか、【敵側】の人物だったとは・・・。

じゃあ私、めっちゃめっちゃバかったんだ・・・」

江浜「君は運がいい。だがそれも立派な能力。

君のおかげで我々は窮地を脱したのだから」

リナ「どこに【敵】がいるか・・・わからない世の中ね」

慎吾「……………」

慎吾は銅板をじっと見ている。

リナ「その銅板の裏も気になるけど……まずはここを出るわよ！」

江浜「手をつっていると言ってたが……？」

リナは元々、ＴＶの中の江浜は気に入っていた。だが……

リナ「……………」

江浜と黒ずくめの男らが慎吾を取り囲んだイメージが払拭できない。それ故、江浜の目を見るのに抵抗があった。

リナ「私は……顔われてないから先頭に行く。

2人は後ろからついてきて……」

男2人は無言で頷く。まずスタジオを出たのはリナ。長い廊下の左右を確認し……

リナ「大丈夫。出てきて」

慎吾と江浜が、警戒しながら廊下に出た。リナは迷路のように複雑な局内を、迷う事無く右へ左へと2人を誘導する。

リナ「ストップ！」

突如リナは2人を制止させ、柱に身を潜める。

江浜「見張りか？」

リナ「いえ・・・」

リナの視線の先には・・・大好きなイケメンアイドルグループ【山嵐】がいた。顔見知りの松浦の姿も見える。

ホントはすぐにでも握手を求めたいところだが、今は慎吾と江浜をTV局から出すのが先。

リナ「・・・」

声をかけたい衝動にかられながらも、【山嵐】がスタジオに入っていくのを見届けた。

慎吾「・・・」

そんなリナの様子を見ていた慎吾。リナが私欲を捨てて、男2人を逃がそうとしている。慎吾は自然と言葉が口に出た。

慎吾「リナ先輩・・・本当にありがとうございます」

リナは廊下の先を見つめながら応える。

リナ「それは、無事局を出てから言って」

慎吾「はい・・・」

しばらくして・・・3人は周りを警戒しつつ移動を始めた。

リナ「あのゲートを通れば、外に出られる・・・」

ゲートを見た瞬間

慎吾「あ！」

慎吾が声をあげた。

江浜「どうした？」

最後尾を歩く江浜が声をかける。

慎吾「僕・・・リュックごと糸見さんに取られたから・・・

入局許可証、持ってないんです・・・」

慎吾が手にしているのは、銅板のレプリカだけだった。

リナ「しまった・・・そこまで想定してなかった・・・」

TV局内各所にゲートが設けられていて、そこを通るには入局許可証が必要である。許可証を持たずにゲートを通ると、警告音が鳴り、近くで待機している警備員がかけよってくるシステムだ。

入局許可証にはICチップが埋め込まれていて、それさえ持っていれば普通にゲートを通り抜けられるのだが・・・

慎吾「どうしよう・・・」

リナ「ゲートにかかったら、警備員だけでなく・・・

黒ずくめの男までやってくる可能性あるわね・・・

うーん・・・」

江浜が胸の内ポケットをまさぐり、自身の入局許可証を取り出した。

江浜「慎吾君、君はこれを」

それを慎吾に渡す。

慎吾「え？ でも、江浜さんは・・・？」

江浜「まずは2人でゲートを通るんだ。大丈夫、私もすぐ行くから」

そう言うのと江浜はリナと慎吾を先に行かせた。

2人がゲートを通るのを確認した江浜は、10数秒遅れてゲートに向かう。

リリリリリリリリ・・・

江浜がゲートを通った瞬間、警告音が派手に鳴り響いた。

すぐ横にいた警備員がよってくる。まずは警告音をSTOPさせ、それを鳴らした本人に尋問をしようとした。

警備員「あ・・・江浜さん！ どうしました？」

江浜は携帯電話を耳にあてながら、言葉を返す。

江浜「緊急事態だ。ある政治家に悪霊が取り憑いている。

早急に私が行かねばならない！

入局許可証は、マネージャが持っていて・・・」

警備の規定では・・・入局許可証を持たない者は一度事務まで連れて行き、許可証を発行してから通過させる事になっている。

江浜「名前は言えないが、大物政治家だ。一刻を争う！

済まないが早急に向かいたいのだが！」

江浜はイライラしているそぶりを見せた。警備員は逡巡した後、江浜に口を開く。

警備員「わかりました。あなたの活躍は誰もが知っています。

私の責任を持ってゲート通過を認めます」

敬礼のポーズをして江浜を通した。

警備員「是非、その政治家の方を救ってください！」

江浜は軽く笑い

江浜「ああ、任せろ」

と、一言だけ口にしてゲートを通過。10m先にいるリナ達と合流した。

慎吾「さすがです・・・」

江浜「たいしたことはしてないさ。先を急ごう」

リナ「ここです」

リナが先頭に立ち誘導する。たどり着いた先は・・・エレベーター。

江浜「ここは・・・関係者専用の・・・」

慎吾「あ！このエレベーター・・・」

松浦さんのバッグ盗んだ犯人が利用した・・・」

リナ「ご名答・・・」

3日前、松浦のバッグを盗んだ犯人は・・・この関係者専用のエレベーターを利用して、地下駐車場から逃げた。リナはそれと同じルートをとっている。

慎吾「模倣犯ですね！さすがリナ先輩！」

3人はエレベーターに乗り込んだ。

リナ「ちょっとあんた・・・模倣犯はないでしょ！」

安全にあんたを逃がそうと考えたルートなのよ！」

ちよつとイラッときたリナが声を荒げる。

慎吾「あ、そんなつもりで言ったんじゃない・・・すいません」

慎吾は頭をかきながらリナに頭を下げた。

エレベーターを降りた3人は地下駐車場に出る。リナがスタスタと歩いた先に・・・レンタカーがあった。ここに来る前、新幹線の中でパソコンから車をレンタルする手続きも済ませていたリナ。

TV局の事務局で入局許可証をもらった後、レンタカー店に出向き車を借りる。そして地下駐車場に車を止めておいたのだ。

慎吾「わ・・・完璧に模倣・・・ あ、いや・・・

完璧な作戦ですね・・・」

リナは慎吾を見て真剣な眼差しをする。

リナ「悪いけどさ・・・

あんた、TV局の外に出るまでトランクに入ってて

出入り口の警備カメラ、写らないようにね」

慎吾「了解です」

文句1つ言わず、即答した。

リナ「・・・」

江浜に視線を移すリナ。

リナ「江浜さんは・・・ 顔されるとマズいのよね。どうしよう・・・」

江浜「いや、どうせさっきの警備員に顔を見られている。  
差し支えなければ私が運転しよう。

出口の警備員も、私を見ればすぐ通すはずだ」

リナ「・・・・・・」

逡巡したが・・・

リナ「わかりました」

リナは江浜に車のキーを渡した。キーを受け取った江浜は、運転席に座る。

慎吾はトランクに入れられ、リナは助手席に座った。

江浜は勢いよく車を出す・・・車は出口の警備員に止められる。

江浜「急な仕事だね。助手と共に向かうところだ」

その警備員に、笑顔を見せた。

警備員「そうですか。活躍、期待しています」

警備員はすぐに遮断バーを上げ、車を通す。

こうして3人は・・・

黒ずくめの男に見つかる事無く、無事TV局の外へと脱出した。

・・・。

江浜「ああ。そうだ・・・」

彼は先月から、暴力団の資金援助を受けている。

おかげで、例の埋蔵金発掘を再開したというわけさ」

運転しながら江浜はリナの質問に応えていた。

リナ「まさか、あの糸見プロデューサーが・・・ 慎吾を拉致ったなんて。」

あの黒ずくめの男に【糸見】の着信があつたわけだわ。

でもどうして慎吾を・・・？」

江浜はリナを一瞥する。そして静かに首を2度横に振った。

江浜「糸見の後ろで・・・さらに糸をひいてる人物がいるのも確か」

リナ「なんだか複雑・・・埋蔵金みたいな莫大なお金が絡むと・・・」

怪しい人が出てきたり・・・

人が変わったりするものなのね・・・」

リナは小さな声でつぶやいた。

・・・。

TV局から1km近く離れたコンビニ・・・江浜はその駐車場で車を止めた。

トランクをあけ、慎吾に手を差し出す。

江浜「ありがとう。あの窮地を脱せたのは君のおかげだ」

慎吾の右手を握り、トランクから慎吾の体を持ち上げた。

慎吾「いえ・・・どうも・・・」

慎吾を外に出した江浜、次はリナに握手を求める。

江浜「何よりも君がいなければ・・・」

今頃どうなっていたか・・・感謝している」

リナ「・・・」

リナは目線を合わさず握手に応じた。

江浜「君たちとはここでお別れだ。私は娘を救出に向かう」

慎吾が声をかける。

慎吾「ど、どうやって・・・娘さんを・・・？」

江浜「糸見が娘の声を聞かせてくれた時・・・」

彼の携帯電話に表示された番号を覚えた。

幸い携帯ではなく、【03】から始まる固定電話だったからね」

慎吾「なるほど。電話番号を調べて・・・」

その電話のある場所突き止めるわけですね」

そう言う慎吾はリナの方を向いた。

慎吾「リナ先輩、ここまでありがとうございます！」

リナに向け、深くお辞儀する。

慎吾「僕は江浜さんにも助けられました。だから今度は僕が・・・  
江浜さんの娘さんを救出する、その手助けをしたいと思います」

江浜「いや、これ以上君たちに迷惑をかけるわけにはいかない。私1人で行く」

慎吾「でも、江浜さん・・・」

リナ「・・・」

男2人のやりとりをよそに、リナは自分のパソコンを取り出していた。

すぐに起動すると、とあるページを検索し始める。

リナ「江浜さん。その番号を言ってください」

江浜「え？」

リナ「03の次、お願いします」

面食らった表情の江浜。リナの真剣な眼差しに口を開いた。

江浜「えつと・・・03-12\*\*・・・」

リナは高速でキーボード上でその番号を入力する。

リナ「娘さんのいるところ、わかりましたよ」

キーボード操作から約1分の出来事だった。

慎吾「え!？」

リナはパソコンの画面を見せ、映し出された地図上・・・その1箇所を指さす。

リナ「NTT東日本のページから情報を得ました。

ここは関東エリアの固定電話を全て扱っています。

そのDATABASEに侵入し、江浜さんが見た番号を検索。

その電話がある所、つまり娘さんがいる所は・・・四谷です」

江浜「・・・」

しばし呆然とする江浜。

江浜「き・・・君はいつたい・・・？」

慎吾「リナ先輩は、すごい能力を持ってるんです。早速向かいましょう！」

リナ先輩は先にうちへ帰って・・・」

リナ「ふん。私も行くわよ」

慎吾「え？」

リナ「私、家族を誘拐して脅迫するって・・・絶対に許せないの！何かを思い出しながら・・・リナは語っていた。

リナ「悪いけど・・・私も行かせてもらうわ」

江浜「ダメだ。相手は銃を持った暴力団だぞ。危険すぎる」

リナは江浜の目を睨み付ける。

リナ「私は・・・黒ずくめの男の携帯に入っていた番号を全て覚えています。

糸見の番号はもちろん・・・

あの中に今回の拉致事件の首謀者の番号もあるはず。  
私がいれば絶対に役にたちます」

江浜も慎吾も・・・リナの迫力に気圧けおされた。

リナ「私が1分で娘さんの居所を見つけたんです。

助けるなら早い方がいいし、私なら必ず役に立ちます！」

慎吾はずっとリナを巻き込みたくないと思っていたが・・・

慎吾「・・・」

バッグ盗難事件の犯人を即突きとめただけでなく、スタジオに閉じ込められた男2人を手際よく脱出させた。

（慎吾「リナ先輩なら・・・」）

これらの実績を考えれば、リナはかなりの戦力になると思い始める。

慎吾「江浜さん。1人より2人。2人より3人の方が・・・

娘さんを助け出す確率が高くなると思います。

「ここは僕たちも・・・一緒に連れて行くべきです！」

江浜はしばらく悩んだ表情を見せた。

江浜「・・・」

電話番号を聞いてから、わずか1分で娘の居所を割り出した。

（江浜「その能力は、非常にかつている・・・だが・・・」）

迷う時間ももつたない。

江浜「わかった・・・。ただ危険と思ったら、とにかく逃げるんだ。

相手は銃を持っている。絶対に無茶はするな！」

とりあえずだが、この2人を同行させる事を決めた。

リナ「わかりました」

慎吾「はい！」

3人は再び車に乗り込む。

江浜はそのまま運転席に、慎吾とリナは後部座席に座った。

江浜「四谷なら・・・ここからすぐだ」

車はリナが指定した住所に向けて走り出す。

慎吾「・・・」

銅板を手になっている慎吾。

その銅板の中から・・・微弱な光が漏れていた。

定期的に点滅しているその光は・・・電気信号を発信している。

慎吾「・・・」

この銅板に追跡装置がついている・・・

それに気づくのは、もう少し後だった。

（第22話へ続く）

## 第21話 機 転（後書き）

### 次回予告

江浜の娘が監禁されている事務所に到着した一行。

慎吾が救出作戦をたてる。顔のわれている慎吾と江浜は待機。  
またしてもリナが救出に向かうのだが・・・？

### 次回 「 第22話 作 戦 」

第22話 作 戦（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 F i r s t s e a s o n

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TVSへ訪れた2人は「徳川埋蔵金の謎を追え！」の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

何とか慎吾とコンタクトを取る事に成功したリナは、TV局に侵入し、慎吾を救出。江浜は自身の娘を助けるべく、行動を別にしようとするが・・・

結局、慎吾とリナもついてくる事になった。

~~~~~

第22話 作 戦

江浜「・・・ゴホツ・・・」

後部座席、リナの横に座っている慎吾。咳払いをした運転手の江浜に・・・

慎吾「江浜さん、1つ聞いていいですか？」

声をかけた。

江浜「何かな？」

慎吾「江浜さんの・・・」

あの、かけ声と共に手から何かを流すみたいなヤツ・・・

あれって【霊能力】の1つですか？」

江浜は軽く笑う。

江浜「ふつ。あれは気功だよ、霊能力なんかじゃない。

修行をすれば、誰だつてある程度は扱えるようになる」

慎吾「気功・・・？　って事は江浜さん・・・修行したって事ですよね？」

江浜「もちろん。私の家系は代々・・・

悪霊などのトラブルから人を救う仕事をしている。

仕事を遂行するには、心・技・体・・・全て必要だ。
修行も仕事の一環さ」

慎吾「代々この仕事を？」

江浜「ああ。世間は我々の事を、霊媒師だとか陰陽師などと呼んだりする。

今はスピリチュアル・カウンセラーだね。

時代によって呼び方は様々・・・」

リナ「・・・・・・・・・・」

リナも江浜の話を聞いてはいるが・・・【霊】の存在や【霊能力】とやらには、否定的な見解を持っていた。

もつとも・・・

すぐにそれを認める事が起きるのだが・・・。

江浜「強靱な肉体に強靱な魂は宿る。私も若い頃はかなり鍛えたもんさ」

慎吾「では・・・直接僕の頭に話しかけてきたのは・・・？

あれも気功の一種・・・？」

江浜は軽く首を横に振った。

江浜「いや。あれは私の魂で語りかけたんだ。

そうだな・・・君らのいう幽体離脱に近い形かな。

【霊能力】という言い方はあまり好きではないが・・・

まあ、そんなところだ」

慎吾「魂・・・ですか・・・」

江浜「・・・」

ふと、江浜は慎吾を見つめた。

江浜「君は霊の姿を見たり、声を聞くことが出来るだろ？」

慎吾「え？ あ・・・はい・・・」

見抜かれている。

慎吾「さすがです・・・ね・・・」

江浜「ああ、こういう仕事してるからね。

能力のある人間はすぐにわかるものさ。

だから君は・・・私の声を、すんなり聞き取る事が出来たんだ」

慎吾「・・・そうでしたか・・・。すみません。

頭の中が処理しきれないほど・・・

内容が多すぎて・・・」

江浜「そうだな・・・時間がある時にまた色々教えてあげよう」

そう言うと江浜は車を路肩につける。

慎吾「着いたんですか・・・？」

江浜「ああ・・・」

車の右手・・・江浜は道路の向こう側にある建物を見つめた。

リナはパソコンをいじりながら確認する。

リナ「間違いない・・・あの建物です。

江浜さんが見た・・・電話番号の発信源は」

3人の視線の先には・・・

2階建ての事務所があつた。外からは全く様子がわからない。

リナ「どうやって娘さんを・・・」

江浜は人差し指を一本たてて、リナの前にさしだした。

リナ「？」

静かにとりかかっている。すると江浜は建物を睨み付け、集中力を高める。

江浜「この程度の距離なら・・・ 娘と直接会話できるんだ」

（慎吾「さっきの・・・ 魂で語るってヤツ・・・？」）

江浜は目を閉じ、集中力をさらに高めた。

慎吾「・・・」

リナ「・・・」

慎吾とリナはそれを静かに見守る。

（江浜「あんず・・・ 聞こえるか？」）

・・・。

江浜あんず。

スピリチュアル・カウンセラー江浜の娘は、事務所の2階にいた。

右手を手錠につなぐれ、手錠の反対側は部屋の隅を縦に通る水道管につながれている。

2日前。

帰宅途中、とある男に誘拐されたあんず。

あんず「……………」

食事や睡眠は与えられたものの、精神疲労による衰弱の色は隠せない。

部屋の中にいる見張りは2人。1人は携帯をいじり、もう1人は小さなTVを見ながら笑っている。

（「あんず……聞こえるか？」）

ふとあんずは脳に直接語りかける声をキャッチした。男2人を一瞥した後、静かに目を閉じ集中する。

（あんず「お父さん……」）

誘拐から2日……あんずは見張りに気づかれぬよう、会話を始めた。

（江浜「居場所は突き止めた。今、事務所の外だ。道路の反対側にいる。」

お前が2階にいるのはわかるが……

くわしい状況を教えてくれ」）

（あんず「2階の奥の部屋。男2人が見張ってる……」）

江浜「娘は2階の奥。見張り役は2人」

江浜は、慎吾とリナに情報を伝える。

慎吾「1階には何人いるか聞いてください」

（江浜「1階にいる人間の数はわかるか？」）

（あんず「わからない・・・でも3人以上はいると思う。

時々、声が聞こえるの」）

江浜「1階には3人以上で、くわしい数はわからないそうだ」

慎吾「ここ最近の状況で、気づいた事を聞いてください」

積極的に江浜に声をかける慎吾。リナが横から口を出す。

リナ「ちよつとあんた・・・何であんたが仕切ってんのよ？」

慎吾は真剣な表情で応えた。

慎吾「誘拐された人物を連れ戻すケースは基本3つ。

1つは身代金。

もう1つは、相手側の要求する別の人質との交換とか。
いわゆる、人質に替わるものの取引です」

リナ「今回の場合、それはありえないわね・・・」

慎吾「だとすると3つめ。中に侵入して助ける・・・です」

リナ「・・・簡単に出来るとは思えないわ・・・」

慎吾「強行突破は・・・武器に乏しいので却下。

だとしたら・・・」

電気技師とかを装って、中に侵入するのが妥当です・・・」

リナは怪訝な顔をして慎吾に聞く。

リナ「なんで、あんたそういうの知ってるの？」

慎吾「アガサクリスティとか、イアン・フレミングとかが好きで・・・」

リナ「アガサクリスティは聞いた事あるけど・・・」

誰？ イアン何とかって？」

慎吾「007の作者ですよ。世界一、有名なスパイ小説の」

リナ「・・・」

若干、リナの表情が曇った。

慎吾「それに、吾郎先生・・・高校の時の担任が色々教えてくれて・・・」

数学の先生ですが、そういうのくわしいんです」

リナ「・・・あんたが数学できない理由・・・
わかった気がするわ・・・」

リナのあきれ顔をよそに、慎吾は真剣に江浜を通じて中の情報を探ろうとする。

慎吾「トイレや食事など、どうするかも聞いてください」

江浜は慎吾の指示通り・・・娘から中の情報を聞き出していった。

・・・。。

江浜「状況はこうだ。

娘は事務所の2階奥の部屋にいて、手錠でつながれている。

部屋の見張りは2人。

1階にの人数は定かではないが、3人以上はいる」

運転席の江浜は、2人に説明を始めた。

リナ「・・・」

半信半疑のリナ。

江浜「トイレに行くときは、手錠をはずし・・・見張りと1階のトイレへ。」

食事は基本出前だそうだ。

20分ほど前にデリバリーピザを頼んでいる」

慎吾「なるほど・・・トイレの場所は？」

江浜「・・・ 1階の玄関から見ると、右奥だそうだ」

慎吾「わかりました・・・」

慎吾は軽くため息をついて目を閉じ・・・車の天井に顔を向け、何かを考える。

（慎吾「吾郎先生なら・・・？ ジェームズボンドなら・・・？」）

かつと慎吾は目を見開いた。

慎吾「作戦があります・・・」

・・・。

午後1時過ぎ。

楽屋のソファで横になっていた糸見が目を覚ました。

時間を確認しながら、小さなあくびをする。

（糸見「少しばかり、寝過ぎたか・・・」）

糸見は携帯電話を手にし、第5スタジオの見張りの男に電話をかけた。

トゥルルル・・・ トゥルルル・・・ トゥルルル・・・

糸見「？」

第5スタジオの小道具部屋では・・・

江浜にのされた見張り役の男3人が、気を失ったままだ。

糸見「・・・」

誰も携帯を取らない事を不審に思い、すぐに楽屋を後にして第5スタジオへ向かった。

・・・。

リナ「・・・」

江浜の娘あんずが監禁されている事務所の前を歩いていたのは・・・
リナ。慎吾のたてた作戦を実行するためだ。

慎吾「顔、われてないの・・・リナ先輩だけですから・・・」

男2人が裏方に回るのは、解せないものがあるが・・・

（リナ「確かに私が動く方が・・・

江浜氏の娘を助ける確率は高くなる」）

自分が先陣を切る事には納得していた。

リナ「ふん・・・上等よ！」

ただ1つ……。この作戦に不安な点がある。

（リナ「本当に……。江浜氏は、娘と会話したのかしら……。」）

江浜が娘と会話した事に対しては、懐疑的だった。

リナ「……。…」

でも今はそれを信じて動くしか道はないと判断し……。事務所の前で立ち止まる。

しばらくするとデリバリーピザの配達員がバイクでやってきた。

バイクは事務所の手前の道路で止まり、どう見てもバイトであろう若い男がピザを取り出そうとする。

慎吾「来ましたね……」

江浜「ああ……」

2人は、事務所の横にあるビルの物陰に隠れていた。

慎吾「リナ先輩……。頼みます……」

ピザをバイクの後ろから降ろした配達員にリナは声をかける。

リナ「ちょっとー。ピザ遅いじゃない！」

さえない顔をした配達員の男は、いきなり声をかけられ、驚いた表情を見せた。

配達員「え！？ あ、ああ・・・ すいません・・・。

で、でも・・・ 時間通りですよ・・・？」

弱気に応える配達員を見て、リナは強気になる。

リナ「世の中タイムイズマネー！ 代金、いくらだっけ？」

配達員「えっと・・・2630円です」

リナ「はい、3000円！ おつり370円！早く！！

タイムイズマネー！！」

配達員はリナの迫力におされて、あわてておつりを取り出した。

リナ「はい、お疲れ！ 次はもう少し早く配達してね！！」

配達員の背中を力強く叩くと・・・そのまま男は、リナから逃げるように去っていく。

リナ「・・・ ふん。まずは1つクリア・・・」

ピザを手にしたりリナ。事務所の方へ向きを変えると・・・入り口へ向けて歩いて行った。

リナ「・・・・・・」

銃を持っているであろう男が数人いる事務所に近づくにつれ、心臓の動悸が明らかに早くなっていく。

ここに来て少し後悔の念を抱き始めたが・・・

（リナ「ええい！ 迷いは禁物！ 絶対助けてやる！！」）

リナは事務所の玄関に手をそえた。深く深呼吸をして・・・

リナ「・・・・・・・・」

扉を開き、事務所の中へ入っていく。

その頃・・・

糸見は第5スタジオの扉のドアに手をかけていた。

（第23話へ続く）

第22話 作 戦（後書き）

次回予告

ピザ配達員を装って、事務所の中に侵入したりナ。監禁されていたあんずと合流する事に成功する。

その頃糸見は、第5スタジオに入り、江浜と慎吾が脱出した事を知った。

慌てて、あんずを監禁してる事務所に連絡する。

そしてリナとあんずは・・・窮地に立たされた。

次回 「 第23話 想定外 」

第23話 想定外（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 F i r s t s e a s o n

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TVSへ訪れた2人は「徳川埋蔵金の謎を追え！」の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

リナはTV局に侵入し、慎吾を救出。江浜は自身の娘を助けるべく、行動を別にしようとするが、慎吾とリナもついてくる。

江浜の娘・あんずが監禁された事務所に辿り着いた3人。

慎吾の立てた作戦は・・・リナをそこへ送り込むことだった。

第23話 想定外

~~~~~

## 第23話 想定外

リナは事務所の中に堂々と入っていった。右手には、先ほど配達員から受け取ったピザを持っている。

リナ「……………」

中に入ると、目の前には真っ直ぐな廊下。左右に2部屋ずつあるのが見えた。

部屋の配置を記憶しながら、リナは元気な声を出す。

リナ「ちわーっす！！ ピザーリです！

マルゲリータ、お持ちしましたー！！」

待つこと数秒……左奥の部屋から、いかつい黒ずくめの男が出てきた。

（リナ「絶対この暴力団、みんな黒ずくめよね……

まあ、敵がわかりやすくていいけど……」）

……………。

リナが事務所の中に入るのを確認した慎吾は、江浜に合図を出す。

慎吾「今です……………」

江浜「了解」

江浜は神経を集中して、再び娘に声を送る。

（江浜「いいか、あんず。」

トイレに行きたいと、見張り役の男に言うんだ。

その部屋を出たら、合図をくれ」）

（あんず「わかった・・・」）

深呼吸したあんずは、見張りの男1人に声をかけた。

あんず「あの・・・ おトイレ・・・ お願いします・・・」

恥ずかしそうに懇願する。携帯をいじっていた男がめんどくさそうにため息をつき、手錠のカギをポケットから取り出した。

あんず「・・・」

・・・。

リナ「3000円です!」

男「高くないか?」

リナ「原材料の高騰ってヤツでして。ピザ業界も不況なんですよ!」

男は怪訝な顔でリナを見ながら・・・財布から取り出した3000円をリナに渡す。

男「ところでお前・・・ さつきから気になっていたんだが・・・」

リナ「・・・・・・・・・・」

ゴクリと唾を飲み込んだリナ。

男「なんでお前、私服なんだ？ いつもの制服はどうした？」

リナ「あ、えーっと。日曜日はノー制服DAYなんですよー」

口から出任せを言うリナ。

リナ「仕事をきっちりすれば文句ないでしょー！」

男「ま、それもそうだな」

ピザを受け取った男は、部屋に戻ろうとした。

リナ「あ、ちょっとー！！」

男は振り返る。

男「なんだ？ ドリンクサービスでもあったか？」

リナ「いえ・・・すいませんけど・・・」

トイレ、貸してもらえます？」

男は玄関の外に向かって指さした。

男「外出て右に30m歩けば、コンビニがある。そこ行きな」

（リナ「ちょっと・・・トイレぐらい貸しなさいよ!」）

このままでは、作戦が頓挫してしまう。

リナ「あーん! 漏れちゃいそうなの! お願い! 1分だけ!」

必死に「らしからぬ」セリフを言った。

（リナ「あとで慎吾・・・どついてやる!」）

男は頭をかきながら、

男「っち!」

廊下の奥を親指で指さす。

男「廊下の右奥だ。さっさと済ませて帰れよ」

リナ「はい!」

リナはさっと廊下の右奥に消えていった。

江浜の情報通り、1階右奥にトイレがある。

（リナ「・・・。ホントにあの親子、会話してた・・・?」）

霊能力に懐疑的だったリナだが、少しずつ・・・全否定から、半信

半疑になりつつあった。

リナ「……………」

トイレの扉を開け、中に入ると……

（リナ「誰も……いないわね……」）

トイレの中が無人である事を確認する。男性用の白長の縦置き便器が3つ。奥に個室が3つ見えた。

リナ「……………」

そしてさらに奥には……

（リナ「よかった。あったわ……」）

リナはこの作戦に必要な【ある物】を確認し、一番奥の個室に入り込む。カギをかけ、心臓の鼓動をおさえつつ……その時を待った。

……………。

糸見「……………」

第5スタジオに到着した糸見は、違和感を覚えた。

入り口に見張りの男がいない。あわてて小道具部屋に走っていく。部屋の前にはいるはずの見張りもいない……。

糸見「・・・ な、何が・・・」

小道具部屋に入ると愕然とした。3人の見張り全てが気絶し、横になっている。

糸見「あいつら・・・」

糸見はすぐに携帯電話を取りだし、電話をかけた。

・・・。。。

リナ「・・・。。。」

個室の中で待機するリナ。

ガチャッ

トイレの扉を開く音が聞こえた。

（リナ「きた・・・」）

足音が個室へと向かっていき、リナの隣の個室へと入っていく。そして・・・

トントン

リナの個室に【合図】が伝えられた。

あんずはトイレに向かう途中、父から【声】の指示を受けている。  
指示された通り、奥から2番目の個室へ入り・・・隣の個室へ合図  
をしたのだ。

（リナ「さて・・・これから勝負！　行くわよ！！」）

ボタン！！

リナは思い切って個室の扉を開けた。

リナ「！？」

瞬間ギョツとする。隣の個室の前に、黒ずくめの男が立っていて・  
・目が合った。

リナ「あ・・・トイレ借りてます。許可はとってます・・・」

黒ずくめの男はサングラスの奥からリナを凝視する。

男「・・・・・・・・」

言葉を発することはない。

（リナ「ちょっと・・・なんで、男がいるのよ！」）

予定では、見張りはトイレの中までは来ないはずだった。

リナ「・・・・・・・・」

出鼻をくじかれたリナ。とりあえず男の前を通り・・・入り口近く

の手洗い場で、水を出す。

（リナ「女性のいる個室の前に立つなんて・・・最低な男ね・・・」

手を洗いながら、リナは次の一手を考えた。

リナ「ちよつとー・・・！」

見張りの男に声をかけると・・・男は無言でリナの方に顔を向ける。

リナ「ちよつと、この手え乾かすヤツ・・・

温風器？ 変な音すんだけど？」

男「・・・」

男はリナを無視して、個室に視線を戻す。しかしリナも負けない。

リナ「ちよつとあんた・・・

この機械、何とかしてくんない！？

絶対、壊れてるって！」

男はリナの方を向くことなく、完全無視を続けている。

（リナ「・・・あの野郎・・・」

バン！！ ガコン！！！！ バンバン！！

突然リナは、温風器を力いっぱいたたき始めた。

リナ「絶対この温風器、おかしいって・・・」

ガシャン！ バキッ！！

力任せに温風器を叩くリナを見て、さすがに男も黙っていない。リナの所に近寄ってきた。

男「おい、こら！ ここをどこだと思って・・・」

男がリナの肩に手をかけようとした瞬間、リナはそれをかわし・・・すでに電源をONにしたスタンガンを、男の腹部に容赦無しに押しつけた。

男「ぐ！！？ ぐぐ・・・ ぐぐぐ・・・」

男は全身の筋肉が緊張して、大きな声を出せない。しばらくして男は・・・気絶した。

・・・。。。

糸見「江浜の娘は！？」

糸見は大きな声で、事務所にいる男に声をかけた。

男「あー・・・1分ほど前、トイレに行きましたが・・・」

糸見「急いで確保しろ！！ 江浜が近くにいるかもしれん！

必要なら、そこにいる連中全てで対応しろ!!」

携帯に向かって、大声で怒鳴る。

男「え？ あ！ はい！ すぐに!!」

携帯を切った糸見は・・・

糸見「絶対、許さん・・・」

すぐに地下駐車場へと向かった。

・・・。。。

カチャリ。

トイレの入り口のドアに鍵をかけたリナ。奥から2番目の個室に向かい、静かにノックした。個室からおそるおそる出てきた女性を見て・・・

リナ「・・・。。。。」

ハッとする。

胸元まで伸びた黒くサラサラのストレートヘア。大きな黒い瞳に、小さな唇。化粧はしてないのに、自然と美しいオーラがにじみ出ている。

清楚な雰囲気とは対照的に、白いブラウスと赤いスカートは汚れが

目立つ。2日間の監禁生活でのつらさが伝わってきた。

固まっていたリナが我に戻る。

（リナ「いけね・・・女に見とれるなんて・・・

さすがイケメン江浜氏の娘ね」）

あんずを見つめた後・・・

リナ「私、リナ。ここを脱出するわよ」

目の前の美少女に、手を差し出した。

あんず「は、はい・・・」

あんずはか細い声で、リナの右手を握る。

リナはその小刻みに震える冷たい手を握り・・・トイレの一番奥に連れて行った。

リナ「さ・・・この窓から逃げるわよ」

自分の頭より、若干高い位置にある窓を開ける。

リナ「な・・・」

瞬間、リナの目が大きく見開いた。

リナ「て・・・鉄格子!？」

視線の先、窓のすぐ外には・・・わずか10cm間隔の鉄格子が縦

に並んでいる。両手で鉄格子を握り、前後に力強く動かそうとするがびくともしない。

その時・・・

ガチャガチャ！！

トイレの扉を何者かが、ぶっきらぼうに開けようとしていた。

男「おい、こら！！ カギかけやがつて！！ ここを開ける！！」

ドアの向こうから大声で叫ぶ男の声が聞こえてくる。

リナ「・・・ や・・・ ヤバい・・・」

あんず「・・・・・・」

2人の少女は・・・

トイレの奥で、窮地に立たされた。

（第24話へ続く）

## 第23話 想定外（後書き）

### 次回予告

トイレの窓から逃げる作戦は失敗。  
そしてトイレの扉の向こうには男が・・・。

絶体絶命の中、リナは銃を持った男らに応戦する。  
リナ達のピンチを察した江浜と慎吾。トイレの窓の反対側に駆けつけるが・・・。

江浜の気功技を持つてしても、壁を打ち破る事は出来ない。  
窮地の中、脱出するために・・・！？

次回 「 第24話 銃 撃 」

## 第24話 銃 撃（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

### 「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TVSへ訪れた2人は「徳川埋蔵金の謎を追え！」の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

リナはTV局に侵入し、慎吾を救出。江浜は自身の娘を助けるべく、行動を別にしようとするが、慎吾とリナもついてくる。

江浜の娘・あんずが監禁された事務所に辿り着いた3人。

慎吾の立てた作戦で、リナが事務所に侵入。あんずを連れ、トイレの窓から脱出を試みようとするが・・・その窓には鉄格子がかかっていた。

第24話 銃 撃

## 第24話 銃 撃

慎吾「ちよつと遅いですね・・・」

江浜「ああ・・・」

事務所の隣のビルで身を隠している慎吾と江浜。リナとあんずの2人が出てくるのを待っていた。

慎吾の作戦はこうだ。

あんずの監禁されている事務所にデリバリーされるピザを、リナが横取りする。そして配達員を装ったリナが事務所に入り、トイレを借りる。

江浜は娘とコンタクトを取り、トイレに向かわせる。

小さな建物のトイレは、その構造上、外へ通じる窓がある。トイレでリナとあんずが合流し、トイレの窓から外へ脱出する。

だが・・・

リナ「・・・ や・・・ ヤバイ・・・」

第1の誤算は・・・あんずの見張り役の男がトイレの中、個室の前にまで来てしまった事。これは、リナがその男をスタンガンで撃退

する事で突破。

第2の誤算は、逃げる予定の窓に鉄格子がかかっていた事。両手で鉄格子を前後に揺さぶるも微動だにしない。

そしてリナ達が気づいていない第3の誤算は・・・糸見から事務所へ連絡が入ってしまった事。連絡を受けた黒ずくめの男達は、トイレに向かっていた。

リナ「ど・・・どうする・・・？」

あんずは個室の前で足をガクガクし、ただ立ち尽くしている。それを横目で見たリナ。

リナ「・・・アテにならないってわけね・・・」

リナは一直線にトイレの出入り口に向かう。スタンガンのスイッチをONにすると、迷わずドアノブに押しつけた。

男「ぐぁ!？」

反対側からトイレのドアを開けようとした男が、ドアノブを通して感電する。

ドアノブを必死に離そうとするが・・・筋肉が硬直して意志とは反対にドアノブを強く握ってしまう。

男「ぐぐぐぐ・・・」

数秒後、男は失神した。この日リナが倒した4人目の男である。

しかしすぐに・・・事務所の奥から、糸見の連絡を受けた数名の男達がかけよってくる。

リナ「ちょっと、あんた!!」

ドアの向こうの足音を確認したりナは、大きな声であんずに声をかけた。

あんず「は・・・はい・・・」

小さな声で応えるあんず。だがその両手足は、恐怖で小刻みに震えている。

リナ「そこに掃除用具があるでしょ！」

洗浄剤とかあるはずだから取って！ 渡して！」

言いながらリナは、目の前にあったバケツを手にした。それを持って、手洗い場まで走っていき・・・蛇口をひねると、バケツに水を入れる。

あんず「あ・・・」

リナ「早く!! マジやばい状況だから!!」

あんず「は、はい・・・」

リナにせかされたあんず。奥にあるトイレの清掃用具入れから、ボ

トルに入った洗剤剤を見つけた。すぐにリナの元へ走っていき、それを渡す。

リナ「……………」

ボトルを渡されたリナはラベルを確認した。

リナ「ナトリウム……よし!!」

容器のキャップを開けると、リナはバケツの水に洗剤剤を混ぜる。手早く作業しながらも、あんに声をかけた。

リナ「あなたお父さんと話せるんですよ！」

早く【外に出られない!】って伝えて!!

【すぐに助けにこい】って!!

あんに「あ……は、はい」

小さな声で返事をする、あんに目は閉じ……意識を集中する。

(あんに「お父さん……お父さん!!」)

……。

娘の声を受け取った江浜はすぐに言葉を返す。

(江浜「どうした!?!」)

（あんず「窓から出られない・・・鉄格子があつて・・・」）

（江浜「わかった！ すぐに行く！」）

慎吾「どうかしました!？」

江浜の様子に気づいた慎吾が声をかける。

江浜「トラブルだ・・・事務所の裏に行くぞ！

見つからないよう気をつける！」

慎吾「わ、わかりました!!」

・・・。

リナは洗剤を混ぜたバケツの水を、入り口の扉の下から反対側へとぶちまける。

リナ「・・・」

扉の向こうから複数の足音が聞こえてきた。リナはスタンガンでONにして、ドアノブにそれを押しつける。

・・・。

事務所の1階にいた4人の男。糸見の指示を受け、トイレに駆けつけると・・・トイレのドアの前で、一人の男が倒れていた。江浜の

娘を見張っていた男だ。

男「やろっ……。さっきのピザ屋だな!!!」

先頭の男がトイレの中にいる人物の正体を突き止め、真っ先にドアノブに手をかける。

バチバチッ！

瞬間、冬場の静電気とは比較にならない程強烈な電気が流れた。

男「ぐお!?!」

男は反射的に手をひっこめ、尻餅をつく。

.....

バチバチッ!!

ドアノブの音を確認したりナ。すぐさま地面にスタンガンを突き刺した。

電気はさきほどぶちまけたバケツの水を伝わり、反対側にいる男を感電させる。

男「ぐああああ!!!」

扉の向こう側から、悲鳴が聞こえた。

リナ「まだ何人かいる……。1分も持つか……。」

この時、扉の向こうの男が・・・銃を取り出している事に、リナは気づかない。

・・・。。

慎吾と江浜は事務所の裏にたどり着いた。壁1枚を隔てて、向こう側にはリナとあんずのいるトイレだ。

慎吾「鉄格子・・・」

（江浜「あんず！ 中の状況は！？」）

（あんず「リナさんが、扉の向こうの相手をせき止めているところ・・・」

でも、もうす・・・」）

パン！ パン！！！！

トイレの内外にいる全てに、銃声が聞こえる。

リナ「ちょ・・・」

2発の銃弾が、扉を突き抜けリナの横の壁にめり込んだ。

リナ「いよいよヤバいわね・・・」

リナはすぐにヘアピンをはずし、ポニーテールを止めているシュシュもはずす。

スタンガンのスイッチをヘアピンで固定し、常にON状態にすると・・・横にあったモップの先にスタンガンシュシュでくくりつけた。

そして扉の横に身を隠し、銃弾を避けつつドアノブと地面の水に電気を流す。扉を死守しながら、あんずに大声をかけた。

リナ「こっちはもう限界！！ お父さんに何とかしてもらって！！」

（慎吾「残るは強行突破しかない・・・」）

横を見ると、江浜が壁に向けて拳を垂直にあてている。

（慎吾「気功・・・？」）

江浜「・・・ふっ・・・」

呼吸を整え、壁に添えた拳に意識を集中する。

江浜「?!！」

かけ声と共に、手のひらからエネルギーを流し込んだ。

しかし・・・

江浜「・・・」

壁の表面が少しくぼんだ程度。

江浜「この壁の厚さでは・・・

うち破るには10分かかる・・・」

パン、パン！！！！

さらに銃声が聞こえた。

（あんず「もうすぐ侵入されそう！！」）

江浜は一瞬悩んだ後、娘に言葉を送る。

（江浜「あんず、壁に胸の高さで手のひらをあてろ！ 急げ！！」）

あんずは言われた通り、壁に手のひらをあてた。

江浜は意識を集中し、娘と反対側から壁に拳をあてる。そして調節するように・・・左下へと拳を移動させた。

慎吾「な、何を・・・？」

江浜「娘も鍛えてある！」

（江浜「あんず、1、2の3で発勁だ！」はっけい）

（あんず「わ、わかった・・・」）

江浜親子は静かに目を閉じる。

（江浜「1、2の・・・3！」）

江浜「?!?!」

あんず「?!?!」

2人は同時に気合いのこもった声をあげた。体内で練った氣きを、あ  
んずは手のひらを通し・・・江浜は拳を通し、エネルギーとして一  
気に放出する。

ビキビキビキ・・・

瞬間、壁に無数のヒビがはしった。

慎吾「な!？」

江浜「慎吾君、目を閉じておけ。次で壁が砕け散る！」

慎吾に指示すると、江浜はすぐまた娘に言葉を送る。

（江浜「あと1回！いくぞ！1、2の・・・3！」）

江浜「?!?!?!」

あんず「?!?!?!」

ドツツツツゴン!!! ガラガラガラ・・・

瞬間、鈍い音と同時に・・・2人を隔てた壁が一気に粉碎した。  
あたりを多くの粉塵が舞い散る。

慎吾「す・・・すごい・・・」

左腕で顔をかばいながら、慎吾が碎けた壁を見た。  
そこには人一人ひとが余裕で通れる壁穴が開いていた。

・・・。。

リナ「・・・」

抜け穴を確認したりナ。すぐにあんずに声をかける。

リナ「あんた先行って！　すぐ私も行くから！」

言われたあんずは、壁穴を通り抜け・・・外で待機していた父と抱き合った。

あんず「お父さん!!」

江浜「あんず!!」

強い抱擁をかわした後、江浜はすぐに娘の両肩を握る。

江浜「まずはここを逃げてからだ」

あんずが無言で頷いた直後、リナも壁穴を通ってきた。

慎吾「・・・・・・」

リナの後ろに、銃を持った数人の男も見える。

リナ「車どっち!？」

再会を味わう余裕もなく、慎吾に声をかけた。

慎吾「こ・・・・こっちです!」

いつものポニーテールとは違うリナの髪型・・・・とまどいながらも、  
慎吾が応える。

江浜「急げ!!」

合流した4人はすぐに事務所から離れるべく、走っていった。

リナ「・・・・・・」

去り際にリナは、ON状態のスタンガンをトイレに投げ入れる。

男「ぐわああ!!」

男「ぐうっ!!」

数名の男の悲鳴が聞こえた。

慎吾「な、何が!？」

走りながら慎吾がリナに聞く。

リナ「壁抜ける前に、洗剤混ぜた水を床にも壁にもぶちまけてきたのよ!

あのヌルヌル状態、靴以外に体が触れたら高圧電流の餌食よ!」

慎吾「あ! 水は電気を通すってヤツ!？」

リナ「バカ!! 水は電気通さないわよ!!」

慎吾「え!? じゃあ・・・」

パーン、パーン!!

慎吾「わ!!」

トイレを抜け出した1人の男が発砲してきた。

江浜「こっちだ!」

ビルの裏に隠れるように止めておいた車・・・すでにエンジンはかかっている。

駆け込むように4人が乗り込むと・・・運転席に座った江浜は、迷わず車のアクセルを踏み込み急発進した。

数発の銃弾を逃れた車は、大通りに出る。

リナ「はあ、はあ・・・何とか・・・」

慎吾「はあ・・・はあ・・・」

あんず「・・・」

江浜「・・・」

安堵のため息をつく4人。

しかし・・・

銅板の追跡装置が作動している事に・・・

気づく者はいなかった。

（第25話へ続く）

## 第24話 銃 撃（後書き）

### 次回予告

あんずの救出に成功した一行は、江浜の仕事場に移動し態勢を整える。

しかし、銅板に仕組まれた追跡装置により追っ手の影が迫っていた。再び追っ手から逃げるため、動き出す4人だが・・・

その時、江浜は慎吾に・・・慎吾の運命を変える物を手渡す。

次回 「 第25話 パワーストーン 」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5975x/>

---

徳川埋蔵金の謎

2011年11月8日02時07分発行